

〔表紙〕

家久公
光久公

寛永十五年 自正月
至二月

後
編 舊記 雜錄 卷九十三

1163 「正文在文庫」 「家久公御譜中ニ在リ」

〔以〕上

急度申入候、有馬之城〔等〕^{○未}乘取不申候〔付〕^{○間}、御手前之御

人數早々到此表、御越可有候、尚爰元之様子三原左衛門

佐方方可被申候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

正月朔日

石谷十藏

1164

松平大隅守様

人々御中

貞清〔判〕^{○花押}

「正文在文庫」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶々有馬陳所ニ三原左衛門殿爲御使御座候、上使

御陳近内藏助・喜平次付置申候、左衛門殿別而無御

等閑得御意由申越候、我等本望之至候、〔以〕上、

新春之於御慶者、幾度もく申上納候、有馬きりしたん

于今致籠居候、然者元日ニ城責候〔得〕共、未落去不仕、

板倉内膳殿御戰死之由候、是非を不得申上候、御人衆も

定而可爲御加勢と察存候、左も^{○候ハ、}今一左右次第ニ、我等

可罷渡と存候、御指南候ハ、本望ニ奉存候、猶口上ニ申

上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」 正月五日

相良^{○頼寛}忠岐守
頼^{○花押}

松平大隅守様

人々御中

「古御文書三拾三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

一筆申入候、然者貴殿御人數嶋原表江被差越候様にと、石谷十藏方申進由ニ候へとも、從江戶申來候ハ、其元之人數五六千程天草江差渡、警固のため被置候様ニと申來候、其御心得可被成候、委曲御家來三原左衛門方へ申達候、恐々謹言、

「米カキ」
「寛永十五年」 正月五日

松平伊豆守
信綱判 花押
戸田左門
氏鐵判 花押

松平大隅守殿

松平大隅守殿

戸田左門
松平伊豆守

從肥前有馬

「正文在大口地頭飯屋」

手形

一番立

人躰貳百貳拾人

大口衆中

右嶋原爲御加勢可被罷立候、分限之衆者人數成次第、無足之衆ハ三人間ニ夫一人ツ、才覺ヲ以可被召列候、賃、後日可被給候、鹿兒嶋持合之知行所之衆者、領主方可被列候間、所方かまハれましく候、持道具ハ鉄炮・弓・鏹たるへく候、普請具ハ先日被仰渡候様ニ可有校量候、飯米者出水船本ニて可相渡候、物頭前方指出を以可被請取候、

寛永十五年

鹿兒嶋

賦所□(印)

正月五日

新納加賀守殿

1167
寛永十五年戊寅

正月元日、野元源左衛門爲明府下士にて、三原左衛門重庸へ屬き、肥前に軍たちし妖賊と島

原に戦死、
年六十歳

二月二十八日、日高十兵衛府下土にて、島原軍行し、原城を陥さる時賊と戦て死之、下も同し

・有馬半五左衛門・帖佐小兵衛伊集院土・阿多六郎左衛門

出水・高城七郎左衛門重正大口土年・寺師内記宗信大口土年

谷口三左衛門同・久富木狩野同・赤川兵左衛門藤土加久・川

崎織部佐蒲生土・千左衛門新納加賀守小者

三月十日、渡邊安房綱琴月公に殉死下も皆おなし・鎌田豊前・谷山宮

内左衛門・高山備後・山田大泉坊・寺原早助年八・有

川久右衛門貞興・愛甲次右衛門廉宗年二・平田大久坊

宗如、

1168

「國分宮内澤氏藏」

○正宮御供所再興祈立祓之供物受取書 ケ條略ス、

寛永拾五年寅九月八日

澤永澄老 當番 智定坊

○萬治四年辛丑正月四日沢永賢判 國分噯衆中と書付有

之、略ス、

1169

『兒玉氏藏』

乍恐爲目安申上候事、

一先祖以來御奉公申來候処ニ、左様成筋目として、乍若

輩地頭職共被仰付、忝奉存候事、
時二十五歳

一連々一所被仰付候ニ付、衆中衆常ニ申合候処、人ニ相

付申儀無念ニ存候事、

一自然ケ様成時爲ニ御奉公數年兵道方心懸傳置候処ニ、

左様成儀ニ付、陣場之普請奉行被仰付候、弥忝奉存候

処、今度小番衆陣立被召留候付、我々迄被召留、遺憾

仕候事、

右三ヶ條かるく數申事ニ候得共、於罷成儀者、御

前之御取合偏ニ奉頼候、以上、

『寛永十五年』

正月六日

兒玉筑後守殿 利昌

平田孫六宗衆 (花押)

后改監物

1170

「雜抄」

今度陣中之大將役兩人江被仰付候、其上談合衆六人被召加候間、何事も此方江不及被得御意可申調由、以兒玉筑後守被仰出候、甲斐掃部介・有馬左近將監江申合候間、可被聞召達候、恐惶謹言、

正月九日

(川上)
久國

豊後守殿

下野守殿

人々御中

1171 急度申入候、仍今度陣中大將役、豊後守殿・下野守殿江

被仰付候、各談合衆ニ被相究候間、諸事此方江不及被得

御意可被□、殊ニ御病中之儀候、遠方江被申越候而ハ、

延引ニ可罷成候由、以兒玉筑後守被仰出候、委曲甲斐掃

部介・有馬左近將監申合候間、被聞召達、其御心得尤候、

恐々謹言、

正月九日

久國

喜入攝津守殿

澁谷石見守殿

山田民部少輔殿

三原左衛門佐殿

新納加賀守殿

1172

「御文庫中三番箱五卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

吉書

一 神社佛閣修造興行之事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三ヶ条之旨可有沙汰之狀、如件、

寛永十五年正月十一日

家久(花押)「御判」

1173

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

謹言上、雖未申通假捧一輪候、仍御分國中於本寺住院

被相勤、禪刹數多有之事候、殊當年者福昌寺之儀住院被

相勤候、畢竟爲御權力之由其聞得候、弥以向後斷絶無之

1174

様に、御助成奉憑候、此等之趣早々可申上處、依爲遠國連年之御無音非本意候、随而者九州曹洞家之爲法度、此度如意養被差下候、一天下稠敷法度申渡之間、御分國之儀是又同前之至候、爲御存知申上候、恐惶敬白、

〔朱力キ〕

〔寛永十五年〕

正月十一日

總持寺妙高庵

関徹○(花押)

如意庵

普藏院

全達◎(花押)

快村◎(花押)

傳法庵

洞川庵

龍吞◎(花押)

玄茂◎(花押)

進上 中納言殿

青油幕下

〔在包紙〕

能州總持寺

封

進上 中納言陸摩守殿

青油幕下

五院

〔御文庫拾八番箱三拾卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

1176

急度令啓入候、仍頭長童可差上之由爲被仰下由候而、從相良權兵衛尉殿承候之間、今度指上せ申候、船中何篇無緩様ニと存、城間相付上せ申候、其元能様ニ頼存候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕

〔寛永十五年〕

正月十一日

琉球國司

尚豊◎(花押)

御老中衆

1175

〔家久公御譜中〕

寛永十五年戊寅正月十三日、長子光久應召登營、阿部豊後守忠秋述台命曰、光久當速歸國看父家久之病且合力于信綱擊有馬之凶徒云々、光久奉嚴命即日發江戸、二月十四日到著有馬、而逢信綱述御旨、信綱曰、聞家久之疾重、早歸國而侍病床保養之可也、強之再三、依之光久發有馬、同十六日之夜到著于魔府、

〔光久公御譜中〕

「正文在文庫」「古御文書三拾五卷中以下同断」

已上

耶蘇宗之黨徒、據于肥前州島原城叛、光久在江府、請馳馬而擊之、寛永十五年正月十三日、阿部豊後守忠秋傳鈞命曰、當速歸國看父之病且戮力于松平伊豆守信綱而戮有馬一揆云々、光久歸邸館、即日促行至翌曉發江戶、家老伊勢兵部貞昌・使役相良丹後長廣從之、驛路勿々揚鞭、十六日到于駿府、時大雨滂沱而阿部川水浸岸絕渡、故止宿于府中、一日而日夜兼行至乎同二十三日到著大坂、即發大坂津開帆、二月十四日帥師至有馬、謁信綱述旨、信綱曰聞家久之疾病、宜早歸國侍湯藥矣、強之再三、蘇繫光久辞有馬、家老島津下野久元含家久之命、而在于此地、從于光久之駕、而同十六日夜光久下著覺府自寛永元年從家久一謁江都至于今、十五年始歸國、頃日家久病大漸、光久不就寢食侍牀褥、以二十三日逝矣、以故不能再師有馬、

一筆令啓達候、今度其方人數有馬表相向之由、從上使之

「島津内膳久兵家藏」「家久公御譜中ニ在リ」

「家久公御袖判」



一當年之人數諸法度相背間敷候、

一天下之御奉公ニ候間、諸軍衆爲心一國家之爲を可存事、

面々注進候、右之趣達 上聞候之處、手前所勞之節ニ付

而、薩摩守御暇ニ而被遣候、爲其如此候、恐々謹言、

正月十三日

阿部豊後守花押 忠秋判

酒井讚岐守花押 忠勝判

土井大炊頭花押 利勝判

薩摩 中納言殿

人々御中

「此一通重復、除クヘシ」

一豊後守・下野守大將役申付候、其外喜入攝津守・北郷
佐渡守・入來院石見守・新納加賀守・山田民部少輔・
三原左衛門佐談合衆申付候間、右八人之下知聊相背間
敷事、

一喧嘩・口論・濫妨・狼藉・大酒可爲停止事、
一諸法度若相背者於有之者、右八人之衆言上可仕候、少
茂遠慮有間敷事、
寛永十五年正月十三日

1179

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」
以上

去五日之御飛札、今十三日參着致拜見候、然者有馬之城
未落着無之ニ付、石谷十藏方も御人數之儀被申入候処ニ、
急度被仰付候旨、奉得其意候、然上ハ落着程御座有間敷
奉存候、如御書中松平伊豆殿・戸田左門殿御越ニ御座候
間、萬事差圖可被申と奉存候、先可申上ヲ、御氣色然度
無御座、御口中之御腫物茂少再発仕之旨、無御心元奉存

候、半井琢庵御葉被召上之由、尤奉存候、將亦御國隣國
別条無御座旨被仰下、珍重奉存候、猶追而可得御意候、
恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」正月十三日

佐々權兵衛
長次(花押)

松平大隅守様

尊報

▽◎

松平大隅守様

川崎丹波守
佐々權兵衛



豊後符内方

△

1180

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」
以上

如尊意改年之御慶、目出度申納候、寔御病中被思召付、
節◎御使札過分至極奉存候、此表之様子委曲三原左衛門
佐◎方可被申上候、隨而松平伊豆殿・戸田左門殿御當着、

万事被申付候、猶奉期後音候、恐^〇謹言、

〔朱カキ〕

〔寛永十五年〕正月十三日

牧野傳藏

成純〔花押〕

松平大隅守様

參尊報

▽〇

松平大隅守様

尊報

牧野傳藏

有間方

△

1181 〔全〕「家久公御譜中ニ在リ」

去二日之貫札拜見仕候、如被仰下候、新年之御慶玆重奉
存候、御病中寔切々被入御念忝奉存候、此表之様子嶋津
下野方可爲演説候、猶追而可得御意候、恐^〇謹言、

〔朱カキ〕

〔寛永十五年〕

正月十三日

馬場三郎左衛門

利重〔花押〕

松平大隅守様

參御報

▽〇

松平大隅守様

參貴報

利重

1182

刀

馬場三郎左衛門

△

〔全〕「家久公御譜中ニ在リ」

已上

一筆令啓達候、今度其方人數有馬表相向之由、從上使之
面々注進候、右之表達 上聞候之處、手前所勞之節候付
而、薩摩守御暇ニ而被遣候、爲其如此候、恐^〇謹言、

〔朱カキ〕

〔寛永十五年〕正月十三日

阿部豊後守

忠秋〔花押〕

酒井讚岐守

忠勝〔花押〕

土井大炊頭

利勝〔花押〕

薩摩

中納言殿

人々御中

1183

〔全〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶以御病中之處、被爲入御念貫札別而忝奉存候、以
上、

御使札忝致拜見候、如御意改年之御慶珍重奉存候、先以

公方様弥御機嫌能、元日・二日御表江被爲成、諸大名衆御目見御座候由申來候、上下萬民共ニ乍恐目出度義、御

同意奉存候、隨而鱒實卷一被懸御意、過分至極奉存候、

此表之義去朔日被一揆城被攻懸候處、乘得不申候、板倉

内膳正討死被仕候、諸勢も勞申故、松平伊豆守・戸田左

門被相着、肥後筑前・寺澤兵庫頭人數被指加義御座候、

猶御使者嶋津下野守〔敗〕可被仰上候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕 正月十三日

林丹波守〔勝正〕

吉政〔花押〕

松平大隅守様

貴報

▽ ◎ 松平大隅守様

林丹波守

從有馬

△

〔正文在文庫〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

猶御病中ニ御六ヶ敷可有御座處、切々預御書誠忝奉

存候、以上、

預御使札〔忝〕奉存候、如被仰越候、新春之御慶目出度申納候、先以御病氣于今御本復不被成候由、御苦勞之段、

奉察候、拙者儀天草一揆多御座候由承候間、先天草〔江〕〔八〕

罷越申候處ニ、彼一揆共嶋原へ皆々罷越、天草ニ者一人

も不罷有候付、則嶋原へ渡罷在候、此表之様子者、去朔

日惣攻仕候處、城地要害能、其上板倉内膳正被致討死、

十藏も我等も手負申程之仕合御座候付、先御人數引上乘

取不申候、松伊豆守殿・戸佐門殿被致參着、〔万〕端被申

付候、委細者三原左衛門佐殿可被申入候間、書中不能

具候、恐〔々〕謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕

正月十三日

松平甚三郎〔行隆〕

〔徳恒力〕
〔花押〕

松平大隅守様

貴報

▽ ◎ 松平大隅守様

徳恒〔44〕

松平甚三郎

△

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

尊書忝致拜見候、拙者事嶋原表一探之儀ニ付、冬年〆

罷下逗留仕事ニ御座候、御病中被懸御心被示下、誠以過

分至極奉存候、尚重而可得御意候、恐〆謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」正月十三日

榊原飛彈守〆（花押）
職直〆判

松平大隅守様

尊報

▽
◎
松平大隅守様

榊原飛彈守



〆

△

「全」家久公御譜中ニ在リ

已上

一筆致啓上候、薩摩守殿御仕合能御暇被進、御上國目出
度御事申計無御座候、其元御大慶奉察候、然者嶋原表相
支、先手衆數多損申事、各驚存候、重而松平伊豆守・戸

田左門被指遣候、猶又近國之御人數も被寄候由、早速可
有御誅伐〆と致推量候、委細追く可得御意候条、不能具
候、恐〆謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

正月十三日

松平越中守〆（花押）
定綱〆判

中納言様

▽
◎

薩摩
中納言様

定綱



松平越中守

△

「全」家久公御譜中ニ在リ

已上

尊書忝拜見仕候、如貴意新春之御慶萬々申納候、先書ニ
も乍御報如申上候、御爲色無〆心元奉存候、自然爰許相
應之御用ニも御座候者、可被仰付候、委細之段御使者へ
頼入候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」

正月十四日

戸田左門

氏鐵(花押)

松平大隅守様
尊報

岩切六右衛門尉殿

新次郎四郎殿へ渡し候、

▽◎

松平大隅守様

尊報

氏鐵



戸田左門

△

1189

「村田氏藏」

嶋原

軍衆引飯米指出留

寅正月十三日但寅ノ正月十三日ニ米津江參着、

一合人数七拾六人ハ

新納加賀守殿
「忠清」

内夫丸拾八人

一乘馬壹疋

右外ニ次郎四郎參候ハ、別ニ指出可申候、以上、

1188

「新納氏忠秀譜中」

十五年戊寅正月

公遣父忠清爲談合衆若年寄、舊號云、將大口兵如肥州與助 官軍

討賊於島原時、忠秀亦騎馬從軍、二月猶陣有馬、二十一

日、及仁禮左近將監景頼高尾野地頭・村尾源左衛門尉重候須木地頭

・宮原壹岐守景之大口、訪伊地知左右衛門重政加久藤地頭陣屋、

重政者弟重頼之義父也舊譜不載、忠秀從行然訪重政替、見于古簿、則其陣有馬明矣

□書申越候、仍新納次郎四郎殿爲御使俄ニ嶋原へ□越候、

此度之軍衆并ニ於其地飯米□渡候、恐々謹言、

「寛永十五年」正月十三日
「川上因幡守」
久國

1190

「御文庫廿三番箱廿卷中」「写家久公御譜中ニ在リ」

條々

一今度爲吉利支旦徒黨御仕置、我等有馬表へ被爲指越候

間、兩人無下知城責其外之儀も、私に被申付間敷事、

一喧嘩口論堅停止之事、

一不可押買狼藉事、

一在陳中人返し停止之事、

一於小屋場火之本かたく可申付事、

付馬不捕放様ニ可被申付事、

一毎度申渡儀共無懈怠様ニ、下々迄急度可被申付事、

一若陳場を望來る諸卒人於有之者、其家中之もの内意ニ

軍法相背間敷旨を申定、可被借置之事、

右可被相守此旨者也、

寛永十五戊正月十四日

戸田左門

松平伊豆守

1191

「光久公御譜中」北郷久直譜中ニ在リ正文有之トアリ

爲年始之祝儀早々使者被差越、令祝着候、先以慶事珍重

々、仍我等儀一昨十三日俄々御暇被下、即昨晚打立候

て、肥前如有馬出陣候、分國中之人數皆々彼表へ可罷出

候、其方儀も定而可爲出陣候間、期面入候、恐々謹言、

「朱カキ」寛永十五年正月十五日

光久○〔花押〕御判

北郷式部太輔殿

1192

「在新納氏譜中」

□城番衆方參候御狀之御返事御持せ候間、此方方承

候得共、此方へ者不參候、無心元存色々見申候得共、

□之内へ無之候、又平戸方之狀□持せ申

候、以上、

去十三日之御狀昨晚到來、細々令披見候、□

一黄門様御氣色無替儀候、御腫物茂膿候而汁流候由□

道益被申候、御咽氣御せきも止不申、よるく御寢不

成故、殊外御草臥にて候、第一御食前へハ□粥共ニ

四度參候、此比者御粥一度ツ、食二度合三度□椀ニ

七分ほとつかれ候を、皆參時も御座候、□殘候事も

御座候節々見上申候、年内方者御□被成と見上申候、

何共心遣ニ存候、急度以御使□候間、其刻巨細可申入

候事、□城責之儀、兼松弥五左衛門殿江戸へ被爲着□

事次第可有之、と取沙汰御座候、左候ハ、程延□衆之

兵糧續かね可申候、船を追と御戻候ハ、□遺有へく候事□次第ニ天草へ御繰渡由、出水方申來候□新次郎四郎殿を以□御意之通申入候、定而可有御談合と存候、其趣早と承度候事、

一 出水・大口之人數半分可被召置由、江戸方被仰下候、如其可被仰付歟と出合候処ニ、此節者御用心茂人間敷候、結句被召殘候へハ、隣國之聞得茂可惡事、□立候而者可有如何哉と、以御狀被仰遣候、□狀にて如仰、此節者境目御用心も人間敷□次第可被仰付候、其首尾追而賦所迄被仰儀候ハ、御返事申候、不相届候哉、無心元存候、大口之番所人も入候而、半分可相立由、加州被仰候、出水者成次第御立尤候事、

一新納加賀守殿有馬江被成御同心度之由、被仰候□之狀にて山民少老迄如其申越候、弥御越候、御談合尤候、恐惶謹言、

正月十六日

久國

野州様

御報

1193

「御文庫三番箱光久公六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

急度致啓上候、然者鳴原之儀ニ付、九州衆不殘今月十二日ニ御暇被遣、從 御城直ニ被打立候衆茂御座候、大略十二日之夜半被打立候、〔吾〕^{◎我}等儀ハとかく被仰出候間、翌朝以伊勢兵部少輔御年寄衆へ得御意候処ニ、十三日之昼程 御城江被召寄、御暇被下候、則十四日之曉打立申、駿河府中迄十六日之晚罷着候處ニ、昼程方大雨ニ而、阿部川以外出來申、渡り不罷成ニ付、十七日者此地江致滞留候、渡り御座候ハ、夜中ニ成共打立可申候、大名衆皆くから尻ニ而、人をも不列上りの躰ニ候間、〔吾〕^{◎我}等年若ニ而緩くと仕候而ハ、江戸之聞へ如何ニ候間、從爰元供之者三人〔ほと〕^{◎程}馬ニ而召列、から尻ニ而大坂迄罷上るへきよし之覺悟候、就其はや御國之人數之儀、有馬表之上使より爲被申越由、御年寄衆より被仰候、定而可罷渡候、於大坂承合、いまた御國之人衆有馬へ不參候ハ、如其元早と罷下、人數召列尤ニ候、又有馬へ人數參候ハ、直ニ彼表江參候へと、御年寄衆方被仰聞候間、致其

覺悟候、我等出陣仕上者、御國之衆不殘可罷立候、就中御馬しるし今度申請、高麗以來之御佳例ニ持せ申度候間、被仰付可被下候、委細之段者伊勢兵部少輔其許家老衆へ可申遣候間、不能詳候、誠惶誠恐敬白、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕

正月十七日

薩摩守

◎〔花押〕
光久〔御判〕

進上 黄門様

〔張懸〕墨書
〔此御書家久公御譜中ニハ無之〕

1194
〔正文在文庫〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

尊書殊密柑杵箱・鯽二ツ被懸御意、忝奉存候、仍御氣相干今然々無御座候由、笑止千萬ニ御座候、此間以書狀成共可申上処、従旧冬當地令在陳候故、御無音罷過候、爰許貴理師旦于今相替儀も無御座候、猶重而可得尊意候、爰恐〔々〕謹言、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕 正月十八日

立花左近將監

忠茂〔花押〕

薩摩中納言様
尊報

▽◎
薩摩中納言様

尊報

立花左近將監

1195
〔全〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

如貴意未申馴候處、尊札拜見、殊白砂糖一桶・鯽二被〔掛〕御意候、則嶋津下野守殿御持參ニて御座候、誠以御懇意之至忝仕合ニ奉存候、先以御氣色如何被成御座候哉、無心元奉存候、自是以使者可申上儀ニ御座候へ共、却而憚る存延引、致迷惑候、如仰今度有馬表へ罷越居申候、此等之趣可得貴慮候、恐〔々〕謹言、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕 正月十八日

松大隅様

尊報

細川〔立孝〕

立允〔花押〕

▽◎

松平大隅様

参

細川

立允

「新納家譜中」

□十六日之御狀昨晚到來、具令披見候□新納加賀守殿人數千程被召列、有馬江可相渡□野州老被仰候哉、今程者船無之候間、先天草江□渡海相濟候て已後ニ可有御越由御談合候哉、□有馬江も可被仰越候、千程不成候者、大口衆□人手之衆七八十程にてても可被爲渡哉と□仰候、先被成左様ニ候て、次第ニ人數者被遣尤存候、民部少殿儀者上使へ爲御使可被參由、去十三日新納次郎四郎殿を以申越候、是茂舟さし合可申候、先手廻之衆迄ニて御渡海尤候、御書□山田民部少輔申候通被遊候間、御延引あるましく候、殊ニ吉田次郎兵衛殿明日有馬江爲御使被參□御狀ニ茂前々被仰候、御加勢必被仰付候様ニと御座候、其首尾不致相違候様ニ御校量尤候、□玉藥者兵具奉行衆壹岐主水佑殿・東郷喜右衛門殿其地へ被參候間、可被仰候、

ノ

右

△

□之儀、民部少輔殿被爲調置候を、

先百枚早々□江可被遣由、去十三日之狀ニて申越候、又ハ□召候て可被尋調由候て、大鋸大工去十五日ニ差越候□爰元江被仰越てハ、筈ニ合申間敷候間、爲中取市來八左衛門殿出水江可被相越由申候、物奉行者岩切六右衛門尉殿・川上彦左衛門尉殿、船奉行者平田民部少殿・是枝喜右衛門殿・京泊江者川越三右衛門尉殿船手兵糧可被承由候て差越候、何事茂此衆へ御用可被仰越候、

一去十三日天草之久田間江被成着船候哉、其由入御耳申候、能時分人數渡海なされ□御満足之由、被成御意候、山狩之儀涯分可被入御念候、兎角地下之衆へ能く被成御尋候ハて□知ましく候、若切死丹一人成共御搦捕候者、以杖可被成御問付候、彼是能様ニ御談合肝要候、恐惶、

正月十八日

宿次ニ而被遣也

久國

澁谷石見守様

北郷佐渡守様

山田民部少輔様

喜入攝津守様

豊後守様

御報

「御文庫拾八番箱卅卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

天草立軍衆相究分

一与

合人數三千七百七人

下野守殿

内

一人躰千七百五拾五人ハ鹿兒嶋并外城分

右外御賦之内鹿兒嶋衆十式人、當分嶋原へ御座候御

人數、又諸湊方船乘廻候而直ニ天草へ被渡候故、指

出無之故人數不究候、并鹿兒嶋・吉田衆中前ニ嶋原

ニ被相渡由候、我々不究候、

一倅者夫丸千九百五十式人 右同

一与

合人數三千六百九人

豊後守殿

内

一人躰千七百拾人 鹿兒嶋并外城分

右外鹿兒嶋衆出水御地頭合十五人、先ニ御渡ニ付、

人數不究候、并舟乘廻衆右同顯娃衆中未無到着候故、

不究候間除、

一倅者夫丸千八百九拾九人 右同

一与

合人數三千六百九十式人

北郷佐渡守殿

内

一人躰千七百四拾四人 鹿兒嶋外城分

右外鹿兒嶋衆十三人嶋原へ被相渡候、又諸湊方船乘

廻ニ付、其所方飯米被請取、直ニ出船候故人數不究

候、市來衆中御賦之内四十人不足ニ候、飯島方直ニ

吉利三郎九郎殿召烈被相渡候哉、不相知候、高江衆

中右同、

一倅者夫丸千九百四十八人 右同

浮衆船奉行与迎之分

合人數式百四十五人

外ニ曾木甚右衛門尉殿・町田五右衛門尉殿嶋原へ被參候故人數不究候

内

一人躰式拾壹人

鹿兒嶋衆

一倅者夫丸式百廿四人

兵粮渡衆

合主從拾五人

内

一人躰五人

一倅者拾人但辨取籠指出無之候へ共、大方如此候、

惣合人數壹万千式百六拾八人

内

人躰五千式百三拾五人

倅者夫丸六千三拾三人

右者出水米之津并黒之戸にて人數相究分也、

寛永十五年正月十九日

賦所

猪俣爲右衛門尉判[◎]_(花押)

村田郷左衛門尉判[◎]_(花押)

相良左助殿

伊東二右衛門尉殿

鎌田源左衛門尉殿

喜入久右衛門尉殿

參

1198

「新納忠秀譜中」

〓十八日之御狀今朝出水衆持參、令披見候、江戸方之御狀案文儘ニ請取申候、

一天草江人數渡海候而、山を被爲狩候得共、きりしたん

不居由被仰候、其後天氣能候間、弥山を可被爲狩と存

候、追々御左右待申候、

一新納次郎四郎殿を以如申、陳へ御加勢之儀、涯分以御

談合可被仰上候、就其吉田次郎兵衛殿爲御又〓^{「本マ、」}差

越候、可被聞召届候、

一黄門様御氣色然々茂無御座候、此比者御息をつよく御

ひき被成候故、横ニ不成御寢故、殊外御草臥被成候、

「雜抄」

第一御食おとり申候間、心遣迄候、巨細者次郎兵衛殿
可被仰候間、不及申候、恐惶謹言、

正月廿日

久國

山田民部少様

一書申候、仍松平主税殿・伊東大和守殿、富岡之御番之
由候、自 黃門様御狀被遣候、御届可被成候、我等前方
大和守殿家老衆へ狀遣候、其地江嶋津豊後守殿・喜入攝
津守・北郷佐渡守・澁谷石見守・新納加賀守爲物頭差渡
候間、御用之儀候ハ、可被仰間由申渡候、又 黃門様御
氣色相おとり、今朝者過分ニ吐血出申候、心遣千萬ニ候、
此地江御用之儀ハ、出水江市來八左衛門殿御坐候間、可
被仰越候、又 黃門様縱御大事ニ成立候共、軍衆者不引
取御奉公申候様ニと、被成 御意候、替儀候ハ、可申入
候、恐惶謹言、

正月廿一日

久國

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

豊後守様

喜入攝津守様

北郷佐渡守様

澁谷石見守様

新納加賀守様

尊書殊更御肴被懸御意候、誠被爲思召寄、如此之段忝奉
存候、爰元別ニ相易儀無御座候間、御心安可被思食候、
猶期後音之節候、恐^⑤惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」

正月十九日

榊原左衛門佐^(職信)

職元^(花押)

薩摩中納言様

尊報

▽◎

薩摩中納言様

榊原左衛門佐^(職信)

7

△

1202

「全」家久公御譜中ニ在リ

猶拙者疵之儀、頓而平愈可仕と存事ニ御座候、以上、

▽
薩摩中納言様

職直

榊原飛驒守



1201

「全」家久公御譜中ニ在リ

已上

尊書殊更御着被懸御意、誠以過分至極ニ奉存候、世悴左衛門佐所へも御着被下、是又忝奉存候、當城未落着不仕候、併何茂不致由断候間、御心易可被思食候、様子之儀、鳴津下野殿・三原左衛門佐殿方可被申上候間、不能審候、恐惶謹言、

「朱カキ」寛永十五年

正月十九日

榊原飛驒守

職直(花押)

尊報

1203

「全」家久公御譜中ニ在リ

已上

「朱カキ」寛永十五年

三月十九日

薩摩中納言様

松平甚三郎

(行陸) 徳恒(花押)

預御使札辱致拜見候、先以御氣色如何御座候哉、無御心元奉存候、然者彼一揆共籠居候城之儀、松平伊豆守・戸田左門被罷越、如何にも緩々と可被申付様子御座候、鳴津下野殿・三原左衛門佐殿毎度參會、萬事申談候、委細者右兩人衆方可被申入候間、書中不能具候、恐々謹言、

尊書辱致拜見候、仍此表未別条無御座候、併松伊豆殿・

戸左門殿萬事被申付候条、近日退治可仕奉存候、委曲被

爲付置候、從兩人衆可被申上候、恐々謹言、

「朱カキ」寛永十五年 正月廿一日

牧野傳藏

成純(花押)

松平大隅守様

參尊報

「全」家久公御譜中ニ在リ

以上

御使札忝致拜見候、此表去朔日之仕合、先御報ニ如申上
御座候、其後別条無御座候、嶋津下野守殿・三原左衛門
佐殿御指越被成、^{◎痛々}「思召候」申承義ニ御座候、猶相替儀御
座候者、御兩人迄可得貴意候、恐^{◎惶}謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」 正月廿一日

林丹波守
^(勝正)
吉政^(花押)

薩摩中納言様

貴報

「全」家久公御譜中ニ在リ

山田民部少殿當地へ被遣候付而、尊書忝致拜見候、最前
私方御人數當地へ被遣候様ニと申入候、則御返答承届
候、重而嶋津下野殿を以、當地へ弥御人數被遣度之旨被
仰下候、其段伊豆殿・左門殿具ニ申談候、從江戸上意、
御人數天草迄被差出被爲置候様ニと之儀ニ候間、被任其
儀可然之旨、當地ニ被罷在候御家老中へ、伊豆殿・左門

「全」家久公御譜中ニ在リ

返々御氣色乍恐無御心元奉存候、以上、

當月十三日之尊書忝拜見仕候、如被仰下候、當地古城未
落城不仕候付而、今程築山・せいろう・竹杷仕寄など無
油断申付候、然者御手前御人數をも可被爲指越之旨、御
尤奉存候、別爰元入申様に茂御座候者、松平伊豆守相談
仕、何時も從是御左右可申上候、委細之段山田民部殿可
被仰上候、恐^{◎惶}謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」 正月廿三日

戸田左門
氏鐵^(花押)

松平大隅守様
尊報

殿被仰渡候、猶重而可得貴意候、恐^{◎惶}謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」 正月廿二日

石谷十藏^(貞清)
爲成^(花押)

松平大隅守様
尊報

1207

「全」家久公御譜中ニ在リ

尚く御病中被懸御心忝存候、〔以〕上、

爲御見廻被下澁谷四郎左衛門尉方、去八日之貴札致拜見

候、殊琉球酒一壺・鰯塩引二被懸御意候、遠路被懸御心、

別而忝奉存候、御煩未然く共無御座通、四郎左衛門尉方

物語承、無御心元存候、爰許于今相易儀無御座候、追

付諸手仕寄ニ成可申と存候、將又昨日府内御目付衆より

の次飛脚ニ、上使衆へ申來候ハ、鍋信濃殿・有玄蕃殿・

立飛驒殿・越中守なども御暇出、歸國之由御座候、水日

向殿・小笠原一門も當地へ被參候通ニ御座候、其外爰元

之様子御使者可被及見候間、不能具候、猶期後音存候、

恐惶謹言、

「朱カキ」寛永十五年

正月廿三日

細川肥後守

光利花押

松平大隅守様

貴報

▽◎ 松平大隅守様

參

細川肥後守

1208

「全」家久公御譜中ニ在リ



有馬方

△

以上

御使札忝奉存候、如貴意當城御番被仰付候而、二三日以

前此地致着船候、然者切支端共未當嶋中隱居候付、山さ

かし被成候様ニと、松平伊豆守殿・戸田左門殿方被仰入

候哉、就夫御人數被差越候由、得貴意存候、爰元相當之

御用等於御座候者、可被仰聞候、隨而御氣色于今然と無

御座候由、無御心元存候、猶追而可得貴意候、恐惶謹

言、

「朱カキ」寛永十五年 正月廿五日

伊東大和守

祐久花押

松平大隅守様

貴報

松平主税助

忠重花押

▽◎ 松平大隅守様

參貴報

忠重

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

預御使札忝致拜見候、先以御氣色于今然共無御座、御草臥被成〔御〕^{◎候}通被仰下、御苦〔身〕^{◎勞}之段奉察候、不及申入候得共、御心靜御養生專一御座候、隨而此表仕寄築山以下過半致首尾候、兎角急仕儀ニ而無御座候、將又御人數御領分之内、出水迄被出置候通被仰下得其意奉存候、萬事嶋津下野殿可申談候、爰許之様子者三原左衛門殿頓而御歸國之由ニ候間、委細可被仰入候条、書中不能具候、恐く謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」正月廿六日

松平甚三郎^(行隆)[◎]徳恒^(花押)[◎]〔判〕

林丹波守^(勝正)[◎]吉成^(花押)[◎]〔判〕

松平主税助

伊東大和守

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

尚く、上様御機嫌一段能御座候、貴様御氣色之御吉^(左腕カ)右承度存候、〔以〕[◎]上、

態以飛脚申上候、我等儀正月十二日ニ御暇被下、同廿六日ニ嶋原へ着仕候、夜ニ日ニつき參候故、道より以書狀も不申入候、御煩又發申候由、下野殿物語承驚入如斯候、御吉左右待存候、爰元きりしたん之儀替儀も無御座、唯今者仕寄仕候、臆而堀きわへ仕寄可申、我等など仕寄廿間計堀きわへ寄申候、惣手を待合候へと之儀ニ而、諸手を待合申候、薩摩殿之儀も御暇被進候、御満足と存候、爰元へ於御越者、御心易可得御意候、恐く謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」正月廿七日

細川越中守^(花押)[◎]忠利^(判)[◎]〔判〕

牧野傳藏[◎]成純^(花押)[◎]〔判〕

松平大隅守様

松平大隅守様

人々御中

▽◎ 松平大隅守様

細川越中守

参

嶋原右

△

1211

天草立軍衆出水・米之津并し、戸ニ而人數相窮分也、

合人數三千七百七人

下野守殿

合人數三千六百九人

豊後守殿

合人數三千六百九拾二人

北郷佐渡守殿

浮衆船奉行と迎之分

合人數式百四拾五人

外曾木甚右衛門殿・町田五右衛門殿島原江被參候

故人數不究候、

内人跡式拾壹人

鹿兒島兵糧渡衆

合主從拾五人

内人跡五人

總合人數壹萬千式百六拾八人

内人跡五千式百三拾五人

倅者夫丸六千三拾三人

寛永十五年正月十九日

賦所

1212

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

寛永十五年正月廿九日

就御出陳種々御賦頭書之帳

御備之覚

△一昇 百本

△一鉄炮 三百挺 外城衆中

△一弓 二百張 同

△一鑓 二百本 御道具衆

一馬乘衆 五十騎 但分限役ニ出候馬者此外、

一御陸衆 百五十人 但外城衆者此外

一被召立候乘馬五拾騎云

如右先談合申候、薩州様御下向候間、可相易哉、此

外人衆者次第ニ重可申と見得申候、御旗本之賦爲御覽持せ申候、

野州老へ書付遣候、

○一御供之賦・軍衆の兵糧・船手之様子被爲聞候衆、喜

入久右衛門尉殿・鎌田源左衛門尉殿・伊東二右衛門

尉殿・相良全助殿、

△一御兵具方送夫馬、御普請方其方諸調方新納右衛門佐

殿・仁礼主計助殿・新納勘解由殿被爲聞候、

D一御供衆都合之事、但日向庄内肝付衆二番立者罷歸候

而又被立候、

D一有馬・天草へ被居候人數都合之事、大形上下九千欸有馬

へ三千二百六十二人、内七百八十二人へ被相帰之由候、天草へ五

千二百八人内へ被相帰候、殘而有馬・天草へ人衆都合六千五十

七人罷居候、

○一馬乘并御陸衆人衆之事、

D一御持道具之事國分民部少輔殿存、

△一御番道具數之事、道服千四百有之、

一備奉行与分の事、

D一普請奉行之事相良滿右衛門先ニ被參候、

市來八左衛門尉・岩切六右衛門尉・川上彦左衛門尉米津へ

被罷居候、

D一兵糧賦衆之事、物奉行付衆三十人欸、御分國中泊と

ニて軍衆飯米之事物奉行沙汰有之、

一軍衆御法度書之事、先年龍伯様 惟新様 黄門様以

御談合之上被仰出候、其留御座候欸、

D一御舟手奉行之事、是枝喜右衛門尉殿・平田民部少輔

殿、

一御先備二番ぞなへ賦分之事、

一玉藥賦衆之事、但十人欸但別ニ賦有之

○一御供衆与分の事、

一与分ニ付さし物などの可有驗事、

○一外城衆御供ニ可被參所之事、

一螺數定之事、

一火番觸賦の事、

一 あひしるしの事、

一 鍵あひしるしの事、

△一 御兵具衆の事、三原傳左衛門尉殿・平田藤右衛門殿

○一 御使番定之事、付乗馬衆・御陸衆之内可被定置哉之

事、

一 うつり俵の事、楯竹たば・熊手かき——のほり橋

一 なた・鎌・斧・鍬の事、御藏入又外城可被仰渡哉、

一 馬可被出衆の事、

一 具足可被出衆之事、

一 昇奉行三人たるへき哉付昇さし之事、

△一 鉄炮備頭五人、同小さし千五十本、

△一 弓そなへ頭三人

△一 鍵備頭 三人

一 惣備奉行 拾騎

一 御備なをし 二十人

○一 御假屋見舞衆 三人早者ニ被參候而、普請被申付候

一 御南戸衆之事、

D 一 御使衆之事、伊東二右衛門尉殿・喜入久右衛門尉殿

一 御右筆衆の事、

D 一 厩 國分番刀長被仰付候

○一 酒奉行并ともし奉行之事、

D 一 御振舞奉行付包丁人又料理小番之事 國分十右衛門尉・相

良主計助被仰付候

○一 御代官之事 松山六兵衛尉被仰付候并付衆迄相濟候

○一 繪書衆の事、

△一 のほり・具足數差出之事、

○一 御物荷奉行之事、

○一 夫馬可被下無足衆の事、

D 一 御小者衆・御道具衆・御中間衆數付送夫馬の事、

○一 御膳配衆之事、

○一 御同朋衆付御藥湯坊主之事、

一 御小性衆之事、

○一 御評定所筆者衆の事、

D 一 御祈念坊主但寶珠院、

D 一醫師衆但外科衆之事、

D 一納戸衆者喜入丹波守殿・平野六郎左衛門尉殿・東郷

藤兵衛尉殿・弟子丸治左衛門尉殿、

○一進物奉行之事、

○一御旅中大番・小番・奏者番・御門番か、り火焼之事、

D 一賦奉行之事村田郷左衛門尉・猪俣爲右衛門尉米津へ被罷居候

一陳僧之事、

○一衆中觸衆の事、

一給人の米被召留、仕上用意之衆於有之者、長崎又大

坂被直成ニ欵、代銀可有御談合哉之事、

△一御旗之役の事、

○一役者之事、

△二月朔日
一御幕の事、進物藏へ十文字幕一頭有之由候、船手へ

も可有之候哉、又物奉行へ三頭可被仕立由、新納右

衛門佐殿を以申渡候事、

一緞子幕の事、

○一被罷立候衆之送狀賦所方可被出事、

△一阿久根 「御泊」 西方 「畫御伏」 向田 「御泊」 市來湊 「畫御伏」

△一宮之城 「御泊」 蒲生 「畫御伏」 普請御賄之儀

二月七日

右兩条新納右衛門佐殿可有首尾由申渡候、

此方へ可入御賦之覺

一殿役奉行・船奉行・普請奉行・殿中奉行・町奉行・

高奉行・出物請取衆・御藏入取納衆・米藏・琉球藏

・金銀藏・雜物藏・進物藏・酒藏・御兵具奉行、御

馬屋物奉行、

一御使衆之事、

一 小番并大番衆の事、

一 おく番の事、

一ぬめり川并御臺所御番衆事、

一御南戸衆之事、

一御祈念奉行之事、

一御用之御細工人の事、

一御道具衆・御中間衆・御小者衆、

一 振舞奉行・包丁人・小番之者、

一 納戸衆・御代官、

一 御右筆、

一 御評定所筆者、

一 御同朋衆付茶湯坊衆、

一 衆中觸衆、

(○)△は島津家久譜ニヨリ補フ)

1213

「御文庫廿三番箱廿卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

「口書ニ」

薩州様有馬へ渡海御無用之由申來候書狀之写

二月五日ニ到來候狀

晦日之御狀今日八ツ時分披見仕候、然者 薩州様大坂へ

廿三日ニ被成御着、其晚 御出船、日向筋御下向なされ、

鹿兒嶋へ一日御逗留候而、先獅子嶋へ御渡海被遊、伊豆

守殿に被成御尋、有馬へ可有 御出張由被 仰下候哉、

先以目出度存候、今朝廿九日の御狀披見仕候、其趣ニ者

此元のことく直ニ 薩州様御出張之由承候間、御陳場之

儀則豆州へ我等罷出、御直ニ得御意候へハ、當時此方之

人數餘多御座候間、 薩州様御越之儀者御無用ニ候、縦

御越候共天草を被成御見廻、 黄門様御煩を專ニ御見廻

候而可然候条、此元へ御陳場など、有事入間敷候間、其

心得可仕由堅被仰聞候、左候而豆州御前を罷立候処ニ、

石谷十藏殿我等を御送被成被給候者、只今豆州如被仰、

此地へハ 薩州御越御無用に候と被仰聞候間、出合之通

申入候、 薩州様御着候て出水迄御越、獅子嶋へ御滞留

候て、豆州へ可被得御内意由、八左殿迄被仰越候哉、其

段申來候、左様ニ候ハ、相知可申候、恐惶謹言、

「朱力キ」
寛永十五年

二月二日

下野守

久元在判

三原左衛門佐様

川上左近將監様

御報

1214

「家久公御譜中」

「正文在島津圖書久見」

猶々阿久根へ可被成御一宿候處、地頭噯衆其地へ被

居候而、何篇可爲不自由候条、四郎左衛門殿可被罷

歸候哉、噯衆可被戻候哉、被成御談合可被仰渡候、

將又出水表迄御泊・ひる御休賦別紙ニ遣申候、已上、

去晦日之御狀夕令披見候、

一黃門様御氣色此三日者御輕御座候、今朝も御同前候、

先以目出度奉存候、

一薩州様御着船之御到來今朝迄者無御座候、此中之大雨

故、海陸共ニ少者可爲御延引かと存候、御迎之衆者追

々申付差越申候、

一軍衆爲祈念、大ふう六十六本之御神舞被仰付候、御禮

之通具申上候、

一軍衆兵糧續かね可申由申越候處、式千余可被召戻由被

成御談合、天草へも被仰越之段、承届候、

一天草之御番手、最前從伊豆守殿・左門殿者五六千可差

渡旨被仰出候、又從江戸者二三千可被遣由候間、畢竟

其許御談合次第と申候處、江戸御奉行衆之御下知にて

候哉、左様候者松伊豆守殿・戸左門殿へ被得御意、可

被相定由御尤候、併兵少老御供ニ而下向候条、談合申

候て重而可申越候、就其天草へ被居候衆、^(マ)蕨藉なきや

うに、其許より慥可被仰遣事肝要候、

一富岡之物音何とぞなされ、具被聞召通候て御注進御申

尤候、如仰委儀者知申間敷と存候へ共、可被入御念候、

一軍衆高百石ニ付三人軍役、其外高之多少ニより賦之様

子御書付被遣候、爰許賦衆へ見せ申候へハ、一段尤之

御談合之由被申、被遣候書立を以今度御供衆之賦も仕

由被申候、

一越中守殿去十六日鍋嶋殿、廿九日飛驒守殿・玄蕃頭殿

先晦日迄無御着由、則達上聞候、

一今日從山川申來候琉球舟、米式百六十石上布焼耐など

積申上り候由候間、則如出水乘廻、岩切六右衛門殿へ

合點申候へと申越候、猶爰許之様子追々可申越候、恐

惶謹言、

「朱力去」
「寛永十五年」

二月三日

三原左衛門佐○（花押）
重庸判

川上左近將監○（花押）
久國判

山田民部少輔様

下野守様

御報

1216 「御文庫拾式番箱三拾八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」
以上

1215

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

尊書忝致拜見候、此間者一入御氣色悪敷被成御座候由、如何無御心許奉存候、不及申候得共、御養生專一存候、隨而當地之様子下野介殿方委細可被申上候間、不能具候、恐〴〵謹言、

「朱力去」
「寛永十五年」

二月三日

石谷十藏（貞清）
爲成（花押）

松平大隅守様

尊報

▽
◎
松平大隅守様

御報

石谷十藏

1217

「古御文書三拾五卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以委曲様躰鳴津下野守殿方可被申上候、以上、尊札致拜見候、然者御氣色然と無御座由、千萬御退屈察

一書致啓上候、然者御仕合能御暇被進御歸國之旨、目出度奉存候、海陸御無事御着可被成と奉察候、隨而鳴原へ御一左右次第被成御座候様ニ及承候、定而彼地之様子御注進次第御越可被成と令存候、將〴〵大隅守殿御氣色弥御快氣被成御座候由、玆重奉存候、猶期後喜〴〵節候、恐惶謹言、

二月四日

松平河内守
定頼（花押）

松平薩摩守様

人々御中

奉存候、御養生之段不及申上候、此表之義其後別条無御

座候、度々貴報ニ如申上、築山杯被申付、石火矢・大筒

ニ而爲打被申候故、城中事之外痛申躰ニ相見へ申候、松

平伊豆守・戸田左門萬事首尾能様被申渡候間、馳而落着

可仕奉存候、猶相替義御座候者、御付置被成候御衆迄可

申上候、御病中ニ被成御座候處、節々尊札忝奉存候、恐

惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」

二月五日

林丹波守
(勝正)

吉政(花押)

薩摩中納言様

尊報

1218 「古御文書三拾六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

去廿日之尊書忝拜見仕候、先以御氣色弥御本復被成候哉

と、無御心元奉存候、然者爰元之様子嶋津下野殿より追

くと可被仰上と存、書中不能一二候、將亦其元御人數をも

天草并出水と申所迄御出し置申出候由被仰下、奉得其意

候、尚期後音之時候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」

二月六日

戸田左門◎氏鐵(花押)

松平大隅守様

尊報

▽◎
松平大隅守様

尊報

氏鐵

戸田左門

△

1219 「古御文書三拾六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲改年之御祝儀、竹崎伊豆守殿被下貴札拜見仕候、殊

御小袖十被懸御意候、幾久可得御意驗と致満足、別而

目出度存候、

一先日進之候御道具共、何も御意ニ入由、満足此事ニ候

事、

一御茶入之儀、肩衝にて可有御座と存候、珍敷作一段見

事ニ存候事、

一 上家之香合之儀、はやとく出来申候へ共、下地なま木故、上漆之色今少見合可進之と存候へ共、幸御使被下候間、先令進入候、上之はなぬり不入御氣候ハ、其方にて重而御ぬらせ可被成候、上と袋之仕様、緒之長サ、利休本にて仕候事、

一 公方様此比弥御息災ニ御機嫌能御座候由申來候、薩广守殿御下向候間、定而具ニ可被聞召と、書中申殘候事、

一 貴様御煩之御様子具ニ被仰聞、又伊豆殿の口上も承候、當年膿婦申之由、無心元存候、度々申入候ことく、御心長ク御養性肝要ニ存候、今少御氣力付候ハ、琢庵など御談合にて御灸可然存候事、

一 肥前嶋原之儀、存之外未か、ハリ申候も、はや城中萬ニつき可申間、落居程御座有間敷と存候事、

一 薩广守殿も御人數被召連、彼表へ御越の由承及候、御太儀と存候事、

一 御狀三ツ相届申候へ共、御返事二ツニ仕令進入候事、一當年之野鷹之羽被持下候、爰元玠敷別而満足仕候事、

一 赤梅檀二木被持下候、聞候て見申度候へ共、私も痰を煩、二三日先右再発任ニ付、聞申事も不罷成間、快氣次第心静ニ試候て、様子可申入候、木色ハ一段見事ニ御座候事、

一 爲御養性可被成御出京かの由、左候ハ、面上ニ積儀可申入と、我等一人之大慶ニ存候、万々御使へ申渡候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕
二月八日
宗立 ○ (印)

松大隅守様
御報

1220 「御文庫拾二番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶く爲指義無御座候へ共、爲御見舞申上候、以上、一筆申上候、其地之様子承度存、御見廻旁ニ如此御座候、隨而拙者義、上使衆御指圖無之内ハ、其元へ參候儀不罷成、迷惑仕候、猶追々可得御意候条、不能詳候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」
二月九日

木下右衛門大夫
延俊（花押）

嶋津薩厂守様

人々御中

嶋津薩厂守様

延俊

木下右衛門大夫

1221

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

薩摩守殿御暇出、直ニ如有馬下向之由、珍重存候、從此方嶋原へ加勢之人數可申付之由、松平伊豆守殿へ度々申越候へ共、加勢入間鋪之由、下野守へ兩度爲被仰之由候、然時者薩厂守殿も上使へ被爲見廻、如此方可有下着欵と相待居にて候、將又其方煩無然々由咲止候、所用被爲間義迎成間鋪候之条、早々歸國尤候、其由鎌田出雲守へも申越候、可有其心得候、謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」二月十二日

家久 ○ (印)

1222

「家久公御譜中」

「正文在鎌田出雲政純」

彈正大弼殿

「在忍紙」
彈正大弼殿

家久

薩摩守殿御暇出、直ニ如有馬表下向之由相聞、珍重存候、就其爲留守居在江戸之由、別而大儀存候、此節之義ニ候条、諸事被入念簡要存候、將又彈正殿儀煩無然々由候之条、其元之所用被爲間義迎成間敷候之間、早々被爲下着候、其方前より可被申候、何れ共薩州下着之刻、以使者可申候、謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」二月十二日

家久 ○ 「朱印」

鎌田出雲守殿

1223

「御文庫拾式番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

1224

「御文庫拾式番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

態使札を以申上候、其元一揆共爲御追討被爲仰出、御越被成候由、御苦勞共ニ奉存候、此表遠所と申道筋ニテ無御座候故、其許之様子曾不承候、各様御越候儀ニ御座候条、聽而事濟可申と奉存候、隨而隅州様御煩如何御座被成候哉、無御心元存候、拙子事雲州御城番被爲仰付、江戸ニ而如被爲仰出之雲州松江へ、去月廿八日ニ致參着、各申合御城其外面と請取口何篇無油断申付御事候、乍恐御心易思召可被下候、其表之様子御報ニ被仰聞候者可忝候、猶追而可奉得貴意候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」

二月十三日

龜井能登守
茲政（花押）

嶋薩州様

人々御中

松薩州様

龜井能登守

雲州松江方

1225

先刻者御尋過分ニ奉存候、仕寄場へ罷出不掛御目、御殘多奉存候、^{「本マ、」}いつまも爰許ニ罷居候内、御用等も御座候ハ、可被仰付候、尚期後音之時候、恐惶謹言、
「朱力キ」
「寛永十五年」二月十四日
氏鐵（花押）

松平薩戸守様

人々御中

戸田左門

方

「家久公御譜中」

「正文在伊勢兵部貞榮」

御遺言

- 一可致成専 公儀事、
- 一御子様多御座候間、如何様之御分別疎御方も可有之候、
- 一雖然被成御救御家御相肝要之事、
- 一欲心之事、
- 一後世者御供衆御留之事、
- 一中納言之御位ニ御座候間、上方へ被成御尋、御位牌之様子御定之事、

一御位牌之脇ニ五人之事、

以上

花にめて月をこゝろの内にこそうき世のほかの佛なり
けれ

寛永十五年二月廿日

1226

「古御文書三十六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

一筆致啓上候、然者薩厂守殿御歸國被成、久々ニて御逢
被成可爲御満足と奉察候、仍而御所勞頃者余と無御座之
由、無御心元奉存候、申迄無御座候へ共、能く御養生可
被成候、隨而此表之様子いまた落着不仕候、仕寄責道具
大形出來仕候間、首尾相調候へ、取懸可申と相待罷在候、
切く預尊書候へ共、不得寸隙候之故、御報不申上背本意
候、猶奉期後音之時候間、不克審候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

二月廿一日

松平伊豆守

◎信綱(花押)
[判]

大隅守様

参人と御中

▽
◎
大隅守様
参人と御中

信綱

7

松平伊豆守

△

1227

「御文書拾一番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

尚以先日當地へ御越之刻、仕寄場へ罷越候故、不懸
御目御殘多奉存候、已上、

預貴札忝致拜見候、然者道中御無事御歸國被成、大隅守
殿へ御逢御満足被成候旨、御尤存候、仍而大隅守殿御所
勞、此比者然と無御座候旨、無御心元奉存候、申迄無御
座候へ共、能く御養生專一御座候、隨而此表之様子いま
た落着不仕候、仕寄、責道具大形出來仕候而、首尾相調
候者、取懸可申と相待罷在候、尚奉期後音之時候間、不
能審候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

二月廿一日

松平伊豆守

信綱(花押)

松薩厂守様

貴報

▽◎ 松薩_ノ守様

貴報

松平伊豆守

△

1228

「御文庫拾式番箱三拾八卷中」

猶々爰元諸手も普請出來申、仕寄事外詰申候間、何
とそ被仰付可有御座奉存候、已上、

二月十九日之御狀拜見仕候、口之津ニ御船御座候付、以
書狀申入候處、相届申由得其意存候、大隅守殿御氣色此
比重申、以之外御草臥之由、笑止千万存候、貴報御心盡
之程令察候、次爰元之様子御使者可被申候間、不及申入
候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」

二月廿一日

細川越中守[◎](花押)
忠利_ノ判

松平薩摩守様

御報

▽◎ 松平薩摩守様

參

細川越中守

1229

「清水氏年曆之内」

有馬方

△

一 寛永十五年戊寅 黃門様御病氣ニ付、光久公御在江
戸ニ付、嶋原江爲加勢人數一万余六百六十八人程被遣
候、内三千七百七人大將嶋津下野守久元・三千六百九
十二人大將北郷佐渡守久加・三千六百九人大將嶋津豊
後守久賀、貳百貳拾五人鹿兒嶋衆、夫丸十五人、兵糧
渡衆右三人、外入來院石見、新納加賀守忠清・山田民
部少輔有榮・三原左衛門尉・市來佐渡守右四人者同前
談合役ニて候、嶋原ニ被參候、
或嶋津豊後殿・北郷佐渡殿・入來院石見殿・山田民部
少輔殿・新納加賀殿主取ニ而千餘人被遣、當正月元日
城攻有之、村尾源左衛門尉殿伊集院衆中戰死と有之候、
右ニ相違或正月十一日嶋原江渡海、地頭新納加賀と大
口書留ニ有之、正月十三日嶋原江阿久根衆渡海、同三
月歸陳と阿久根書留有之候、山之口地頭伊集院備後爲

名代、二男伊集院休右衛門山之口人數召列、出水米之津迄出陣候得共、嶋原落城故則歸陣と山之口書留有之候、

- 一 黃門様御病氣ニ付、於江戸正月十三日阿部豊後守様を以、光久公御看病御暇、且又肝煎有馬之一探可擊之旨被仰渡、其日江戸御立ニ而、二月十四日肥前有馬江御着、攻口御請取可被成旨被仰達候得共、松平伊豆守様より被仰候ハ、中納言殿御病氣大切之由候、早々御歸着可被成由ニ而、攻口御渡無之候付、有馬御立ニ而同十六日鹿兒嶋江御着、同廿三日 黃門様御逝去也、
- 一 黃門様御他界ニ付、御葬禮役者ニ而候間、長野殿・酒勾殿早々歸宅候様、二月廿五日重庸・貞昌・久國・久元方嶋原江被申遣書狀、北郷佐渡守殿・澁谷石見守殿と有之、其時酒勾ハ新左衛門と爲申由候事、
- 一 三月十日 黃門様御葬禮福昌寺ニ有之候、
- 一 光久公三月十七日鹿兒嶋御立、四月廿四日御出府、五月八日御家督也、

1230

「御文庫拾式番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

遙絶音毫疎闊之至候、然者 黃門様永々御不例、近時者御快氣之様承候、愈御（兼生力）可爲專一候、遼遠之儀御座候間、御心遣可有御座と奉存候、就其爲御見廻金武按（可）差上候、隨而肥前表防戰之儀御座候之由承及候、從御國本爲御加勢御出陣之儀、御大柱奉（祭）候、猶期來慶候、誠惶誠恐敬白、

琉球國司

尚豊（花押）判

「未カキ」二月廿三日
「寛永十五年」

進上 光久尊公

（張紙）「家久公御譜中ニハ無之」

1231

「光久公御譜中」

嚴親中納言家久痼疾竟不愈、以寛永十五年二月二十三日逝、光久泣血從其葬、居喪而能慎矣、

1232

「古御文書三拾六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

乍恐奉呈一封候、然者永々御違例如何御座候哉、朝暮心遣奉存候、定而近時者愈可被爲成御快氣奉存候、爲御見廻以專使申上候、隨而肥前表防戰有之由傳承候、就其從貴國爲御加勢御出陣之旨、御大粧奉察候、委曲金武按司可有演說候間、不能詳候、誠惶誠恐敬白、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕二月廿三日

琉球國司

尚豊（花押）

進上 黄門家久尊公

1233 「家久公御譜中」

頃日家久之病大漸、禱爾藥療共不驗遂無起、以同年二月二十三日逝去于覺城、享年六十三、謚慈眼院、號花心琴月大居士、葬于福昌寺、導師天室和尚也、殉死者九人、乃平田大久坊宗如・鎌田豊前・有川久右衛門・山田大泉坊・谷山宮内左衛門・渡邊安房・愛甲次右衛門○廉宗・寺原早介重幸・高山備後也、

○大樹家光公使能勢小十郎吊之、賜御香奠白銀五百枚矣、

1234

○家久遺言而以三幅對之掛物〔後鳥羽院宸翰及左近衛中將源通其左兵衛尉藤原秀能筆〕竝寶刀二柄正宗・瀨戶肩衝三品奉獻 大將軍家光公、島津下野久元謁土井大炊頭利勝之館、而獻納焉、

「家久公御譜中」

「正文在江戸御家老座」

慈眼院

〔在包紙〕

黄門様御院号醍醐三寶院殿ヨリ御ユルシノ書

1235

祭文

茲寛永十五年歲次戊寅如月二十三日、薩隅日三州賢君前中納言藤原家久公去柔兆困敦、初秋頃不意罹疾病、起居不安而過春秋復至春矣、招三醫令之療不得療、空拱手歸命、諸師教之禱無由禱、徒緘口去矣、神明佛陀不奈之何、如燈滅風前似舟藏夜壑、忽爾入無聲三昧矣、既至暮春十日、就于本寺如法闍維、當此時、嗣孝子光久、

備清酌餽饈妙味以奠 尊靈前厥文曰、

嗚呼悲哉

方今花萎地香散廳 紅霞冒日碧靄亡曦

始知諸法寂滅相 即見萬緣遷變姿

伏惟新捐館花心琴月庵主國娛看蜜道躡希夷

領三州無錯支 取異朝如拾遺

舉賢却奸 好好尊尊惡惡

押強扶弱 庸庸威威祇祇

兆民懷惠扇德 諸將怕雄伏儀

入軍則折戰衝 怒欺漢祖

憐兒則純禮樂 恭學周姬

逢劔容勸呈劔 逢詩入教獻詩

嗚呼悲哉

虛矣真 未報茲恩慟佳城速去

天耶命 未盡孝情乘微雲忽辭

弟兄倒履走 姊妹褰衣馳

三鳳啓告望空 是何夕

八龍吟斷臥浪 是何時

遊禽翼倦勝屈 歸鴈聲幽助哀

嗚呼悲哉

靄靄乎淡烟 用叢籠予思 霏霏乎

細雨酒蘼餞君之 夜月朦朧燒繁禪院

上春風蕭颯唱偈祖圓岐滿山芳草一溪芹

察 妙味無多子 尊靈直鑑斯

伏願

子子孫孫子子 嬾竹抽紫笋重葉

喬松長翠梢連枝

嗚呼悲哉 尚亨

花心琴月庵主 福昌天室和尚炬火

歸心一夜馬蹄忙 鞭舉春風到故鄉

見也火中真面目 牡丹吹露吐天香

共惟新指館前三州太守三品黃門花心琴月庵主

扛九州鼎 括四海囊

修身齊家 追慕魯孔夫子

提兵統衆 準擬漢張子房

功名高於高高峰頂德威深於深深海洋

務厚學博聞而 定國條目

挾慈惠明辨而 明世紀綱

斯故 孫子聚鸞鳳 群臣遠豺狼

平生所行 日日楊珠簾詠歌於花色

家常作業 夜夜開玉戶彈琴於月光

加之龍山得入室親旨鸞嶺紹秘訣遺芳

說甚麼隱顯存亡 胸襟洒洒

論甚麼涅槃生死 意氣堂堂

七通八達 百了千當

如上說者 尊靈表顯生前沒後之常三昧

即今今日臨送行得火一句子如何

舉揚去 喝 安禪未必須山水滅

却心頭火自涼

取骨

骨頭節節現全身 白浪滔天幾千尋

不壞法身堅固性 山花煉出一堆金

夫以花心琴月庵主 凜凜蘭玉 伴伴松琴

閻浮夢醒六十三 日斜風火雨葉

冥土眠熟千萬劫 月明野草園林

尊靈還會這箇麼不要會與不會直下即請君自

參去 八面清風惹衣襟

安骨

安置手中無價珍 鬪體識盡絕毛塵

金鎚影動發光氣 李白桃紅即法身

共惟薩隅日三州主君三品黃門花心琴月庵主

將門種草 源家柱礎

永成三州賢將 頗位三品君臣

當頭非非 洒止家鄉不迷岐路

直下是是 住在佛地脫出業因

天晴惠日寂寂 池清心水粼粼

垢穢元來堅固相 無可棄偽

己身徹底不昧性 無可求真

庵主識得換骨自由三昧處麼若不信爲指陳去

佛未出世摩訶陀國轉大法輪

維寬十五曆著雍攝提格仲春朔旃蒙協治、同二十有三日

強圉大荒落、我尊父新捐館 花心琴月庵主天災之所降

風恙之所侵醫巫、但不能治掃、終示無聲三昧於覺島之

本館、越沽洗旬日、癸酉於福昌禪寺祖塔之邊隨梵儀趣

闡維之場、然後藤氏忠直不堪哀慕之情、借梵侶手、謹

備清酌危羞菲薄之禮奠、以奉獻尊靈前者也、於戲 其

詞曰、

賢哉叔父 國家柱楹 化旺四海

恩布八紘 君臣左使 世致昇平

兒孫扶起 家希盛榮 言浪不發

發則義明 理曲不斷 斷則道正

常投禪室 窮祖師令 諳趙州旨

茗手自烹 受菴主号 空拳天撐

琴彈夜月 鐘聞深更 花前歌詠

雪下詩評 心地水潔 胸宇風清

搏桑掛弓 朝鮮揚旌 卒三千客

屈百万兵 披學文德 良超武名

儒門龜鑑 軍杯權衡 剩凌西海

幾赴東京 雖歸舊里 無慰餘生

嗚呼哀哉 撫育恩顧 六十三歲

忽焉遠行 淚洒燈檠 吾儕堪驚

心非鐵石 哭無他夏 春風捲地

吹遂不晴 誦說弟兄 噫奈我情

累累姊妹 予雖同姓 連枝奕葉

稱傑爲英 空隔途程 媵外姻盟

遠涉海水 清淨法身 天真自性

箇箇現成 何論化城 物物通亨

何說寶處 芳園飛蝶 葵向日輪

柳隨風輕 似聞其聲 樹上啼鶯

如見其質 蘋蘩沼沚 行潦水冷

博山烟橫 蘋蘩沼沚 祭當羊羹

誅文一絕 謹以奉呈 靈其不昧

照鑑丹誠 嗚呼哀哉 尚嚮

1236

「北郷久直譜中」

寛永十五年正月、家臣津曲狩野介兼業・古垣四郎右衛門忠與率三百人、爲先手到出水米津之時、聞落城之由歸陣矣、

同年二月二十三日、家久公御逝去、其後 光久公江戸御留守御分國中之諸吏、司之可加下知旨、依 命勤之、

1237

一書申候、仍 黃門様去ル廿三日被成御他界候、咲止千萬爲絶言語儀ニ候、就夫、御葬禮御日執來月十日ニ相定候、長野殿・酒勾殿御役者ニ而候間、早々歸宅被申候様ニ可被仰渡候、勿論船被仰付候、少茂延引有間敷候、恐

々謹言、

『寛永十五年』

二月廿五日

次飛脚

『三原左衛門佐』

重庸

『伊勢兵部少輔』

貞昌

北郷佐渡守殿
澁谷石見守殿

『川上因幡守』
久國
『島津下野守』
久二元

1238

「御文庫拾式番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

當月廿四日之尊書忝拜見仕候、先以大隅様去廿三日ニ御遠行被成之由、寔以可申上様無御座候、委細之段山田民部殿へ申達候条、御報不能詳候、恐惶謹言、

『朱力キ』

『寛永十五年』

二月廿六日

戸田左門

氏鐵（花押）

松平薩摩守様

尊報

1239

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」

今度有馬於春之城ニ、本丸城乗仕、敵三人鎗を合申候、證跡人出水衆入來源左衛門尉殿・大口衆脇岡左近殿・濱川西市丞殿、立合三原大藏太輔殿・伊集院衆西郷壹岐守

殿にて御座候、爲御存知候、爲後證如件、

寛永十五年

二月廿八日

仁禮左近將監判花押

新納佐左衛門尉殿

上原貞右衛門尉殿

1242 「全」

寛永十五年二月廿八日未之刻、於肥前之内有馬原之城本

丸壱番鍵仕候、立合新納加賀守殿・市來八左衛門尉殿に

て候、

市來五兵衛判花押

1240

「全巻中」

寛永十五年二月廿八日未刻、肥前之内於有馬原之城本丸

一番鍵仕候、立合新納加賀守殿・市來五兵衛尉殿ニ而候、

市來八左衛門判花押

1243

「全巻中」

大口

寛永拾五年二月廿八日未之刻、肥前之内有馬原之城於本

丸鍵被仕候、

大口手おひ鍵きす
高城七郎左衛門尉

1241

「全」

寛永十五年二月廿八日未刻、肥前之内於有馬原之城本丸

一番鍵仕候、立合市來八左衛門尉殿・市來五兵衛尉殿ニ

而候、

新納加賀守判花押

證跡二禮左近殿・三原大藏殿

首一

大口
高城与兵衛尉

首注文

首一

大口
松木平兵衛

首一

證跡大口新納勘解由次官
大口
壹岐兵左衛門◎尉

證跡大口高城七郎左衛門

首一

立合中馬源丞

首一

小城彌左衛門

首一

大口
松山内藏丞

證跡高尾野衆南郷狩野介殿

首一

證跡大口新納勘解由次官
大口
赤崎段兵衛尉

首一

寺師刑部左衛門尉

首一

無證跡

證跡大口松下宗左衛門尉
大口
高橋良右衛門◎尉

首一

帖佐喜兵衛尉

首二

無證跡

證跡大口松下宗左衛門◎尉
大口
大田彦右衛門◎尉

首一

大口
原田新兵衛尉

首一

無證跡

證跡村尾源左衛門尉殿
大口
新納勘解由次官◎尉

首一

新納加賀守手
普限坊

首一

證跡同内中馬源丞

證跡大口高城七郎左衛門◎尉
新納加賀守手
吉川七右衛門◎尉

首一

右同手
小川山之丞

首一

證跡右同人

無證跡

射捨之衆

首一

右同手
中馬源之丞

首一

立合壹岐兵左衛門◎尉

右同手

久保筑右衛門◎尉

證跡大口赤地六左衛門◎尉

大口

梶山主水佑

敵之鍵二本屏越ニ本丸ニてはい取候

大口手おひ鍵きす

須佐美織部助

右同所ニて矢三筋被仕候

新納加賀守手

加藤彦市

右同所ニて矢七筋仕候、二筋を敵ニ射付申候、

大口松下寛右衛門◎尉存ニて候、

永井太左衛門

右同所ニて矢二筋仕候内、一筋敵ニ射付申候、

北郷佐渡守殿披官使ニ參、加賀守手ニ付如此

候、

大口

藺牟田與左衛門

屏越ニ敵之やりはい被取候、

加賀守鎗場ニ被參候衆

屏越ニ鎗壹本・鉄炮壹丁敵之道具はい被取申候、

大口 松下寛右衛門

大口 坂元縫殿助

同 田代源次兵衛尉

同 中馬内匠丞

同 種子嶋藤七兵衛尉

同 伊駒主殿助

同 久富木狩野介

同 松山孫左衛門尉

同 市來清右衛門尉

同 宮原喜左衛門尉

同 北原孫右衛門尉

右之外披官除

戦死

大口 寺師少内記

加賀守鎗場ニて戦死

大口
谷口三左衛門尉

本丸

新納加賀守手
千左衛門◎尉

鐘場ニて戰死仕候、

1244

「全巻中」

寛永十五年二月廿八日、有馬原之城本丸屏ニ着申候、證跡市來五兵衛尉殿

上原佐太右衛門◎「判」（花押）

1245

「全巻中」

今度有馬春之城於本丸、城乗仕、敵二人鐘合仕候、證跡人出水衆入來源左衛門◎尉殿、大口衆脇岡左近殿、立合仁礼左近將監殿、伊衆院衆西郷壹岐守殿にて御座候、又鉄炮にて敵仕候、證跡仁礼左近殿・長瀬新兵衛◎尉殿被爲見候、爲御存知候、仍如件、

寅二月廿八日

三原大藏大輔◎「判」（花押）

新納佐左衛門尉殿

上原左太右衛門尉殿
參

1246

「全巻中」

寛永十五年二月廿八日於有馬原之城屏乗越、城中ニ而鉄マ、仕候、出水衆山内左近將監殿・村尾源左衛門尉殿ニ而候、

新納佐左衛門◎「判」（花押）

1247

「全巻中」

差出

有馬春之城本丸石かきニ着屏を越、内ニて首壹ツ取申候、證跡是枝喜右衛門殿、出水衆井尻三郎右衛門殿存ニて候、以上、

とら

二月廿八日

差出

役衆中

まゐる

平田彌左衛門◎「判」（花押）

1248

「全巻中」

差出

本丸之石かきニ着屏を越、内へ入申候、證跡伊地知李右衛門尉殿存知ニて候、

以上

とら

二月廿八日

木村平右衛門〔判〕〔花押〕

1249 「全巻中」

寛永拾五年二月廿八日、有馬城於本丸首壹ツ取申候、證

跡人曾木衆坂元四郎兵衛〔尉〕・福崎覚兵衛〔尉〕殿ニて候、

首主かこしま衆

木佐貫半右衛門〔判〕〔花押〕

合討曾木衆

川田弥左衛門〔判〕〔花押〕

1250 「全巻中」

寛永拾五年二月廿八日、有馬之城本丸之内ニ入申候、か

こしま衆木佐貫半右衛門殿、曾木衆川田弥左衛門尉殿證

跡ニて候、

曾木衆

坂元四郎兵衛尉〔判〕〔花押〕

同

1251 「全巻中」

寛永十五年二月廿八日

分捕高尾野衆中

鍵

右證跡人三原大藏太夫殿

同名伴右衛門尉

右證跡人平山七兵衛殿・大口衆壹岐兵左衛門殿

脇岡勘解左衛門尉〔本マ、ト〕

湯田与右衛門尉

亀川三郎四郎

山下兵右衛門〔尉〕

岩永千五郎

松木七兵衛尉

竹下源太兵衛尉

佐藤内匠九

福崎覚兵衛尉〔判〕〔印〕

同卷ツ

徳永駿河守

同卷ツ

宮原監介

又弓持申候間、十六から内十四射申候、

但當矢六ツ

手負衆

大井源左衛門尉

南郷狩野介

恒吉次右衛門尉

宮原又左衛門尉内
勘解左衛門尉

右同内
主馬允

弓之衆

仁礼左近付衆
築瀬帶刀長

矢十二内當矢十一

右同
「本マ、」
肱黒勘解左衛門尉尉

矢十二内五ツ射申候内當矢式ツ

右同
池上渡左衛門尉

矢十二内射付申候當矢五ツ

仁礼左近内

白川八郎左衛門尉

矢十二内五ツ射申候當矢式ツ

右同
朝隈覚左衛門尉

矢十二内七ツ射申候内當矢式ツ

右同
松木貞右衛門尉

矢十四之内十一射申候當矢式ツ

寅二月廿八日

新納佐左衛門尉殿

上原貞右衛門尉殿

仁禮左近將判〔花押〕

1252

高尾野衆中失衆

一向宗
牧田主馬允

右者今度有馬於春之城、城乗仕、首卷ツ射取被申候へ共、

失衆故仁礼左近へ内詔ニて見せ申候、切捨ニ仕候、

一向宗
山口納右衛門尉

同
前田少兵衛尉

同
細山田内藏助

「全巻中」

此表被詰居候へ共、仕合を不被存候而、遮而之分骨不仕候、以上、

同

兒玉七右衛門尉

同心

兒玉勘解由左衛門尉

同心

村田五右衛門尉

同心

谷山爲右衛門尉

二月廿八日

宮原又左衛門◎尉〔花押〕
〔判〕

同心

三光院

税所助兵衛◎尉

同心

桑幡六右衛門尉

新納佐左衛門尉殿

同心

梶原宇右衛門尉

上原貞右衛門尉殿

同心

湯田平兵衛◎尉

同心

野村新兵衛◎尉

同心

谷口助右衛門尉

同心

牧之瀬新六

門尉同心衆 蒲生

戰死

川崎織部

同心

敵之鎧と刀合仕候
市來万左衛門◎尉

是よりをく八左衛門尉同心不申衆
手負

同心

土持仲左衛門◎尉

鎧

村尾筑前守

同心

中原權介

鎧

松下源五左衛門尉

同心

貴嶋古左衛門尉

鎧首一ツ

上村清左衛門尉

同心

田中勘兵衛◎尉

屏ニ被付候衆

赤塚源太左衛門尉

同心

中村正左衛門尉

鉄炮首一ツ切捨

湯田平右衛門尉

首一ツ

相良小右衛門尉

首一ツ

市來八左披首
喜右衛門尉

屏ニ被付候衆

川内清右衛門尉

同

野村采女正

同

田中爲左衛門尉

同

川内仲右衛門尉

首一ツ切捨

北村舍人

首一ツ

福嶋半兵衛尉

首一ツ

松下源介

首一ツ

同大藏丞

首一ツ切捨

金丸十兵衛尉

屏ニ被付候衆

達野源左衛門尉

首一ツ

川崎長右衛門尉

同

長谷川志广丞

屏ニ被付候衆

持原才藤

首一ツ切捨

和田孫兵衛尉

屏ニ被付候衆

峯崎彌右衛門尉

同

谷山諸右衛門尉

1254

「右同卷中」

寛永十五年二月廿八日未時、肥前之内有馬春之城於本丸、

立合平田彌左衛門尉殿、出水衆伊尻三郎右衛門尉殿、討

捕首注丈之事、

首一 家名不知

首一

披首
是枝喜右衛門尉
春田九兵衛尉

首一

同道具之者
才藏

首一

定加子
与次右衛門尉

首一

同
市作

首一

同
權介

1255

「全卷中」

寅 證文

二月廿八日、有馬春之城ニ而、大野監物殿本丸石垣登り、

屏ヲ乗越、長刀ニ而敵壹人仕留被成候、於其場ニ吾等見

申候間、爲證跡如此候、

寛永十五年寅

二月廿九日

村尾源左衛門〔尉〕〔花押〕
福崎新兵衛〔尉〕〔花押〕
〔判〕

大野監物殿

参

1256

〔全巻中〕

寅

二月廿八日、有馬春之城ニ而平山七兵衛殿本丸石垣高サ
三間程登り、屏を乗越、敵壹人ニ鍵合、則鍵下ニつきふ
せ被成候、我々於其場ニ見届申候間、爲證跡如此候、

寛永十五年寅二月廿九日

村尾源左衛門〔尉〕〔花押〕
宮原与左衛門〔尉〕〔花押〕
△
〔印〕

平山七兵衛尉殿

参

1257

〔全巻中〕

覚

寛永十五年二月廿八日ニ、有馬春之城本丸石垣越登り、

屏之上より弓ニ而敵三人仕候、證跡人鹿兒嶋衆田中五右

衛門殿・高尾野衆宮原伴右衛門殿にて候、爲後日如件、

寅二月廿九日

三原五郎兵衛〔尉〕
〔花押〕
〔判〕

新納佐左衛門尉殿

上原貞右衛門尉殿

参

1258

〔全巻中〕

寅

指出

二月廿八日、有馬原之城於本丸、敵四人鉄炮ニテ射申候、
此證跡大口衆壹岐兵左衛門殿、又敵貳人と鍵仕候、證跡
鹿兒嶋市來五兵衛〔尉〕殿立合ニ見させられ候、

寛永十五年二月廿九日

申木野
有村掃部助〔尉〕
△
〔花押〕

1259

〔同巻中〕

覚

我々四人先手仕、本丸之屏ニ着、屏こしに鍵合申候、但
日高十兵衛〔尉〕、有馬久右衛門〔尉〕事鍵合可申と存候処、は

やく石打に合申、無生ニ罷成候故、鎧者合不申候、證跡者何もかこしま衆後之岡より御覽ニ而候、右之分爲御存知候、已上、

二月廿九日

薩一壱番鎧合

友野七郎〔判〕
◎〔花押〕

同

藤井助四郎〔判〕
◎〔花押〕

有馬久右衛門〔判〕
◎〔花押〕

日高十兵衛〔判〕
◎〔花押〕

市來八左様

新納加賀様

1260

〔全巻中〕

寛永拾五年二月廿八日、有馬春之城本丸石垣ニ着、屏乗越、内ニテ首壹ツ討取申候、證跡人伊地知左右衛門尉殿、御存知にて候、

寅ノ二月廿九日

大重傳左衛門〔判〕
◎〔花押〕

高名改衆中
参

1261

〔全巻中〕

覚

二月廿八日ニ、有馬春之城本丸石かき屏を越、内ニテ鎧合仕候、須木衆今村休右衛門尉鎧下ニ而射とめ候、證跡大口衆大田彦右衛門尉殿、又須木衆堀添十郎兵衛尉首壹ツ取申候、

二月廿九日

村尾源左衛門〔判〕
◎〔花押〕

1262

〔全巻中〕

指出

有馬原之城石かき高サ三間上り屏ニ付候、市來八左衛門尉殿鎧つきおり被成候を、我等取候て衆中貴嶋小左衛門尉殿へ相渡申候、右之證跡上原左太右衛門尉御存知にて候、

とら
二月廿九日

寺師与左衛門〔判〕
◎〔花押〕

「全巻中」

覚

寛永十五年二月廿八日、有馬春之城本丸屏を乗越、城中にて敵一人ニ鎗合仕候、於其場證跡人平山七兵衛〔尉〕殿、出水衆山本左近將殿・大口衆菅岐兵左衛門〔尉〕殿にて候、右之衆方證跡之書物手前ニ取申候〔問〕、御尋可被成候、爲後日如件、

寅

二月廿九日

有馬九郎左衛門〔尉〕〔花押〕

新納佐左衛門〔尉〕殿

上原貞右衛門尉殿

参

「全巻中」

寛永十五年二月廿八日未刻、有馬春之城本丸へ乘候而、鎗合仕候而、敵一人討捕申候、右城乗之立合出水衆指宿内藏助殿・井尻三郎右衛門尉殿にて候、已上、

寅

二月廿九日

伊地知左右衛門尉〔判〕〔花押〕

上原左太右衛門尉殿

新納佐左衛門尉殿

参

「全巻中」

指出

寅二月廿八日、有馬春之城本丸屏之中にて、我等事敵二人ニ逢、一人之鎗を奪取、一人ニ鎗を合手負申候、敵者鎗下ニ而仕留申候、首者取得不申候、三原五郎兵衛〔尉〕殿後日證跡ニ可被爲成通、於其場被仰替候故、如此、

寛永十五年二月廿九日

田中五右衛門〔尉〕〔花押〕〔判〕

新納佐左衛門尉殿

参

「全巻中」

證文

寅

二月廿八日、有馬春之城ニ而福崎新兵衛〔尉〕殿、本丸石垣

高サ三間程登り、屏を乗越、敵三人ニ鎗合、一人鎗下ニ

つきふせ被成候、我々於其場ニ見届申候間、爲證跡如此

候、

1267

「全巻中」

有馬之城於本丸寅ノ二月廿八日合戰之人數

寛永十五年
寅

二月廿九日

福崎新兵衛尉殿
参

村尾源左衛門判
高尾野衆中
南郷狩野介判
出水衆中
宮原与左衛門
○ (印)

蒙鏈疵

刀討之衆

寺領衆
和泉利左衛門尉
池亀傳左衛門尉

兒玉大藏丞

大井七郎兵衛尉

渡邊弥兵衛尉

吉見源太兵衛尉

伊福宗右衛門尉

竹添萬兵衛尉

塩山源左衛門尉

落合弥五郎

鮫島加兵衛尉

菱刈勘解由

本田藏右衛門尉

八重尾藤左衛門尉

槐嶋喜平次

種田休三郎

蒙刀疵

鏈仕候衆

出水衆中

蒙鏈疵

阿多六郎左衛門尉

同

指宿内藏助

蒙鏈疵

伊尻傳次

三原權左衛門尉

蒙刀疵

伊尻三郎左衛門尉

寺領衆

入来院源左衛門尉

蒙刀疵

宮原与左衛門尉

柏木主馬首

弓にて射通衆

鎗弓刀合首捕候人數

山元左近允

一首一

伊地知弥右衛門尉

野村隼人佑

一同二

西田李之丞

川村与介

一同二

岩崎彈之丞

竹添軍介

一同一

瀬戸山權左衛門尉

猿渡加兵衛◎尉

一同一

東郷作左衛門尉

頭數百三拾八

一同一

江平清右衛門尉

寅 二月廿九日

一同一

同字左衛門尉

有馬之城於本丸寅ノ二月廿八日合戰之人數

一同一

長野正右衛門尉

出水

合首數十ヲ

蒙鎗疵

寺領衆池亀傳左衛門◎尉

手負之人數

蒙刀疵

寺領衆本田藏右衛門◎尉

一弓射通敵六人射申候

金剛坊

寅 二月廿九日

一鉄炮疵

岩崎彈之丞

一鎗疵

川野与右衛門尉

一同

小原織部之助

「全巻中」

加久藤衆中

同心衆

春之城本丸へ伊地知李右衛門尉同心申、城乗仕候時、

西田和泉守

坂元郷右衛門尉

萩原甚助

宮内右兵衛尉

前田彦左衛門尉

西田七左衛門尉

長崎与吉

同 六助

中馬弥市

寺領衆

一首一

一向宗
西田市左衛門尉

一同一

御檢地^ニ付
同名大藏之助

一同二

同
井上帶刀長

一戰死

同
赤川兵左衛門尉

一首一

右子
同弥七郎

合首一ツ

二月廿九日

伊地知左右衛門〔判〕[◎]_(花押)

1269

「全巻中」

覚

寅二月廿八日ニ有馬原之城本丸ノ内にて、須木衆中今村
久右衛門尉鏈合仕、左之手に鏈きすを請、其敵を鏈下ニ

つきふせ候、證跡人大口衆大田彦右衛門尉殿ニて候、同

須木衆堀添十郎兵衛首書ツ取申候、城之内へ我等同心申

候、須木衆長里弥兵衛◎_(尉)・大石喜内・宗形佐市此衆ニ而

候、右三人ハ我等手負申候付、のけ被申候、爲後日之如

此候、

寛永十五年 丙寅

三月朔日

村尾源左衛門◎_(尉)
〔判〕

1270

「全巻中」

二月廿八日有馬原之城本丸へ被乗候人數

鏈合

市來八左衛門尉

右同鉄炮ニテモ敵被射

三原大藏太輔

右同

平山七兵衛◎_(尉)

右同

新納佐左衛門尉

右同

有馬九郎左衛門尉

鏈合

市來五兵衛尉

右同

福崎新兵衛尉

右同

友野七郎

鎌合

新納加賀守

右同

藤井助四郎

大口衆

右同

大野監物

鎌合 蒙鎌疵

高城七郎左衛門尉

首巻ツ

是枝喜右衛門尉討捕之

右同

脇岡左近將曹

同巻ツ

大重傳左衛門尉討捕之

鎌合 蒙鎌疵

濱川西市丞

頸巻ツ

平田弥左衛門尉討捕之

頸巻ツ

松木平兵衛討捕之

同巻ツ

木佐貫半右衛門尉討捕之

同巻ツ

小城弥左衛門尉討捕之

曾木衆

河田弥左衛門尉右相討

同巻ツ

寺師刑部左衛門尉

弓射通

三原五郎兵衛討捕之

同巻ツ

原田新兵衛討捕之

本丸屏ニ付

上原佐太右衛門尉

同巻ツ

普賢坊討捕之

右同

木村平右衛門尉

頸巻ツ

小川少之丞討捕之

右同

寺師与左衛門尉

頸巻ツ切捨

高城与兵衛尉

本丸屏ニ付石打

有馬休右衛門尉

同巻ツ同

老岐兵左衛門尉

右同

日高十兵衛尉

同巻ツ同

松山内藏允

同壹ツ同

赤崎彈兵衛尉

伊駒主殿助

同貳ツ同

高橋銀右衛門尉

久富木狩野介

同壹ツ同

大田彦右衛門尉

松下孫左衛門尉

同壹ツ同

吉川七右衛門尉

市來清右衛門尉

同壹同

中馬源之允

宮原喜左衛門尉

同壹同

久保筑右衛門尉

北原孫右衛門尉

弓射通

須佐美織部佑

戰死

寺師外記

右同

加藤彦市

同

新納加賀守内

谷口三左衛門尉

右同

永井太左衛門尉

同

出水衆

千左衛門

同壹本取

蘭牟田与左衛門尉

鎌合

蒙鎌疵

阿多六郎左衛門尉

新納加賀守鑓場へ參候衆

屏越ニ鑓壹本鉄炮一挺取

松本覚右衛門尉

鎌合

右同

伊尻傳次

坂元縫殿助

鎌合

井尻三郎右衛門尉

田代源次兵衛尉

鎌合

三原十左衛門尉

中馬内匠

同蒙鎌疵

入來院源左衛門尉

種子嶋藤七兵衛尉

鎌合

宮原与左衛門尉

同 柏木主馬允
 同 出水利左衛門尉
 同 兒玉大藏丞
 同 大井七郎兵衛◎尉
 同 渡邊弥兵衛◎尉
 同 吉見源太兵衛◎尉
 同 伊福宗右衛門◎尉
 同 竹添萬兵衛◎尉
 同 塩山源左衛門◎尉
 同 落合弥五郎
 同 鮫嶋加兵衛◎尉
 同 菱刈勘解由
 同 八重尾藤左衛門◎尉
 同 槐嶋喜平次
 同 種子田休三郎
 同 山元左近將曹
 同 弓射通
 同 野村隼人佑

同

刀打

出水衆討捕

合頸數百三拾八

蒲生衆市來八左衛門尉鍾之場へ同心

河村与介
 竹添軍介
 猿渡加兵衛◎尉
 市來万左衛門◎尉
 土持仲左衛門◎尉
 中条權之介
 貴嶋古左衛門◎尉
 田中勘兵衛◎尉
 四元正左衛門◎尉
 兒玉勘解由左衛門◎尉
 村田五右衛門◎尉
 谷山爲右衛門◎尉
 三光院
 桑幡六右衛門◎尉

戦死

鍵合蒙疵

鍵合

同頸沓ッ

頸沓ッ

頸沓ッ

頸沓ッ

頸沓ッ

同沓ッ

市來八左衛門◎尉 戰場へ同心之外衆

梶原宇右衛門◎尉

湯田平兵衛◎尉

野村新兵衛◎尉

谷口助右衛門◎尉

牧之瀬新六

河崎織部

村尾筑前守

松下源五左衛門◎尉

上村清左衛門◎尉

相良小右衛門◎尉

福嶋半兵衛◎尉

松下源介◎尉

松下大藏丞◎尉

河崎長左衛門◎尉

同沓ッ

同沓ッ

同沓ッ切捨

同沓ッ

頸沓ッ

同沓ッ

屏ニ付

右同

右同

右同

右同

屏ニ付

右同

右同

長谷川志广丞◎尉

市來八左衛門◎尉内

喜右衛門◎尉

湯田平右衛門

北村舍人

金丸拾兵衛◎尉

和田孫兵衛◎尉

赤塚源太左衛門◎尉

河内清右衛門◎尉

野村采女正

田中爲左衛門◎尉

川内仲右衛門◎尉

達野源左衛門◎尉

持原才藤

嶺崎弥右衛門◎尉

右同

鎌合頸沓ツ

加久藤衆

頸沓ツ

同式ツ

同式ツ

同沓ツ

同沓ツ

頸沓ツ

同沓ツ

同沓ツ

弓射通蒙鉄炮疵

蒙鐵疵

蒙鐵疵

谷山諸右衛門討捕之

伊地知丞右衛門討捕之

伊地知弥右衛門討捕之

西田丞丞討捕之

岩崎彈之允討捕之

瀬戸山權左衛門討捕之

東郷作左衛門討捕之

江平清右衛門討捕之

江平宇左衛門討捕之

長野正右衛門討捕之

金剛坊討捕之

岩崎彈之允討捕之

河野与右衛門討捕之

戰場へ同心衆

西田和泉守

小原織部佑

坂本郷右衛門討捕之

萩原神内

宮内宇兵衛討捕之

前田彦左衛門討捕之

西田七左衛門討捕之

長崎与吉

同 六助

中馬弥市

赤川兵左衛門

仁禮左近將監

宮原又左衛門討捕之

宮原伴右衛門討捕之

肱黒勘解由左衛門討捕之

頸沓ツ射通

同

鎌合

高尾野衆

鎌合

戦死

同壹ツ 湯田与右衛門討捕之
 同貳ツ 龜川三郎四郎討捕之
 頸壹ツ 山下兵右衛門討捕之
 同壹ツ 岩永千五郎討捕之
 鼻壹ツ 松木七兵衛討捕之
 同貳ツ 竹下源太兵衛討捕之
 同壹ツ 佐藤内匠允討捕之
 同貳ツ 徳永駿河守討捕之
 同壹ツ 宮原監助
 弓射通 築瀬帯刀長
 同 池田渡左衛門討捕之
 同 朝隈覚左衛門討捕之
 同 松木貞右衛門討捕之
 同 仁乳左近内
 同 白川八郎左衛門討捕之
 同 村尾源左衛門討捕之
 同 同

須木衆

鐘合 蒙鐘疵

頸壹ツ

今村弓右衛門討捕之

堀添十郎兵衛討捕之

村尾源左衛門城内同心衆

長里弥兵衛

同

大石喜内

同

宗形佐市

串木野衆

鐘合

有村掃部助

本丸へ乗 曾木衆

坂本四郎兵衛

同 同

福崎覚兵衛

「右三拾二卷下ノ卷終ル」
寅三月朔日

光久公 寛永十五年 自三月
至十二月

後
編 舊記雜錄 卷九十四

1271 寛永十五年寅二月廿八日辰之刻ニ、有馬原之城本丸責落

之時、薩ノ軍衆之内方貴老・友野七郎殿・藤井助四郎殿
者先陳被成、於屏涯被碎粉骨御働候處ニ、敵方之石打ニ
被爲當、三間程之石垣方下ニ打落申候、被遂御見參候儀、
我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、向後之證文爲如斯
候、

寅三月朔日

有馬久右衛門
純□判

日高拾兵衛尉殿

参

1272 寛永十五年寅二月廿八日辰之刻ニ、有馬原之城被責落之

時、薩ノ軍衆之内方貴老、有馬久右衛門殿・藤井助四郎
殿一番ニ城乗被成候上、於屏際被碎粉骨御働候處ニ、敵
方之石打ニ被相當、三間程石垣より下ニ打落申候、被遂
御見參儀、我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、爲後日
證文如斯候、已上、

寅三月朔日

友野七郎判

日高拾兵衛尉殿
参

1273 寛永十五年寅二月廿八日辰之刻ニ、有馬原之城被責落候

時、薩ノ軍衆之内方貴老、友野七郎との・有馬久右衛門
殿、一番ニ城乗被成、於屏際被碎粉骨御働之処ニ、敵
方之石打ニ被相當、三間程之石垣方下ニ打落申候、誠ニ

被途御見參、我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、於後日誰人御尋候共、此旨無相違申達候、仍證文如件、

寅三月朔日

藤井助四郎判

日高拾兵衛尉殿

参

〔御文庫拾二番箱三拾八卷中〕「光久公御譜中ニ在リ」

一有馬表之儀、于今落去不仕候条、御取置之儀先々□

□被成、嶋原事濟候而御吊被仰付、可然存候、

一江戸へ御家老中一人早々可被遣候、大隅守殿御遠行被

成候条、罷上其趣をも御年寄中へ被申達度被思食候へ

共、有馬表之儀未落去不仕候条、先々□延引被成候、

落去次第ニ罷上可申上旨、御年寄中へ被仰遣可然存候、

伊勢兵部少などハ其地ニ被召置、御仕置以下被仰付、

余人を誰ニ而も可被遣候、嶋原之儀相濟候共、自江戸

之御一左右次第御上可被成候、

一大隅守殿御遠行被成、御十方も御座有間敷候、於此地

令推察候、併御大身者餘御愁傷被成候へハ、萬事不罷

成物ニ候条、御忌之内ニ御座候共、御家老中へ無御油

断御仕置被仰付、御尤奉存候、左様ニ無御座候へハ、

御家中無力も物ニ而御座候、其上嶋原表事濟候者、躡

而御上可被成〔□〕^{◎候}条、旁〔之〕[◎]急度可被仰付候、

一御家中衆さまを被替候儀、無據衆者可被仰付候、左も

無御座仁者、御無用ニ被成能可有御座候、自然嶋原表

へ御出陣被成候者、見苦敷可有御座候条、申入候、

一天草表ニ御人數被召置候由承候、于今彼地ニ被罷在候

者、早々中途迄御出陣被成、松平伊豆守殿御左右次第

嶋原表へ御発向之御覚悟御尤存候、自然大隅守殿御遠

行被成候由ニ而、鹿兒嶋ニ御逗留不可然候、不及申候

へ共、御留守居之御仕置肝要奉存候、

一不及申候へ共、御仕置被仰付候者、万端大隅守殿被仰

付候、御仕置之段可然存候、御氣分ニ相應不仕儀御座

候共、俄御仕置替り候様ニ存候へハ、能事ニ而も悪敷

様ニ存物ニ而御座候条、御遠慮可被成候、以來者思食

様ニ可被仰付候、併指當御仕置被成被替、下叶仕合御

座候者、御分別次第ニ可被遊候、

一御家中衆被召遣儀も、大隅守殿ニ不相替様ニ可被仰付候、以後之儀者御氣色ニ入次第ニ可被召仕候、

一御兄弟方へ御懇可被成候、自然不和ニ被爲成候へハ、御家中能不申事御座有物ニ而候、

一此度御上被成候者、御代替之儀ニ御座候条、萬事丈夫

ニ御支度可被仰付候、御家老中曆之衆者大形被召連、

御前御禮被申上候様ニ可然存候、嶋原之儀落〔去〕仕候◎着

者、不取敢御上被成、御繼目之御礼被仰上可然奉存候、

今度早速御上被成候者、極と御仕置も罷成間敷候条、

重而御暇も被仰上、御歸國被成思食儘ニ御仕置可被

仰付候、以上、

「朱カキ」
寛永十五年 三月二日

松平隠岐守〔花押〕

伊勢兵部少殿

披露

「御文庫拾一番箱中三拾
八卷中」

（張紙）
光久公御譜中ニ
見ヘス

一書令啓候、大隅守殿御遠行被成、薩戸守殿御力落筆紙

難申絶候、我等式儀程近御座候条、御吊ニ祇公申度存候

へとも、私ニ罷成儀候間、延引不及是非候、中納言殿

長く御煩如何様者御本復可被成候条、一度者御目ニ可懸

と存候處、御死去被成、扱々殘多次第ニ候、薩摩守殿能

時分◎〔關字〕御暇出、御下向御仕合と存事候、有馬表落去仕候

者早速御上り可有候条、御國之御仕置無由断被仰付、肝

要ニ存候、委細之儀者水野甚左衛門口上ニ申含候、恐々

謹言、

三月二日

松隱岐守

定行〔花押〕

伊勢兵部少殿

「光久公御譜中」

先是家久奉 高命遣師、警固於肥後天草、且行援兵于有

馬也、故寛永十五年正月朔日之攻撃、同二月二十八日屠

城之時、各關其事、有功斬獲殆乎二百級、或被傷殞命者

亦有之矣、光久齋書以呈執政賀、賊徒威殲之事、相良主

計頼堯舍命价于 江城、

1277

「御文庫拾貳番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

貴礼致拜見候、然者此表一揆取込候城、去月廿七日本丸迄責破、翌日廿八日討もらされとも不殘追討仕候、拙者共有馬隙次第天草・長崎・平戸・名護屋邊見分可仕候、隨而爲御音信米千石被懸御意、誠御懇意之段忝奉存候、尤可申請儀ニ御座候へ共、何かたへも御断申、惣様受用不仕候付、御使者迄返上仕候、右之仕合御座候間、御免被成可被下候、猶期後音之時候、恐く謹言、

「朱力字」
「寛永十五年」
三月六日

松平伊豆守
信綱（花押）

松平薩广守様
貴報

1278

「御文庫拾八番箱三拾貳卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶以申候、龍伯様 維新様之御時も、
類衆へも御遺物御座候つる哉、被聞召合左様之御談
餘儀御親◎無

合も可有之候、何ぞ別而之物共ハ御座有ましく候間、御腰物・御馬などにも可有御座候哉、御談合候て可被成御覽候、已上、

一書申入候、然者一昨日兵部少事市來之湊迄罷越、昨晝向田へ罷着、潮塩時之儀共相尋候処ニ、昨日夜半過時分、京泊口出船可然之由、船頭共申候故、任其旨候、左衛門佐事も於向田兵部少ニ追付申、舟ニ乗浮候処、從昨晚風雨にて出船不罷成、今朝船頭共へ相尋候へハ、風雨つよく候間、此分ニ而者、今日之出船罷成間敷由申候、一日も急敷時分ニ候處、笑止之至ニ候、少成共天氣和申候ハ、無油断可致出船候、昨日塩津千太夫有馬表を、今日二日ニ罷通於米之津、新納加賀殿へ爲逢申由申候、松平伊豆守殿も其時分迄ハ天草へ未成御渡由候、仍我々其地罷立候時分、御進上之御遺物之儀共御沙汰候つれとも、駈相究不申候、先鷹之巢之御腰物・後鳥羽院之哥之繪紙迄究申候、其外ニ何色共定不申候つる、其後いか、御談合共候哉、如御存知右之歌之繪紙之儀も、或虚堂又者名

普之祖師之墨跡など、天下ニ無隱物ニ而候へハ、大形代物も相知申候、此繪紙などハ世上ニ無沙汰物にて候間、江戸之御年寄衆も如何様之物と御存知有ましく候、惣別御遺物など御上候様子者、^{◎(關字)}御家之御爲ニ被成と見得申候、政宗などの被成様能く校候て御談合肝要ニ候、餘之事ニ存候ハ、鷹之巢之御腰物右之哥之繪紙・定家之古今ハいか、可有御座候ハん哉、定家之御手跡之儀者天下ニ無隱候間、一稜ニ可罷成候、惜キ御事ニハ御座候へ共、御家之御爲ニ御座候間、ケ様之御寶物可被立御用儀者、可爲此節候哉、薩州様者遮而被 思召寄間敷候、各へ御打任候て可有御座候間、能く御申上候而、御談合肝要ニ御座候、餘く無心元存、一書如此候、聽而罷歸可得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
 「寛永十五年」
 三月七日

伊勢兵部少輔^{◎(花押)}
 貞昌^判
 三原左衛門佐^{◎(花押)}
 重庸^判

1279

「光久公御譜中」

覺

- 一 進貢船謝恩渡唐之時、日本之武具相渡間敷事、
 - 一 今度就有馬之儀、きりしたん宗弥稠御法度之事、
 - 一 他國人御分國之水手などに紛候而、琉球へ下着之者於在之者、稠相改可被申出之事、
 - 一 八重山・宮古嶋邊へ南蛮人來着候者、可被召籠事、
- 付於有馬榊原飛驒守殿・馬場三郎左衛門尉殿へ下野

川上左將様

下野守様

參人御中

▽[◎]
下野守様

川上將監様

參

貞昌

伊勢兵部少輔

三原左衛門佐



△

1280

「御文庫拾二番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

中納言殿御死去之様子承驚存候、可申様無御座候、薩厂守殿御朦氣御手前之御心底察入存候、爲御吊以使者申入

守・山田民部少御尋申候処、御返事之様子之事、

一とけす村之濱ニ南蛮人來着候而、こつミ置候道具長崎御奉行衆へ首尾仕候、自今已後如右之様子共候者、可爲琉球之越度事、

右条く具ニ被承届、御請之書物可有進上者也、

寛永十五年三月八日

三原左衛門佐

山田民部少輔判花押

伊勢兵部少輔判花押

河上左近將監判花押

下野守判花押

金武按司

三司官

1281

「光久公御譜中ニ在リ」

候、將又中納言殿御香典銀五拾枚進之候、久々得貴意候印迄候、使者進申儀薩厂守殿へ可然様ニ頼存候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

三月八日

立花左近

忠茂判花押

伊勢兵部殿

御宿所

二月廿八日之尊書於有馬拜見、黄門様御他界被成由、

仰天仕候、貴家公私之御力落と申上も疎之儀候、取分

貴翁之御心中奉察候、御狀之通飛驒守へ申達候、則以使

者被令申候、薩摩守様御後見之儀、はしめより任貴翁

被置儀候間、自今以後就中貴殿御苦勞御賢慮御増進此時

ニ候、有馬之儀去廿七日八日兩日ニ一揆御成敗相濟申候、

御上使ハ方と御仕置被仰付候間、暫ハ彼地へ御在留被成

左右ニ相聞候、細川殿飛驒親子之儀者除明候間、歸陳候

様ニとの從 上使御意ニ付而、被罷歸候、家中之者共ハ

一揆若山ニ隠居候かと、山狩被 仰付、于今在陳仕候、拙者儀ハ去廿七日つらニ鏈疵を負申候、則其者をは討取、悴家ニ而之一番頸をは左近ニ見せ申候へとも、以之外後疵方血をひき、一圓血とまり不申候、一昨日よりそろ

くとまり申候、若此分ニ候ハ、殘命可仕候、終とまり不申候ハ、必死之外無御座候、諸家之侍共百姓にころされ候事、無念之次第と笑申事候、臥床ニも御なつかしさのま、捧一書候、彼使山田權佐と申者ニ而候、若輩者ニ候間、万端貴様へ御指南を受候へと申合候、無御隔心御下知奉頼候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕三月八日

立花宍岐守〔判〕
〔花押〕

兵部少輔様

人々御中

1282

〔雜抄〕

寺原早介重幸「年八十二才ト申傳候」

家久公御逝去之節、大口地頭新納加賀守殿江被申出候ハ、惟新様殉死之御供其節者被相留候、其一筋を以今度琴月

様江御供之儀、御免相達候、其節加賀老方親早介江末々可被添御心之御狀、于今所持候、於福昌寺御法事、御供之衆何れも靈膳手向被下候、七周忌之節、嶋津驛正久慶様方追悼之御哥一首短冊被下候、于今所持仕候、

一書申越候、貴所事中納言様御供可仕之由被申出候、御赦免之由被仰出候間、可御安心候、拙者事其地江不有合候而、殘多存候、爰元御葬礼來十日ニ相定候、其心得尤候、子息早介殿事以來共別而可添心候、氣遣入間敷候、恐々謹言、

三月八日

新納加賀守
忠清判

重幸老

御宿所

1283

頓翁宗悟居士七周忌日ニ逢待りて、手向くさとなん、

時しりて花も涙や濺らむ

鳥はこゝろの有かほになく 久慶

右寺原早助重幸子孫大口郷士寺原源右衛門所持之由候、

1284

「御文庫拾一番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

御狀令拜見候、其方御事松平伊豆守依差圖、薩州江被相

越、大隅守殿對顔之處、所勞差重種と雖養生候、不相叶、

去月廿三日遠行之由、誠不及是非儀候、御愁嘆之程察入

候、示給之趣可達 上聞候、恐と謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」

三月十日

阿部豊後守 ◎ (花押)
忠秋 (判)

酒井讚岐守 ◎ (花押)
忠勝 (判)

土井大炊頭 ◎ (花押)
利勝 (判)

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

土井大炊頭
酒井讚岐守

▽ ○

阿部豊後守

ぶ

△

1285

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶と 大隅様御存生之内ニ、薩州様御家督之儀を

も御譲り被成度由、旧冬御年寄衆迄被仰入置候、其

御使之彈正儀も、于今爰元へ罷居儀ニ候間、今度之

上使下向ニ 薩州様御事御國之御仕置をも被仰付、

爰元へ御參府候様ニと候共、少御急御參上被成ニ而

可有之候、左候者於爰元被仰出目出度可爲御安堵由、

有人御物語ニて候次第ニ承合可申入候、飛脚之故不

具候、

只今從有御方承候、黃門様御他界之由、昨日 上様御

耳ニ入御愁傷不大形由候、就其上使御下之儀も可有之候、

内と左様ニ可心得との儀ニ御座候、爲可申上此飛脚申付

候、内と左様ニも可有之かと存、昨日別府千左衛門尉之

下向ニも、大坂藏奉行衆へも若上使共候者、船之儀等油断有間敷候、又爰元方之御注進達候て、上使大坂へ御着候者、御國へも早々御注進被申候へと申越候つる、又此飛脚ニも船等誘被置候へと、具申遣候、然ハ上使誰共相知候者、追々可申上候、爰許方 上使之御供申可被參人、二階堂安房介・比志嶋監物之外一圓ニ無御座候、余之事京都迄ハ出雲守御供可申やと申躰ニ候、安藝守殿御事御手之腫物、其上御咳氣ニ御痛候而、漸々頃少御氣色能候而、今日此元御立候而、緩々と海道をも御かけ候様ニと候而、比志嶋監物大坂迄御供可被申苦ニて御座候、然處黃門様御左右相聞得、御膝氣之躰ニ御座候故、明後日方可有御立との御儀定ニ候、雖然是ハ御内々之儀ニ候間、先比志嶋監物上使可爲御供かと存候、將又松平越中守殿方御狀被遣候、此文箱ニ入申候、今朝京極山城守殿方御國へ御使可被差下間、此方より御使可參時分、同心仕候様ニ被仰付度之由候間、出雲守申候も遠國之儀ニ候条、御使ハ御無用ニ存候、具ニ其段者可申遣由申候へハ、又

御使ニ而是ほと之儀候間、御使可被遣由候へ共、重而右之旨申入候へハ、御狀計只今被遣候間持せ申候、是又可御披露候、急之故書中大形ニ御座候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」三月十日

鎌田出雲守 ◎ (花押)
政統 (判)

彈正大弼

◎ (花押)
久慶 (判)

三原左衛門佐様

山田民部少輔様

伊勢兵部少輔様

川上左近將監様

下野守様

人々御申

1286

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」光久公御譜中ニ在リ

追而此飛脚ニ日向通道へも馬人被揃、可被相待由申候、以上、

急度申候、只今能勢小十郎殿方預御使候、被仰候ハ今日

從 御城召候間、 登城候へハ御國へ爲 上使可被下由
被仰付候、爲御心得被成注進之由候間、小十郎殿へ承合
候へハ、御殿馬ニ而可有御下候、いかにも輕可被成由候、
御乘舟も從此方可申付候旨申入置候、中途之御供者比志
嶋監物へ申渡候、左候而京都方御國へ者菱刈半右衛門御
供可被申由申遣候、若差合候者、鎌田左京可被參由申遣
候、小十郎殿儀も明日 御城へ被爲上、御意趣御承之由
候、左候而人數などの儀も細く可被仰由候、右之段爲可
申上如斯ニ候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

三月十日

鎌田出雲守 ◎(花押)

政統判

彈正大弼

◎(花押)
久慶判

下野守様

川上左將監様

伊勢兵部少様

三原左衛門様

參人と御中

彈正大弼
鎌田出雲守

下野守様

川上左將監様

伊勢兵部様

三原左衛門様

久慶

寅三月十日ノ狀同廿六日ニ御道具衆持下候、 黃門様御他界ニ付上使
能勢小十郎殿御下向之由也

1287

「光久公御譜中」

家光公聞家久之計、以能勢小十郎給香奠白銀五百葉、且
投奉書咄光久、光久既發行之後、小十郎帶之下著于薩國、

1288

「光久公御譜中」

「正文在文庫拾二番箱三拾」
八卷中
大隅守逝去之儀達 上聞候之處、心底之程察思召候、仍

爲香囊銀子五百枚被遣之候、御意之趣能勢小十郎可述之候之間、不能詳候、恐く謹言、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕

三月十一日

阿部豊後守 忠秋〔判〕〔花押〕

酒井讚岐守 忠勝〔判〕〔花押〕

土井大炊頭 利勝〔判〕〔花押〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

土井大炊頭

酒井讚岐守

阿部豊後守

1289

〔古御文書三拾六卷中〕

▽◎ 已上

急度令啓上候、仍呂宋船長崎へ歸朝申之由、上様江御

1290

〔光久公御譜中〕

爲獻家久之遺物、寛永十五年三月十三日馳島津下野久

元乎武城、

注進御座候、然者ばたん舟一艘、其御國京泊へ着申之由、被爲及 聞召候、ばたん舟にて候哉、又何之舟にて候哉、実儀具ニ可被仰越候、荷物なども何色之物參候哉、其段も彼舟ニ被成御尋様子被仰上〔判〕尤候、從 上様

ばたんへ被遣候御船、歸朝申候哉之段、被爲 聞召度之御詫ニ候間、京泊へ着申候舟之様子、早く可被仰上せ候、南面返にも早飛脚差下申候、此書狀參着次第無御由断早飛脚を以可有御注進候、御由断有間敷候、恐惶謹言、

三月十八日

山口勘兵衛〔判〕〔花押〕
直友

薩摩少將様

參人と御中

〔本文書ハ編年ヲ誤レルモノナルベシ〕

○父家久去歲在病牀之日、自知不可起走家老島津彈正久

慶于東武就執政訴曰、仰請可以家督給光久矣、未受其

報遂辞世矣、光久遣家老伊勢兵部貞昌・三原左衛門重

庸於信綱之在有馬告曰、雖今沈悲哀之深不忍居侯高

命、早謁東武奈之何矣、信綱云、宜發駕、回茲寬永十

五年三月十七日發覺城、伊勢貞昌扈從、二十二日解纜

於阿久根本作莫爾、經赤間關到大坂、四月二十四日參著武

城、同二十六日 將軍家以阿部忠秋勞參覲、五月八日

土井大炊頭利勝・酒井讚岐守忠勝・阿部豊後守忠秋奉

旨、招光久于利勝之館、光久即赴、又秋山修理亮・井

上筑後守政重、奉而召家臣島津彈正久慶・同下野久元

・伊勢兵部貞昌・鎌田出雲政統、皆馳候焉、利勝述

台命曰、亡父大隅守家久所傳之分國相繼賜薩摩守光

久、宜承知之、亦告 台命于家臣等、光久拜謝恩榮之

辱、同十三日登柳營奉述襲世之禮、獻以國行太刀一

腰・白銀千葉・絹五十卷、拜畢將退去時、召之進席

頻、光久膝行稽顙 公口自謂曰、不量大隅守未暨衰耄

而速沒矣、可惜之太也、吾年齒猶弱、卿亦然、如大隅

守之老者辭世不可不憂思、爲國家景慕之也、弟又八郎

忠平及島津久慶・同久元・伊勢貞昌・鎌田政統四人共家老

各獻上御太刀・馬代・御單衣三・御帷子三、新納右衛

門久詮・喜入休右衛門久洪・類娃長左衛門久政・相良

奎助長信四人共使役等亦奉獻御太刀・馬代・御帷子五領光

之領國者在西藩、不得急、招家臣、故今取拜謁者不多又召之諸 御前降尊詞云、大隅

守之事可惜也、光久弱齡、汝等宜一心而輔佐光久安領

國令古昔連綿之家益長久矣、共雙眼浮感淚、敬拜頓首

而退、

1291 「下野守久元譜中」

寬永十五年戊寅三月進発、同十七年庚辰五月歸國也、

1292 「下野守久元譜中」

末子又五郎久近者未卒志學年齡、不幸短命死者去歲之
去也、其法號機逸休外大禪定門云云、追悼之餘建立梵宇

「正文在休外院」

覺

合高百三拾三斛者

内 百斛者

三拾三斛者

買地

西之園門

郡山之内

東保

鹿兒嶋吉田之内

右者休外院之爲茶湯之永々付置候、縦御家中惣御支配雖
相替、返地配分之儀子々孫々ニ至迄相違有間敷候、仍爲
後證一筆如件、

寛永十五年三月吉日

下野守

休外院住持

内儀方

舜哲

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」 「光久公御譜中ニ在リ」

尚以彈正儀、薩州様御歸府迄御番可相勤由承届

候、仍而大坂より爰元へ參候御物之送狀、此度差下

候、火事より以後之分を見合被寄候、乍去此外ニ不

見出送狀も可有之と存候、方々尋求候へ共、替合之

儀ニ而、何茂然々有所ヲ不存候、先見出候分を三札

ニ仕進入候由、物奉行衆被申候、

桑畑藤右衛門尉・大脇正右衛門尉去廿七日未明〔□〕[◎]參

着候、又御方ヲ去月五日ニ罷立候飛脚、同日晝過ニ參

着候而、追々御左右承達候、

一御葬送先月十日之御日取ニ相濟、薩州様御事御葬過

候ハ、近日當地へ可有御參府由候哉、就其松平伊豆

守殿ニ爲御内談、有馬へ兵少老御使之由候、定早々御

返事相聞得候ハんと存候事、

一爲御使野州老近日御方御立候而、此方へ御參上之由

候、御宿之儀芝之定御宿へ被相誘候様ニと申渡候事、

一有馬一揆之者之城、先月廿七八日ニ落去付、爲御祝詞

御使可被差上由候つれ共、仕合相良主計方爰許へ參上候間、御年寄衆へ被進候 御連署、彼人持參可被仕由得其意候、未無參着候間、被參次第則持參可被申候、并御案文具ニ拜見仕相心得候事、

一有馬表へ山民少・新賀州・市八左殿・伊地知杢右殿なと被爲居、皆々手ニ被合候、其上諸外城衆手柄候而、首共及式百被捕候哉、一段之仕合候、此方へハ何方よりも不相聞得、御書面ニ而令承知候事、

一爰元餘無人ニ付、輕衆可被差上由候へ共、御上洛可爲、近日付被相留之旨承知候事、

一兵少老より承候、爰元御奥方へ狀以可被仰上候へ共、今朝有馬へ御越候故、無其儀由細々申入候、御宿所へも同前ニ申届候事、

一爰許御借銀一圓無之候而、御手廻候、京・大坂へも雖申上せ候、銀子無御座候而、御借銀之利拂さへ不罷成候故、借銀仕此方へ指下儀も難成由候、從御方茂急度銀子被差上儀罷成間敷候哉、何共笑止千萬候事、

一大廻船新納勘解由殿へ仕出、奉行被仰渡候哉、次第ニ時分罷能成候間、當地へ追々着船候へんと待申候事、一久志本式部殿被爲作候付、そてつ之儀被仰候哉、大廻船ニ可有御乘由候、此方へ參次第式少へ進入可申候、將又此方上下之御屋敷何茂御無事ニ候、世上も無相替儀候間、可易御心候、尚期後音時候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
「寛永十五年」
四月朔日

鎌田出雲守
政統〔判〕〔花押〕

彈正大弼
久慶〔判〕〔花押〕

三原左衛門佐様
山田民部少輔様
川上左近將監様
伊勢兵部少輔様
下野守様
人々御中

▽◎

○印 下野守様

伊勢兵部様

川上左近將様

三原左衛門様

山田民部少様

参

久慶

彈正大弼

鎌田出雲守



〔末紙ニ〕
實四月朔日之狀、同廿一日梶原七左衛門被持下候
右書中ニ伊地知左衛門トアルハ季通カ先祖也△

1295

〔御文庫拾八番箱三拾二卷中〕「光久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓候、然者只今藝州之内からうと申所にて、御
塩懸り候處、江戸方飛脚來着候、其書中ニ者兎角之儀無
之候、相良丹後守御使ニ被指上候御返書迄にて候、鎌田
左京殿方去月廿七日夜之九ツ時之日付之狀、此飛脚ニ而

被遣候、其狀ニ 黃門様就御遠行、爲 上使能勢小十郎
殿薩摩へ御下之由候、江戸を去月十二日ニ被爲立、同十
八日ニ大坂出船被成たる由候、然時者最早細嶋へ可被成
着船と存候へ共、爲御注進此飛脚即如其元指下候、少も
前方相知間敷候間、俄之儀ニて彼是御心遣察入候、定小
十郎殿も 薩州様其許へ不被成御座候間、追付可爲御上
と存候、右ニ如申候、江戸ニ而ハ小十郎殿御下候儀不相
知候つる哉、彈正殿・出雲殿方之書中ニも相見得不申候、
從酒井讚岐守殿我等へ御狀ニ通被下候へ共、其御狀ニも
不被仰聞候、鎌左京殿狀ニ、前方度々注進申候と御座候
間、定其許へ可申來と存候、從讚州公も 薩州様御急候
而御參府尤候由、御書中ニ相見得申候、今度者御仕合能
候而、阿久根を去月廿二日被成御出船、芦屋へ兩日御逗
留之外者、一日も無滞、今日未之刻此地へ御船懸り候、
此分ニ候ハ、五三日中ニ大坂へ可爲御着船候、御留守
之儀ニ御座候間、定小十郎殿へ御首物共者有之間敷候、
於江戸可有御沙汰候、尚期後音候、恐惶謹言、

1296

「朱カキ」
「寛永十五年」
卯月二日
伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌〔判〕

川左近將様

山民部少様

三左衛門様

人々御中

川上左近將監様

山田民部少輔様

三原左衛門佑様



参

貞昌

伊勢兵部少輔

寅卯月二日之狀藝州からうとど同七日ニ到來

「御文庫拾二番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆申入候、然者最前申入候皆吉長右衛門弟芦塚權右衛門と申もの、歳比廿四五ニ成申もの、よし、薩戸守殿御

1297

舍弟北郷式部殿ニ居申由、嶋原方只今到來候間、穿鑿被致、御とらへ、小倉迄可有御越候、彼者不参以前ニ、我等共當地出舟いたし候ハ、大坂迄御越、町奉行衆へ可有御渡候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

卯月十三日

戸左門

氏鐵〔判〕

◎（花押）

松伊豆守

信綱〔判〕
◎（花押）

山田民部殿

北郷佐渡殿

「御文庫拾貳番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆申入候、然者嶋原城ニ有之大筒・石火矢・鉄炮・玉薬、大坂江上せ申候間、御領分之舟嶋原迄廻し被申、彼地ニて右之鉄炮小笠原壹岐守・久留嶋丹波守・下曾根三十郎方々請取積ニて、到大坂兩町奉行衆迄相届させ可被

申候、舟數員數者老岐守・丹波守・三十郎方より可被申
入候、右之衆方鉄炮ニ、大坂へ宰料付可置候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕

卯月十五日

戸田左門

氏鐵〔判〕
〔花押〕

松平伊豆守

信綱〔判〕
〔花押〕

北郷佐渡殿

山田民部殿

▽◎

北郷佐渡殿

松伊豆守

山田民部殿

戸左門

嶋原へ有之石火矢・大筒・鉄炮之玉薬、大坂へ被召上せ候舟之儀、當
國へ可申付由之御狀、卯月廿四日之朝、諸國次飛脚ニ而相届候、

小倉方



△

1298

〔光久公御講中〕

覚

一今度貴理師旦宗御法度ニ付、御改之儀被仰下候、琉球
國中之儀稠改申付候、貴理師旦宗一人御座候、其外右
之宗躰之者一人も無御座候事、

右八重山嶋本ミやうの与人、きりしたん致落着候哉、
如御法度早と火あふりニ可被仰付候、唐人三たい事
南蠻人へ出入仕候曲事之儀候間、可被加成敗候、何
も其首尾追而可被申上せ事、付自今以後きりしたん
宗弥稠可被致禁制候事、

一琉球國中人數老人も不穩置相改、目錄差上申事、

右琉球國中人數改之目錄并人數一人も不隱置由、改
衆の起請文髓請取置候、向後行衛不知もの參候者、
稠□召籠、遂糺明此方へ可被申上事、

一當國へ數年居付之旅人堅相改、五人与申付候、自今以
後大和方無御下知旅人召置申間敷事、

右運賃舟之船頭、水手ニ紛候而、旅人可相渡候間、

能く入念相改、於他國人者召籠候て、此方へ可被申事、

寛永十五年四月十五日

三原左衛門佐判

山田民部少輔判

川上左近將監判

三司官

金武按司

1299

「御文庫拾貳番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆申入候、仍而松倉長門守嶋原之城被置候石火矢・鉄炮・玉藥、大坂へ其元之船ニ而廻し候様ニと、伊豆殿・左門殿が被仰越候、各へも其通申參儀候、船數之儀十端・十一端程之船廿四五艘も大形入可申と存候、自然不足成儀も可有之候間、四五艘も餘慶御越可然候、爲其如此候、恐く謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」
卯月廿一日

小笠原壹岐守◎(花押)
忠知[判]

久留嶋丹波守◎(花押)
通春[判]

下曾祢三十郎◎(花押)
信恒[判]

北郷佐渡守殿

山田民部殿

御宿所

▽◎
北郷佐渡守殿

山田民部殿

御宿所

忠知

通春

信恒

小笠原壹岐守

久留嶋丹波守

下曾祢三十郎

嶋原へ有之石火矢・大筒・鉄炮之玉藥、大坂へ被召上せ候舟之儀、此國へ可申付由候、伊豆守殿・左門殿が被仰越候ニ付、此状も參候、四

月廿四日朝、諸國次飛脚ニ而相届候、

1300

「光久公御譜中」

猶と傳右衛門者廿五日ニ打立、心得候て御座候、其心得尤候、以上、

今晚者可歸申候間、可承候へ共申候、中納言様之時者被遊登城候折節者、御陸衆いかほとにて候哉、承度存候、今度財部傳右衛門下候ニ付、作之くら具御持せ遣候、其心得尤候、伊勢兵部少輔前より國元之老中衆に、此くら川上五次右衛門尉ニ相渡候様ニ申被遣候、左様之狀調候而被届へく候由、兵部少へ被申候、尤候、巨細被歸候時可申候、

「朱力キ」四月廿四日

光久○(花押)〔御判〕

「本ノマ、」右衛門佐

屋〆

左馬佐

1301

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」 「光久公御譜中ニ在リ」

追而申候、

一此表相替儀無御座候、御出頭衆何茂大分限共御成候、定其許へもはや可相知候、有馬へ者高力攝津守殿御移候、天草へハ山崎甲斐守殿御移候、定御使可被進候、近日鎌田源左衛門尉殿歸國之儀候間、其節可申下候事、一攝津守殿者昨日此地御打立候、定於濱松御用意共候而可有御下候、就其從攝津守殿被仰候者、有馬表米可爲大切候間、於御國米を御買せ候而可被進之由被仰候、黃門様以來薩州様へ茂連く別而御念比之儀御座候間、其地ケ様之時分者御馳走候而可然儀候条、御物之錢米共候ハ、當時直成次第御賣渡尤候、御物無之候ハ、諸侍之米をも可被賣候様可被仰渡候、上方へ仕上之用意共候衆者不及是非候、無其儀衆者被賣候様可被仰付候、於此方攝津守殿へ被成御返事候ニも、此比者毎年米大坂へ上候間、御國へも米可有御座儀難計候へ共、少成共殘米候ハ、可致馳走由可申遣候由御返事

申入候、何とぞ御談合候而、米被爲買候様可有御談合候事、

一豊後之御目付衆之替、能勢次左衛門尉殿・大久保權左衛門尉殿へ被仰付候、此由其許へ可申遣由御意候事、

一國府之川堀之儀(堀)、其元御立前御沙汰候つれ共、落着之儀不被聞召候、如何相濟候哉と思召、今度鎌田源左衛門尉へ御尋候へハ、川堀之談合候而、喜入攝津守奉行

ニ相定、近日可被相立用意候處、俄上使御下ニ付相延候、其後如何相濟候哉と被申上候、思召候者、時分柄百姓なども痛可申候、其上自然國府ニて城之御普請

など有之などといひゞき候へハ如何候間、彼是以先此節者被相延可然之由御意候間、可有其御心得候事、

一諸牧之父馬取せ候而、可被召置之由被仰付候、委細者從國部(分)帶刀所可申遣候間、被任其旨可有談合候、彼父馬被召置候ニ付、諸百姓之煩ニ成候ハぬ様可被申之由御意候事、

一諸事 黃門様御遠行之後改候儀、御遠慮ニ思召候、御

家督之儀も未被 仰出候處、御國之御作法御改候様ニ取沙汰候へハ、如何 思召候条、左様可被相心得之由御意候事、

一御遺物之儀定かね候、昨日下午野守・讚岐守殿へ松平越中守殿致御供、鷹之巢之御腰物實利之御太刀・三幅一對之御掛物・瀬戸之御茶入致持參、懸御目候へ共、政宗進上之様子ニ被引合、重而可被仰之由候、鷹之巢者さかり過たる由、本阿弥光伯被申候、実利者一段見事之物にて候、金五拾枚程可仕かと被申候、政宗御進上之御遺物ニ而者過分ニ直付可相替候、虚堂之三幅一對さへ金五百枚ニ被爲買候、茶入之直可爲過分候、將又御代替之御祝物、松平越前守殿時之書立を所望申候、過分之内目候、可有御推量候、尚期後音候、恐惶謹言、

鎌田出雲守(花押)
政統(判)
卯月廿九日

伊勢兵部少輔(花押)
貞昌(判)

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

伊集院左近殿之儀、俄御使被仰付被罷上候間、先々歸國被仰付候、然者一昨日八日薩州様、大炊頭殿へ御出候様ニと御座候而、彼御宿所へ酒井讚岐守殿・阿部豊後守殿など被成御出合、薩州様御家督之儀御承候而、千秋萬歳目出度奉存候、此等之旨早々以伊集院左近可被仰遣之由御意ニ付、如此候、此方之御家老衆も皆々大炊頭殿へ參候而、仰出を可承之由候而、彈正大弼・下野守・出雲守・兵部少致御供被_(關字)仰出せ承候、御説之旨者大

三原左衛門様
山田民部少様
川上將監様

人々御中

下野守
久元_(花押)_(判)
彈正大弼
久慶_(花押)_(判)

炊頭殿被仰候、於御當座讚岐守殿被仰出候者、尤ヶ様ニ社雖可有之候、兩國半大國之儀候処、不相替御家督之儀不淺儀候、下と迄も満足ニ可被存之由被仰候つる、黄門様御遠行候へハ、則御國へ上使、又此地へ御參府候へハ、御着候二日目ニ豊後守殿爲上使、早々御參府之由被成御承、御家督之儀も追付被仰出、於御前之儀者殘所無御座候、定近日_(關字)御目見得可有之候、御進物等之用意折角致談合事候、委細者口上ニ可相達候間、不能詳候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」
五月十日

鎌田出雲守_(花押)_(判)
政統_(判)
伊勢兵部少輔_(花押)
貞昌_(判)
下野守
久元_(花押)_(判)
彈正大弼
久慶_(花押)_(判)

1303

「光久公御譜中」

今日薩广守殿御仕合能繼目之御礼被仰上、就中各も御前へ被召出、種々御悃之 上意之趣、御満足令察候、仍爲

三原左衛門様

山田民部少様

川上左近將監様

人々御中

「末ニアリ封面略」

薩州様御家誓之儀就被仰出、伊集院左近殿被持下候、江戸を五月十日ニ打立、六月四日ニ下着也

▽ ◎ 川上左近將監様

山田民部少様

久慶

三原左衛門様

参

ノ

彈正大弼

下野守

伊勢兵部少輔

鎌田出雲守

△

1304

「全上」

今日薩广守殿御仕合能繼目之御礼被仰上、就中各も御前へ被召出、種々御悃之 上意之趣御満足察入存候、仍爲

御祝儀と御太刀一腰・御馬代銀子壹枚御持参、忝存候、

何茂重而期面談之節候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」五月十三日

忠勝○(花押)判

御祝儀御太刀一腰・御馬代・銀子壹枚御持参、忝存候、

孰茂重而期面談之節候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」五月十三日

忠勝○(花押)判

ノ 頼娃長左衛門殿

まゐる

酒讚岐守

ノ 鳴津彈正様

まゐる

酒讚岐守

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶去八日於土井大炊頭殿御用御座候間、御家老之處、酒井讚岐守殿・阿部豊後守殿何れも御着合候而、御家督之儀無違儀被仰出候、左様之段以伊集院左近將監殿被仰下候へ共、定此飛脚より遅可有御座候と存、又く如此候、以上、

急度令啓候、然者今日繼目之御礼被仰上、無殘所御仕合候条々、

一御進上物御太刀一腰國行・銀子千枚・卷物五拾端

一御禮被仰上御退出候へハ、又御參候様ニと御座候而、

御直ニ被成 御詫候趣ハ、大隅守 思召外、急ニ遠行

惜ク思召候、上様◎成も薩摩守も御若く御座候、大隅

などの様成古來之衆、如此被成果儀咲止ニ 思召候由

被 仰出、其後又八郎殿・彈正大弼・下野守・鎌田出

雲守・穎娃長左衛門尉・喜入久右衛門◎尉・新納右衛門

佐・相良左之助・伊勢兵部少輔此衆致 御目見得罷退

候処、又く何れも一同ニ 御前近く被召寄、土井大炊

頭殿・酒井讚岐守殿被成御祇候、御直ニ 御詫之趣者

大隅守思召外急ニ被相果、別而惜く◎關字思召候、薩摩守

若く候間、家老共別而入精守立候而、久敷家弥長久候

様ニ可有之儀肝要ニ 思召之由、其外種々長く敷 御

詫ニ而御座候つれ共、御調子ひきく又ハ 御前ちかき

ニ恐、はひまうの故巨細ニ者不承届候、如斯 上意於

他家も有之儀ニ候哉、皆く涙之こほれ候程忝仕合ニ御

座候つる、因茲存量候ニ、被對御家者連く何ぞ悪様ニ

不被 聞召入かと存候、目出度御事不可過之候事、

一前方松平隱岐守殿より以御条書被仰候ハ、御繼目之御

礼之時御家老多人被召寄、 御目見得候而可然之由御

座候つれとも、俄ニ被仰遣候儀も不罷成候ニ付、御使

衆 御目見得御させ候、政宗之御息越前殿繼目之御礼

ニ者、一門家老衆式十二人爲被罷出由候へ共、此方ハ

左様之衆俄ニ不罷成候ニ付、右之分ニ候事、

一此衆進上物之儀、大炊頭殿・讚岐守殿御談合ニ而、御

太刀ニ御單物帷子三重、其外ハ五ツたるへき由候而、家老衆ハ御帷子六ツ之内單物三ツ充にて候、御使衆ハ御帷子五ツ充にて相濟候、よき時分ニ今度之御使衆御供候而、無殘所仕合之事、

一急度御暇出候而可爲御歸國と、皆々御内意共候間、於其儀者早速注進可申候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
寛永十五年

五月十三日

〔御譜二十二日トアリ〕

伊勢兵部少輔◎〔花押〕
貞昌〔判〕

鎌田出雲守◎〔花押〕
政統〔判〕

下野守
久元〔判〕〔花押〕

彈正大弼◎〔花押〕
久慶〔判〕

三原左衛門佐殿
山田民部少輔殿
川上左近將監殿

人々御中

〔末二〕

五月十二日得御目□□之由六月七日到來

〔封面ノ名略〕

▽◎

川上左近將監様

三原左衛門佐様

山田民部少輔様

参

下野守

彈正大弼

鎌田出雲守

伊勢兵部少輔

△

○
/

1306
〔御文庫拾九番箱三拾三卷中〕「光久公御譜中ニ在リ」

以上

正月四日之尊書同三月朔日到來、謹而拜見仕候、有馬・天草之貴理師且共立歸起一揆、度々致合戰候旨承候、然処ニ二月廿八日ニ落去仕、天下御静謐之由、目出度奉存候、就其殘黨共於流來者、搦捕可差上由承候、若とらへ

候事難成候者、可討果由被^{◎(關字)}仰下候、慥ニ承候、將復南

蠻人嶋中へおり候ハ、一刻^{◎(茂)}も不召置早と可追出由候、

自然舟損候而可參方無之由申者、飯米木水など少茂不出、

飢死いたし候共不苦、一所ニ追籠召置候而可申上由承候、

是復慥ニ承届候、隨而ハ此許之貴理師且之改之帳、我那

覇持上候間、定而可奉捧候、猶委曲者四本内藏介殿可有

言上候間、不能詳候、誠惶誠恐謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕

五月十九日

浦添 重利^{◎(花押)}〔判〕

豊見城 盛良^{◎(花押)}〔判〕

勝連 良繼^{◎(花押)}〔判〕

御老中様
御近習中

〔光久公御譜中〕

以上

一筆申達候、薩厂守殿御繼目之御礼被仰上候旨、目出度
御事不可過之候、各御大慶察存候、然者爲御祝儀以使者
申達候、可預御心得候、委細奥平左忠口上ニ申含候、恐
と謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕

五月廿二日

松平越中守 定綱^{◎(花押)}〔判〕

嶋津彈正殿 御宿所

1308

〔御文庫拾二番箱三拾八卷中〕 〔光久公御譜中ニ在リ〕

已上

先日申入候舟、何も爰元へ參着申、石火矢・大筒・玉藥
積候而、式拾四艘ニ而大坂へ廻し候、被入御念使者御指
添候而御越候、何も入精被申候、是者三十郎申候、右之
外ニ船壹艘ハ爰元諸道具積候而、大廻しを江戸迄届度之
由、能勢四郎右殿被申候ニ付而、其元方之使者船頭衆ニ
相談候而遣之候、其段御心得可有之候、恐と謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕

五月廿八日

下曾根三十郎^{◎(花押)} 信恒^{◎(花押)}〔判〕

久留嶋丹波守◎(花押)
通春(判)

小笠原吉岐守◎(花押)
忠知(判)

1309

「御文庫拾九番箱三拾三卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

御請

川上左近將監殿

山田民部少殿

三原左衛門佐殿

川上左近將監殿

山田民部少殿

三原左衛門佐殿

小峯岐守

久留丹波守

下三十郎

嶋原之道具、大坂へ被召上ニ付而、當国々舟廿五艘被遣候儀也、
上乗園田滑左衛門にて
嶋原方

△

一進貢船謝恩渡唐之時、日本之武具相渡間敷由、具奉承
届候、弥以武具吳國江曾相渡間敷候事、

一就有馬之儀、きりしたん之宗弥々御法度之由承届、諸
嶋ニ稠申付候事、

一他國人御分國之水手などに紛候而、琉球江下着之者於
有之者、稠相改可申上由被仰下候間、其通諸浦役人江
弥堅申付候事、

一八重山・宮古嶋邊江南蛮人來着候ハ、可召籠由被

仰下候付、於有馬榊原飛驒守殿・馬場三郎左衛門尉殿

江下下野守殿・山田民部少輔殿より被成御尋候処、御

返事之様者奉承届候、彼兩嶋へ當三月より番衆差渡、

稠申付候、弥可入念事、

一とけす村之濱ニ南蛮人之埋置候道具、長崎御奉行衆へ
御首尾被遊候旨、被 仰下候之趣奉承届候、自今以後
如右無之様ニ地頭衆へ申付、堅番仕候之事、

右之條、具奉承届、御請之書物進上申候、若雖爲
一ヶ条相違於申上者、如何様ニも曲事之段可被仰
付候、以上、

寛永十五年六月八日

浦添判花押
豊見城判判花押
勝連判判花押
上具志河判判花押
金武判判花押

御老中衆様

「光久公御譜中」

猶、爲御祝儀御自分へ帷子五之内單物二令進之候、
以上、

一書令啓候、然者去十三日薩广守殿継目之御札無相違被
仰上、御前御仕合殘所も無之候由承、目出度存候、各
御満足察入候、隨而爲御祝儀以使者申入候条、薩广守殿
可然様ニ御心得奉頼候、猶此者口上申合候、恐、謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」
六月十日

嶋津彈正殿
御宿所

松隱岐守
定行判判花押

「正文新納氏家藏」

一和老
御宿所

新納加賀守
忠清

猶、是式候へとも、田舎茶送進申候、於有馬落城之
刻、城近く參永、寺領不及是非儀ニ候、如御存知之
刑部太輔戰死之地おや弥太右衛門躰仕候事、各、御
存知之前ニ候、拙子事適、參合むなく歸候ハん事
殘多存候処、軍神又者拙者齋者之寺も能候つるや、仕
合能所ニ參逢、寺領之躰ニ候得共、我等一世之本望
達候、早、御面以いにしへの御咄も承、我等手前之
其物之様子を咄申度存暮候、以上、

久、不得御意、御床敷令存候、達者御座候由承大慶存候、
拙子事も于今寺領之躰ニて罷在候、一昨日爰元江罷越候、

懸御目相積候儀共咄申度候、恐々謹言、

〔寛永十五年〕

林鐘十三日

忠清〔判〕
〔花押〕

1312

〔光久公御譜中〕

已上

爰許御立之刻者、泉齋所迄御書中披見、珍重存候、如仰
今度者折々申承、本望存候、將又諸白兩樟・白鳥一羽給
候、誠御懇慮之段別而忝存候、永々御逗留候へ共、御手
前御所勞、其上私も何角不得隙候而、存程不申承候、恐
々謹言、

〔朱カキ〕

〔寛永十五年〕

六月廿八日

土大炊頭

利勝〔判〕
〔花押〕

嶋津彈正殿

1313

一 たてがみ

ちやせんかミ

一 大びたひ

一 下ひげ

1314

〔光久公御譜中〕

以上

一大脇指 一尺七寸以上

一 なか刀 二尺八寸以上

一 高も、だち

一 大まへ引合

一 は、ひろ帯

一 紋所縫

一 下じけんふ

上帯 下帯 入り
小者草履取已下 袖口

一 辻たち

一 尺八 さみせん

一 御供の時高雑談高わらひ

一 道かたより可通支

一 女乗物よけ可申事

一路次にて行あたり候とも、とかめ申ましき事、

寛永十五年七月朔日

爲御音信琉球布式卷送給候、御心付忝存候、然者今度於
江戸薩广守殿繼目之御札相濟無殘所、御仕合各御満足察
入候、何様追而可申述候間、不能詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
「寛永十五年」

七月廿日

板倉周防守

◎〔花押〕
重宗〔判〕

鳴津彈正殿

人と御中

〔光久公御譜中〕

以菱刈半右殿蓮金院へ尋申條々、

一廻向院此方之御宿坊ニハ、いつの時分より被成候と御

聞傳候哉、

一蓮金院へ御宿坊替候時之次第之事、

一廻向院へ石塔御立候所ハ、惣高野之内之寺地ニ而候哉、

寺々ニ分り候而、廻向院も面々ニ塔場御座候哉之事、

一廻向院へ 龍伯様迄之御影・御位牌有之由候、蓮金院

へも 惟新様之御位牌有之由候、それハ御國方上り候

哉、御靈前之道具も皆御國方參候哉之事、

事、

〔朱カキ〕
「寛永十五年」

七月廿四日

〔御文庫拾九番箱三拾三卷中〕「光久公御譜中ニ在リ」

覚

一鳴津様御宿坊初中後相替たる夏、元ハ是雖爲谷上増幅

院、廻向院、今代増幅院ニ草履とり仕居申、後チ世間

衆まかりなり候増幅院之納所を仕居申候キ、其時の増

幅院之住持手前薄キ故、彼納所之銀子など借用申候、

左様之刻彼納所廻向院を 鳴津様をも彼借銀の出

入ニ付而、廻向院の御檀那と仕候之由、於野山風聞ニ

承候、

一蓮金院御建立之次第夏、

夫蓮金院ハ往昔 頼朝の御建立たりといへとも、中葉

及退轉候、其後有興隆之僧、彼一字を建立シ寂定の後ニ者、次第く血脈相承ニ以テ坊舎を付屬シ、蓮金院四代以前之住持全秀◎正順房と申候、其刻自御國元於高野山号、嶋津様御祈念所又ハ爲御菩提所、学侶坊一字御建立被成度之由ニ而、爲成正院御使僧御のほせ被成候、成正院盡丹精種く御覺候へ共、有誰才覚申者無之故、学侶之夏宝性院・無量壽院兩所色く御頼被成候、其砌彼蓮金院住持正順房と宝性院政遍法印と、師弟之契約被仕候故、蓮金院一字 嶋津様へ御馳走可申之由、彼正順房被申付候故、無異儀蓮金院寺同寺地知行三十五石、皆以價銀四十貫目餘ニ賣被申、其後結構普請等被遊、自 惟信◎新様、爲宝性院政遍法印隱居所、宝性院へ被進、政遍法印入寂之後、先住真遍ニ讓狀仕被置候故、眞遍住持職相勤候、弥く從御國元知行百石被成御寄付、永代 嶋津様可爲御宿坊之旨、黄門様御書物并御老中書物等頂戴仕、家の重寶不過之御夏候、一石塔御建被成候起之夏、

先高野山の大法ハ從旦方石塔など御建被成候へハ、其石塔之起なども以代物從旦方永代御買取被成御建候、其例數多御座候、但 龍伯様御石塔之起ハ、いまほと出入之時分ニ而候へハ、廻向院如何様ニ可申哉、不及愚慮候、先く山之大法ハ自何方御建被成候も、從御旦方價銀出申夏ニ候、
一御位牌御建被成候之夏、
從御旦那方日牌月牌御志之時、御出被成候、料物ハ爲當座、供物又ハ永代之供物の料たる夏、山の大法無其陰候、
一蓮金院ニ御位牌御立候次第之夏、
龍伯様御位牌御◎坐候へ共、是ハ先師蒙靈夢私ニ◎知置申候、從 惟信◎新様以來御位牌、御國元より御立被成候、其外御老中御家中之御位牌あまた御座候へ共、皆く御施主御座候而、御建被成候、
一於高野山宿坊御替被成御人數之夏、
奥州建殿之御宿坊、自往古雖爲宝性院、正宗之御親父◎伊達

輝宗之從御時代、觀音院と申寺ニ御替被成候、乍去知行ハ正宗殿より御出被成候、宿坊爲觀音院夏いまに相違無御座候、

一 加賀肥前殿之御宿坊、自往古雖爲悉地院、〔本マ、レ〕十七八ヶ年

以前より天徳院と申寺へ御替被成、于今無恙相續申候、其外小名ニもあまた御座候へ共、まつく略筆候、以上、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕

七月廿四日

高野山 ◎蓮金院〔判〕
◎〔花押〕

嶋津彈正大弼様

〔寛永十五年比カ〕

〔御文庫拾九番箱三拾三卷中〕「光久公御譜中ニ在リ」

從町田出羽守殿使者被成進上候間、幸ニ存一書令啓候、

一 昨日以御奉書 薩州榑江御承之趣爲可申入、即◎御奉書之写差下候、可有拝見候、先以有馬へ御下之様子、

天草へ人數被遣置候儀共、無吳儀被仰出目出度候、

薩州様有馬へ御下之儀者、路次無御延引御急候間尤如此可被 仰出候、天草之儀者、御家中之衆色々無行儀之儀共候而、如何敷存候処、左様之儀も無別儀、千秋萬歳候事、

一 鬼塚源太左衛門尉昨日此地へ來着候而、被仰越候趣具承届候、其内於有馬表御家中衆被破軍方候由被仰出、寺家共被仕候、此中者鍋嶋殿・神原飛驒守殿など被召寄、稠及御沙汰候間、若諸國へ被仰出儀も候ハん欵と存候処、昨日之 御奉書ニ而安堵仕候、就其申事候、有馬へ被罷渡候衆之書物共一と見申候、惣別城責之時そなへの場を相はつし、手ニあわれたる衆などの儀者、從 公儀さへ曲事と不被 仰出候者、一旦寺家被仕候間、定可被 召出候、從◎〔此〕方天草へ被參候様ニ与被仰付候衆、天草へ者不參候而、如有馬氣任ニ被參候、又從天草物頭衆へ無斷氣任ニ有馬へ被參候衆、ケ様之衆之御沙汰を稠被 仰出儀ニ候処、其段者此度兎角不相聞得候、城責之時爲被合手衆之書物ニ而御座候、右

如申此段者もはや一旦寺家被任候間、御前茂相濟可

申与存候、右申候氣任之衆を、能く御沙汰候而可被仰

上候、其旨先日委申遣候間可相達候、將又下野守申候

新納加賀守殿有馬へ爲被罷越儀者、下野守委存候間、

今度書物之趣少茂無相違候事、

一御暇之儀兎角未被仰出候、待遠御座候事、

一從琉球系之儀未兎角不申來候哉、承度候事、

一當年其元風吹不申候哉、作之おもてハ能候様ニ相聞得

候、此元盆前ニ少風之氣色御座候つる、如何と申事候、

尚期後音候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕

七月廿六日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕

貞昌〔判〕

下野守

久元◎〔花押〕
〔判〕

鎌田出雲守様

三原左衛門佐様

山田民部少輔様

川上左近將監様

彈正大弼様

人々御中

1318

〔光久公御譜中〕

今度繼目之御礼申上仕合目出度之由候而、使者殊太刀一

腰・馬一疋令祝着候、委細猶口上可相達候、恐く謹言、

〔朱カキ〕
〔寛永十五年〕七月廿九日

〔島津忠廣〕

寶壽院

光久◎〔花押〕
〔御判〕

1319

〔北郷久直譜中〕

於鹿兒島海上、琉球船逢難風、從久直達御家老中、可救

之旨 光久公賜御書於久直、有正文左記之、

1320

尚く大風ニ成候ハ、船共うちかへし可申と存候、

緩く被存候而悪敷候間、まつ早奉行衆へ申付候而尤

候と、式部夫より庄内衆へ精入可有候、以上、

鹿兒嶋之海へ琉球之こく船罷居申候、此船之(荷)に今日をろさすに御座候間、此風稠吹申候ハ、に費可申候と存候、早(懸)とくかへをろし被申候而可然存事ニ候、此等起從式部大輔殿老中衆へ被申候而尤候、則調候様ニ可然候、

八月三日

身(花押)

北郷式部太輔殿

さつまのかみ方



北郷式部太輔殿

まゐる

老

1321

「御文庫拾九番箱三拾三卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶以權兵衛方之儀、少知行有之由候条、鹿兒嶋之高

ニ早々御直候而尤候、居屋敷之儀も明合候ハ、被

仰付可被遣候、是又爲御存候、以上、

幸便之間令啓候、

一帖佐之衆中山下權兵衛尉方之儀、松平隱岐守殿守様之局之ためニ、甥にて御座候、權兵衛(親)親之儀、高麗番

船にて相果申候、其弟於關ヶ原致戰死候、如此御奉公共爲申筋目にて候間、當時者帖佐之衆中にて御座候、鹿兒嶋へ被召移候而被下候様ニと、局より御任被申候ニ付、薩州様聞召早々可被召移之由被 仰出候間、可有其御心得候、其段豊州へ被仰断尤候事、

一先年荒地御買せ候衆、今度之御配當之時より返地不被遣候ニ付、度々御任被申候、委細者口上ニ申入候事、

一黃門様御道号之儀ニ付、即宗院之儀被 仰遣候、左様之儀相究次第、御位牌定可申候、即宗院之儀不罷成候ハ、御寺態可有御建立候哉、御寺不定候へハ御位牌

も難究候条、其許御談合之趣急度可被仰上候事、一當年出銀分量之儀、其元如何様ニ御談合候哉、後便ニ可被仰越候事、

一無餘儀御衆、前方之出銀未進被成候ニ付、未進之沙汰難被成之由被仰越候、如何様ニ被成候而可相濟候哉、

一咲止千萬ニ候、ケ様之儀者此方より難計候間、其許之様子御存之上にて候間、折角御談合候而肝要ニ候、尚

様子御存之上にて候間、折角御談合候而肝要ニ候、尚

期後音候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「寛永十五年」
八月三日

伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌判

下野守
久元判（花押）

三原左衛門様

山田民部少様

川上左近將様

彈正大弼様

人々御中

▽
◎
彈正大弼様

川上將監様

参

ノ

下野守

伊勢兵部少輔

久元

花心様御道号之儀

岩切縫殿助殿

□松安 □殿持下

□十月廿二日下着

1322

「雜抄」
引付

高拾四石四升五合

肥後主膳正殿

右者税所少兵衛尉殿を永代買、御使新納加賀守殿より

九月十七日ニ高相直候、然者名寄帳被相改度之由候間、

御談合尤ニ候、以上、

賈八月六日

土持平左衛門尉印
（綱殿）

高崎伊豆守印
（能衆）

御支配奉行中

まいる

1323

「御文庫拾九番箱三拾三卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

口書ニ

川上五兵衛殿、鬼塚源太左衛門殿八月廿九日ニ被
持下候

覚

一有馬にて城へ乗候衆、面ニ書物申付上せ候事、

新納加賀守・市來八左衛門尉其外地頭衆之儀者、先

被致寺家始鹿兒嶋諸外城衆被成御赦免候、但出水衆

之儀者地頭ニかまわず戰場へ被罷出候間、地頭可爲

分別次第事、

一從天草有馬へ罷渡候衆之事、

鹿兒嶋より天草へ可被參之由被仰付候衆之内、天草

より有馬へ氣任ニ被參候衆、又從有馬誰へも無理罷

歸候衆、此段ニ稠可及御沙汰之由、被 仰出候事、

一從天草氣任ニ罷歸候衆之事、

内にて能く被致沙汰置、當年中ニ於御歸國者、於

其許可有 上聞候、若又御歸國於無之者、此方へ早

く様子可被申上事、

一押前未進并算用所へ帳不出衆、折角沙汰仕候間、追而

可申上事、

度く被仰出候様、弥無油断可有沙汰候事、

一出物未進衆、寛永十一・十二・十三・十四年分相究候

沙汰難申御衆御座候、早竟ケ様成御衆を見合被申候哉、
相究重而様子可申上事、

歴之御人數出銀御未進ニ付、^〇而 諸士見合申候而、

未進之沙汰難被成之由 上聞候ニ付而、始御兄弟衆

左様成衆へ御意候旨、書中ニ委申達候事、

一諸藏改候而、帳此方へ召置候事、

委細承候、題目之儀候間、帳不失様ニ可被召置候事、

一當年耕作今分者能候、何方之御藏入荒地無之仕付申候、

大風吹不申候と可存候、豊年と下々申候事、

一段目出度候、風吹申候ハぬやうニ候へかしと存候、

一御乗物廻五人徒居候間、花心様御玉屋之普請申付候、

其子細者士衆も前々者普請仕候条申付候処ニ、曾而不

罷出氣任申候故、直付申付候而、身代可差上由申渡候、

然処ニ六月十九日ニ國分民部少殿方新納勘解由殿を以

被申出候、薩州様御上洛前ニ被成 御意候ハ、江戸

へ被召上、隠岐殿などへ女房衆被參候時分、のりもの

まハシニ可成由、爲被成 御意由被申候故、如其ニ而

召置候事、

御のりものかき之儀 上聞候處ニ、曲事深重ニ思召候、さりながら被爲賣候へハ、黄門様爲被召置者を御一周忌も不過内ニ如何候間、稠奉行を被申付、薪などをもとらせられ、其身迷惑仕候様ニ可被申◎付、由被仰出候事、

一 闕断もの、内ニ十二三之童御座候、御草履取ニ可然由國分民部少殿・弟子丸治左衛門殿被申候、乍去科人之子を御草履取ニ可被召仕儀、如何可有之哉と出合、其段右兩人へ申理、御客屋へ召置申候、何程ニ御座候而可然候哉、重而御返事可承事、但加治木彦右衛門◎尉、子ニ而候、押前にて闕所被仰付、彦右衛門◎尉、ハ寺領仕候、此者ハ科人を被召出、御そばちかくめしつかハれ候へハ、御曖之難ニ可罷成候間、先く彼者共ハ別方へ可被召遣候事、

一 五代勝左衛門殿長く罕人にて、此節飢ニ望候間、御物米借用申度由、達而被申候へ共、御物借用御法度之前

ニて候条、如何可有御座候哉、御尋申候事、

米を被給候ハてハ勘忍罷成ましく候、前々御勘氣之衆被召出候而後、米共被給たる衆も多々有之候間、應其分限被遣尤候事、

一加治木町之錢作候者共、去年以來上方方々へ罷出候、其帳相究差上申候、御國へ錢作無御赦免候処ニ、御國之者共他方へ参、自然悪錢など作候者、御國之難題ニ可罷成欵と出合申候間、被召歸候而可然存候事、

此者共方々不参揃内ハ、御沙汰有ましく候、何も参揃候而方可及御沙汰之由被 仰出候間、重而可有御申事、

以上

「朱カキ」
「寛永十五年」
寅八月八日

『写兒玉氏藏』

1324

覺

寛永八年十二月廿五日

鳥目式拾貫文

右者 芝御袋様妹子祝儀ニ付、爲御合力被給候処ニ、

俄之儀候間、御納戸藏方申請相渡候、其以後右之通

帳面ニ書達し可給由、御荷物衆迄可申入を致失念申

後、于今我等之借用爲申様ニて迷惑仕候、少も無別

儀候、池上藤左衛門殿使仕、爲被存事候間、可相究

刻此等之趣被仰分可給候、

〔寛永十五年〕

寅八月廿二日

児玉筑後守

〔時納殿役也〕

平田主殿助殿

参

二男 男子老人有之

鳴津又八郎

高三萬斛

三男 女子老人有之

北郷式部太輔

高壹萬六千斛

四番目

鳴津玄番頭

右三人者薩摩守弟

三「本ノマ、」

高壹萬五千斛

家老薩广守妹智

鳴津彈正

1325

〔光久公御譜中〕

諸候各以或子弟或親戚或家老之子爲質、令之處江府之邸

館、之曰證人、自家久至光久獻證人代置于江戸第、受令

於證人奉行也、

高壹萬五千斛

同大隅守妹智男子二人女子有之

鳴津下野守

1326

松平薩摩守弟并家老共

高貳萬五千斛

高八千斛

同男子一人女子一人有之

川上將監

五千斛「本ノマ、」
高三千九百十七斛七斗五升

同男子三人女子有之

山田民部少輔

五千斛「本ノマ、」
高四千三斛貳升五合

同男子三人女子有之

三原左衛門佐

六千斛「本ノマ、」
高四千四百七拾斛五升

同薩戸守弟致養子女子有之

鎌田出雲守

高老萬斛

同薩戸守致養子

伊勢兵部少輔

右七人者國中之諸沙汰承候

「本マ、」
已上

高老萬斛

薩戸守妹智女子一人有之

種子嶋左近太輔

寛永十五年八月九日、從松平大隅守殿被召寄、又御尋候間、罷歸右之人數子共達之書付、又知行之高書付候而令進獻候、○御家老衆之儀山民少輔・三左衛門・鎌雲・三原左衛門佐・鎌田出雲守儀者、當年家老職有之儀、候間、本高之内上地引除役分之地二千石相加、其上ニ何も同前ニ少充高進上候、出雲守者、從兩人高多候間、応是從兩人者高多付申候也、
右ハ甲斐右京亮ニ而八月十一日ニ大隅守殿へ御遣候、

1327

「御文庫三番箱六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

先 公方普光院殿御時、當家忠節之子細依有之、琉球之儀從拜領以降、雖被屬幕下、且遠方且世上紛冗故、使者

「光久公御譜中ニ在リ」

今度從 公方様家督之儀被仰付、薩隅日不相易前代令安

等之往還稀御座候由、令承知候、然而半義絶之様成行、

種々其理雖有之、從其許無承引之間、當 公方様之御元

祖 家康公江伺 上意、指渡人衆于戈之催雖有之、依被

乞降無異儀令和睦、國司如日本在渡楫之間、此上者琉球

之儀此方心次第可被相行之處、中納言殿對國司御懇切不

淺之故、如其地國司被送届、如本々被立置之儀、至于下

々迄不可忘却者乎、我等儀自今以後家督職可相勤候之間、

此中中納言殿如御沙汰可申付候条、可有其心得候、猶委

細者可相達使者口狀候、恐惶謹言、

寛永十五 戌年

八月廿五日

薩摩守光久

謹上 中山王

肥後長左衛門尉
御使 田中善兵衛尉

於江戸調進

「御文庫拾九番箱三拾三卷中」「光久公御譜中ニ有之」

覺

堵候、別而 上意忝儀不大形候、此等之祝詞以使者申候、

仍御太刀一腰・馬一疋黄金拾兩・肴三種・樽十荷・宇治茶一

壺令進覽候、聊表祝儀計候、恐惶不宣、

八月廿五日

薩摩守光久

謹上 中山王

一御家中到侍下輩ニ、罪人共或遠嶋或籠會者或寺中爲仕

衆過分ニ御座候、今度被任 殿下之御下知、皆々被召

直尤ニ奉存由致言上候處ニ、罪人之儀者輕重之沙汰可

有之候へとも、殿下之以御下知被召直候へハ、向後御

國之御愛之障關字ニも罷成間敷候、御代替ニ幸ニ思召候間、

不及輕重之沙汰由被仰出候、誠目出度候事、

右殿下之以御下知、諸國之罪人野心新儀之外者可被

召直由候、御家中之罪人共可被召直哉と被成言上候

処、殿下御下知ニ而候間、向後御國之御愛之障にも

罷成間敷候、御代替ニ幸ニ思召候間、不及輕重御沙汰ニ可被召直出由被仰出候哉、誠目出度儀共候、流罪衆・寺領衆召出可申候、乍去其内輕重有之候間、以別紙得御意候事、

一殿下より被仰出ニも、野心新儀をさへ於不企者、如何様之罪人たり共可被召直之由候、就其細く及御沙汰候處○、顯娃主水・平田太郎左衛門之儀者野心之心持候ニ付、彼子共者被召直間敷候、比志嶋宮内少子共白濱七介子之儀可被召直由候、左様候て親類中へ被成御預、他國へ不參様ニと御意候事、

右平田太郎左衛門・顯娃主水子共者被召直間敷候、比志嶋宮内少・白濱七介子共ハ被召出、親類中へ被成預他國へ不參様ニと御意候通、具奉得其意候、親類中ニも比志嶋監物殿不遁間之儀候へ共、當時在江戸にて候間、吉利総州・鎌田雲州・紀州後室へ申渡可被爲預由被仰候者、急度從嶋召歸可申事、

一南蛮宗共少く御國へ罷居候、ケ様之者ハ御成敗候ハて

ハと、其許より被申上候ニ付、弥無油断被申付候様ニと被仰遣候、委儀ハ御前不被成御存候由候事、

右南蛮宗之書立、新納二右衛門・有馬左近上洛之刻差上申候、御成敗などの儀者御下向之刻静ニ伺御意可申付候、先書ニ如申、山伏之姿にて候、山之口を通候者口柄不審ニ候つる故、搦捕被遣候、於爰許度く口を聞せ申候處ニ、生國肥前之者名者市作と申候、今度有馬籠城之刻者、有郷主税と申人ニ致奉公籠城仕候、年内致欠落、鍋嶋殿陳ニ走入、知人多候つる故、色くやつれ居、從其御國へ參、出水之米之津・長嶋・袋・阿久根などへ參、其後岸良へ隱居候て、如日向出候を被捕得候由申候間、出水・岸良之宿主之名を相尋候へハ、左様成者不居由申候、今迄者口柄變くニ候て難究候、慥承究候ハ、從敵城爲參者之儀候間、長嶋へも遣可申哉と談合申候、御國へも三人列にて落來候、二人者于今岸良へ罷居由申候間、海江田十兵衛殿召寄改之儀談合申候、

一琉球へ日本より居付候衆之儀、此中罷居候者共之儀者、先く其まゝにて被召置、向後日本より居付候衆無之様ニ、堅可被仰付之由御意候間、琉球へ其段能く可被仰達事、

右琉球へ日本人前々居付候衆者、其まゝニ被召置、向後從日本居付之衆無之様、堅可申渡由、幸三司官兩人爰許へ被居候間、堅可申渡候、

一上井采女正殿知行悪地ニ付、過分ニ被上置候、此返地可被遣事、

右沙汰仕へく候、

一久富士佐跡之儀、同名弥左衛門入道申上由候、於其許能く被成御沙汰、無余儀候ハ、可被仰付事、

右沙汰仕へく候、

一荒地買衆返地之儀度く被申候へ共、一途不相濟候、今度爰許ニ被罷居候衆も、達而被申候、最前從公儀御買せ候て、近年之御支配已後代銀も不被遣、又荒地をも不被遣候へハ、わやくを被成候ニ相あたり候間、急

度御沙汰尤候ハ、左様ニ候ハ、最前之御書出ニ、幾度も荒地にて返地可被遣由有之首尾候条、荒地にて御すまし候儀憲法ニ候、然時者御藏入之内ニも高ニ迎たる地有之儀ニ候、又諸士之門之内ニも高ニ迎、當時役不被仕地有之儀ニ候、ケ様成地者うつもれ候て、御用ニ不立候間、かくのこときの地共にて、返地被遣尤ニ候、當時役儀者不仕候而、本之門之内にて候など、被申、上之御爲ニ不成儀を被申衆者、道理ニ不叶申候、とかく返地被遣候欵、代銀を被遣候欵、兩条ニ一方可被事濟事、

右前々荒地申請候衆之返地、又々荒地帳之上にて可致支配由、新納勘解由殿・仁礼主計助殿配當奉行にて候間、申渡追付御支配ニ取付可申候、

上村孫六郎殿被持上候、

「朱カリ」
寛永十五年九月十一日
「御譜」八二日也

三原左衛門佐

山田民部少輔

鎌田出雲守

川上左近將監

嶋津彈正大弼殿

伊兵少様

野州様

1332

「鎌田政昭日記」 「光久公御譜中ニ在リ」

掟

1330 「光久公御譜中」
芳墨之趣令披閱早、仍爲當家連續之祝儀使者殊御太刀一

腰・馬一疋且復芳物如被録別書送預之、欣然之至、猶小

谷按司可相達口狀之間、不能詳候、恐惶不宣、

「朱力キ」九月廿一日 薩摩守光久〔御判〕

謹上 中山王

1331 「光久公御譜中」

歸國以後者到來無之候、爲足爰許へ歸候而、從京都明石迄之儀者氣色も能候つる由申來候、船中無相替儀下着候哉、無心元候、在所へ於歸着者旅宿ニ相替、諸事可心安

候之間、次第可爲快氣と存候、猶期後音候、恐く謹言、

「朱力キ」九月廿三日

光久〔御判〕

一在と所とにおひて、きりしたん宗〔門〕之〔ものすこし〕

も不隠居様ニ可入念事、

一從〔公儀之仰出〕〔ニ〕、はてれんを尋出爲申出もの〔ニ〕

者、銀子貳百枚可被下由候事、

一いるまんを尋出たらん〔者〕ハ、銀子百枚可被下由

候事、

一きりしたん宗躰之もの尋出たらん〔者〕ハ、銀子五拾

枚又〔ハ〕三拾枚、其様子ニより可被下之由〔候〕事、

一右之ものとも尋出候もの〔は〕、同宗躰ニ〔而〕有之〔と

も〕、ころひ申〔ニ〕お〔い〕て〔者〕、其料をゆるさせら

れ、御褒美と〔して〕〔如御書出〕、銀子可被下之由候事、

右之趣を以入精尋出たらんもの〔は〕、先公儀〔江〕之忠

節と申、其上過分之銀子を被下、其身之爲ニも成儀〔ニ〕

候間、可入精儀可爲肝要候、若又きりしたん宗躰○之者の○在の○有之を、其所○よりよりハ不尋出、他所○よりより尋出候ハ、其所之物主ニいたり、深々敷可及御沙汰候間、得其心不可致油断者也、

如此諸所へ制札可被相立候、以上、

寛永十五年○寅十月十○九五日 左衛門佐

十月十三日ニ江戸へ相下
「御譜ニアリ」

出雲守

民部少輔

兵部少輔

左近將監

「光久公御譜中ニアレトモ、十月十五日付御家老ノ連名ナシ」

1333

「雜抄」

高三拾石者

新納十郎殿

右者大口江被召移ニ付、爲新地被給候間、菱刈表江相應之知行可有支配候、彼人之事、先祖已來分限ニテ地頭職をも被勤候処ニ、近年身上被落入堪忍難成故、如此候、

餘人の移加増とは可爲各別者也、

寛永十五十月十六日

左衛門佐

出雲守

民部少輔

左近將

仁禮主計助殿

新納勘解由次官殿

まいる

1334

「兄玉氏藏」

其以來無首非本意候、御息「利實」四郎兵衛殿、貴殿煩ニ付歸國「白江」有度由訴訟ニ付而、兵少老御披露被成、無矣儀御暇被爲「伊勢」給候、少も此地へ無念遣養生尤候、我等儀も俄ニ罷上、

逗留之程も最前迷惑仕候、併依跡替等も可有之条、罷下

萬事可申承候、恐々謹言、

「寛永十五年」

十一月五日

「島津」
下野守

久元（花押）

「兄玉筑後別号」
繁秋老

足下

1335

「御文庫拾九番箱三拾三卷中」 「光久公御譜中ニ在リ」

〔尚〕[◎]彈正大弼殿者此儀委無御存儀も可有之候、

黃門様御遠行之時分被仰置候而如此御座候、以上、

追而申候、 黃門様御位牌之被遊様、於上方御沙汰之上

ニ而、公家方之御衆之被遊様候ハ人間、以其趣相定候様

ニと被仰置候間、於京都恕西堂へ被仰、公家方之被遊様

被見究如此候、又五人之衆御位牌之左右へ可被書次第之

儀、先日被仰越候、薩州様へ得御意下書仕進候間、於

其許御位牌被爲書尤御座候、此寺之儀者未相究候間、先

福昌寺殿と被遊候、永々此分ニ而も候ハん哉、其許各被

成御談合、追而可被仰上候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔寛永十五年〕

十一月廿一日

伊勢兵部少輔[◎]〔花押〕
貞昌〔判〕

下野守

久元〔判〕[◎]〔花押〕

三原左衛門様

鎌田出雲様

山田民部少様

川上將監様

彈正大弼様

人々御中

彈正大弼様

川上將監様

參

久元

下野守

伊勢兵部少輔

〔十一月廿一日狀十二月廿四日ニ別府千左衛門被持下候、花心様御位牌之事、〕

1336

「光久公御譜中」

猶々委細之段、留守居之者可申述候、以上、

一書令啓候、仍而御繼目之御札相濟申候由承、大慶奉存

候、此等之御祝可申入と存、用飛札候之處ニ、中途ニて

遅々仕、于今延引ニ罷成、有本意存候、餘遅申之条、薩

摩守殿へハ以書狀不申上候、御手前方以御次而可然様御

取成頼存候、明春可致參勲候間、其節懸御目可申述候、

次ハ肥州天草在番被^{〇(嗣子)}仰付罷越候、往還共ニ御馳走忝奉

存候、ケ様成御礼旁延引罷成、令迷^{「惑カ」}候、中々書中ニ不

得申候、猶期來慶之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」
霜月廿三日

伊東大和守^{〇(花押)}
祐久^{「判」}

伊勢兵部少様

人々御中

1337 「御文庫拾九番箱三拾三卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申候、仍 黄門様御遺物ニも罷成欵与御座候而、

北郷式部殿高木貞宗之脇指下野守持上候、御遺物ニ者

入不申候間、被 召上度由被 仰出、從下野守三原次郎

左殿迄^{〇(ナシ)}申理候へハ、可有御進上之由候、代金四拾枚ニ

本阿彌光伯直付にて候、爲其代金可相渡之由、以伊地知

周防守被 仰出候間、可有御渡候、次郎左殿へも右之通

下野守申遺候条、定而可被申出候、猶期後音候、恐惶謹

言、

「朱カキ」
「寛永十五年」

十二月廿四日

伊勢兵部少輔^{〇(花押)}
貞昌^{「判」}

下野守

久元^{〇(花押)}^{「判」}

彈正大弼様

河上左近將様

山田民部少様

鎌田出雲様

三原左衛門様

人々御中

彈正大弼様

河上左近將様

参

久元

下野守

伊勢兵部少輔



西原孫右衛門被持下候、江戸去十二月廿五日ニ立、正月廿六日ニ下
着、式部様高木貞宗代金大判四十枚可被遣事、

『伊地知季安藏』

1338

追而申候、貴老筋氣ニ而、今程無御指出之由候得共、如
此致充書候間、御前江聞召達候様ニ、誰そ候ても御申
上頼申候、期後音候、恐々謹言、

『寛永十五年』

極月廿七日

伊勢兵部少

貞昌(花押)

兒玉筑後守殿

御宿所

1339

覚

主從五人	町田甲斐守殿	主從三人	德持市兵衛殿
鉄炮五人		鉄炮壹丁	
主從貳人	市成彌右衛門殿	主從一人	前田大學介殿
鉄炮壹丁		鉄炮壹丁	
主從貳人	中滿清太左衛門殿	主從二人	楠元新二郎殿
鉄炮壹丁		鉄炮壹丁	
主從六人	有馬清左衛門殿	主從四人	鎌田新左衛門殿
鉄炮具足		鉄炮壹丁	

主從三人
鉄鉄炮
松下番左衛門殿

鉄鉄炮壹丁
自身
佐土原狩之介殿

主從三人
鉄鉄炮
岩切與兵衛殿

具足鉄炮
主從四人
南雲新二郎殿

主從三人
鉄鉄炮
川野郷左衛門殿

主從二人
鉄鉄炮
肥後孫左衛門殿

主從三人
鉄鉄炮
市成喜右衛門殿

主從二人
鐵
三宅七兵衛殿

鉄
外山喜兵衛殿

自身
鐵
加世田藤七殿

主從二人
鉄鉄炮壹丁
東郷新介殿

主從貳人
鐵
窪田清三郎殿

鉄鉄炮
主從二人
帖佐平左衛門殿

主從五人
鉄鉄炮壹丁
鐵
吉田次郎右衛門殿

主從三人
弓壹丁
東郷五郎兵衛殿

主從二人
鐵
津曲七兵衛殿

主從三人
やく一人
酒匂休左衛門殿

主從七人
鉄鉄炮壹丁
鐵
服部左近右衛門殿

主從二人
鐵
平田利右衛門殿

鉄鉄炮一ツ
主從二人
野村半五左衛門殿

主從二人
鉄鉄炮一丁
中馬千右衛門殿

主從二人
鐵
澤與介殿

主從三人
鉄鉄炮壹丁
家村三十郎殿

主從七人
鉄鉄炮一丁
鐵
堅山郷兵衛殿

主從六人
鉄鉄炮
伊地知和泉守殿

鐵
鐵
奥原案之丞殿

鐵炮 自身	益山仲右衛門殿	主從二人 鐵炮	宮里小兵衛殿	主從三人 鐵炮本	存堯坊	主從二人 鐵炮	山崎正兵衛殿
主從一人 鐵炮	齋藤信右衛門殿	主從二人 鐵炮	矢野助吉殿	主從三人 鐵炮	肥後彦次郎殿	主從二人 鐵炮本	伊集院平左衛門殿
主從五人 鐵炮一ツ 鐵炮本	益山源五郎殿	主從二人 鐵炮	丸山金右衛門殿	主從二人 鐵炮	吉田主馬丞殿	主從三人 鐵炮	石塚七左衛門殿
主從二人 鐵炮	久木田太郎介殿	主從三人 鐵炮本	宮原次郎兵衛殿	主從四人 鐵炮一丁	永崎六郎三郎殿	主從四人 鐵炮	大迫八郎兵衛殿
やり	半田朱左衛門殿	自身	大存坊	鐵炮本	鐵炮二丁	鐵炮	「本のまゝ」 是枝權兵衛殿
鐵炮	竹井助十郎殿	主從二人 鐵炮	柳彦左衛門殿	鐵炮一丁	安樂伊与守殿	主從三人	有馬主膳正殿
主從二人 鐵炮	伊地知金右衛門殿	主從二人 鐵炮	森德之丞殿	主從六人 鐵炮本	勝目八右衛門殿	自身	
主從三人 鐵炮	堀切治部左衛門殿	主從二人 鐵炮	小川千介殿	自身	松元織部介殿	自身	堯學坊
鐵炮	宇多讚岐守殿	主從二人 鐵炮	岡元吉兵衛殿	主從二人 鐵炮	益滿民部左衛門殿	主從三人 鐵炮本	本田主馬丞殿
主從三人 鐵炮	牧之瀬六左衛門殿	主從二人 鐵炮	新橋傳右衛門殿	鐵炮本	木佐貫吉左衛門殿	自身	堀切与右衛門殿
主從三人 鐵炮	加治木善兵衛殿	主從三人 鐵炮	家村源右衛門殿	鐵炮本	梅北藤兵衛殿	自身	本林坊
持道具 鐵炮	松田十左衛門殿	主從四人 やり	山内對馬介殿	鐵炮	蓮香与三左衛門殿	自身	西郷志厂丞殿
主從二人 鐵炮	菊野大藏殿	主從三人 持道具鐵炮	李田清兵衛殿	鐵炮	瀧脇西市丞殿	鐵炮	

合八拾五人

内拾八人自身衆

合百卅四人 被官迄

右寛永十五年、肥前島原一揆之節、國分方御手當之人
數書留写

1340

『加世田士愛徳氏藏』

一与

高七十七石

愛徳善左衛門尉殿

高四石

佐伯十郎左衛門尉殿

高八十七石

大坊

高九石五斗三合

池田助五郎

高三十六石

市來半介殿

高壹石四斗

赤瀬川主水佐殿

高三拾九石五斗

田実主税助殿

高貳石壹斗

和泉喜兵衛尉殿

高廿九石五斗

大迫彌八左衛門尉殿

高七石八斗

猪鹿倉勘十郎殿

高廿七石九斗二升八合四夕

愛徳新介殿

高貳石

春成利介殿

高廿三石六斗

加納五郎左衛門尉殿

高八斗六升式合五夕

高田傳兵衛尉殿

高拾九石六斗

松山善介殿

高貳石者

酒瀬川乘左衛門尉殿

高十二石八斗九升七合

深町新介殿

高貳石者

仁禮右京亮殿

高十一石五升五合

高田基右衛門尉殿

高拾六石

吉峯治部左衛門尉殿

高十石

前田久左衛門尉殿

高廿四石九斗六升

小河大監物殿

高七石壹斗

指宿城介殿

高九石九斗五升貳合

高田九右衛門尉殿

高壹石六斗

吉田權右衛門尉殿

高六石壹斗

川越助右衛門尉殿

高九石八斗七升九合	菊野主馬首殿	吉富平兵衛尉殿
高拾貳石	橋口孫二郎殿	丸野五兵衛尉殿
高九石三斗三合	尾辻作左衛門尉殿	大圓坊
高壹石五斗	大迫勝左衛門尉殿	森田喜左衛門尉殿
高九石貳斗内二石緣分	若松權左衛門尉殿	宇多総朝
高三石	橋口孫八左衛門尉殿	宇都喜左衛門尉殿
	井上右近兵衛殿	中嶋茂右衛門尉殿
高六石壹斗	高崎宗兵衛尉殿	宇多主水左衛門尉殿
高九石八斗内二石行司分	萩原清兵衛尉殿	木場次郎右衛門尉殿
高五石八斗	鯨坂長右衛門尉殿	吉峯仲介殿
高五石貳斗	本田忠兵衛尉殿	田中主計助殿
高貳石者	上野久兵衛尉殿	岩崎弥右衛門尉殿
高壹石九斗	西牟田助左衛門尉殿	岩下七郎兵衛尉殿
高壹石九斗	平峯次郎五郎殿	大川大炊兵衛尉殿
高貳斗	篠原次左衛門尉殿	玉利七兵衛尉殿
高壹石者	椎原權左衛門尉殿	久留源六殿
	山口爲右衛門尉殿	迫田惣左衛門尉殿
		高四石六斗
		高壹石壹斗
		高五石七斗七升九合二夕
		高四石者
		高六石
		高六石七斗
		高貳石九斗
		高九斗
		高八石四斗九升
		高拾石七斗
		高六石四斗

高四石五斗

山本清兵衛尉殿

同六石八斗

貴嶋才助殿

高廿七石

今泉寺

同四石五斗

丸野源左衛門殿

高七斗

道場

同五石九斗三升七合五夕

西郷源兵衛殿

二ノ宮彌吉殿

同貳石九斗八升一合

土持左京亮殿

山中市兵衛殿

同三石八斗

加藤對馬介殿

酒瀨川甚介殿

同貳石役分

黑江吉兵衛殿

橋口内藏介殿

高貳石貳斗

深木六藏殿

伊駒六兵衛尉殿

高十四石五斗

尾辻弓兵衛殿

志广助市殿

同貳石役分

加藤監介殿

辰ノ十二月廿三日之宛

同五石貳斗

上井舍人助殿

惣合六百四十一石一斗九合一夕

同五石

合高百六拾六石六斗三升七合五夕

寛永十五年

同十一石八斗

相良四郎兵衛与

十一月十九日

高三十石

指宿將監殿

惣合八百七十七斗四升六合六夕

同廿八石貳斗一升九合

松田藏人殿

正月十二日

同十九石貳斗

桑畑少兵衛殿

同廿貳石五斗

窪田壹岐介殿

相良四郎兵衛与

文
書
目
錄

例 言

- 一 この目録は、本巻に収められた文書・記録・記事の全部を、底本の配列に従い、通し番号を付して収録したものである。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書題を記載し、記録・記事は、年月日の欄に（記録又は記事）と記し、題を付した。
- 一 底本にある補筆の年紀には「」を付し、編者の註には（ ）を付した。
- 一 年紀を欠くもののうち、推定しうるものは「」で囲んだ。
- 一 月の異称は数字に改めたが正月、朔日、晦日などはそのまま残した。

番号 年 月 日 文 書 題

番号 年 月 日 文 書 題

卷七十八

- | | | | |
|----|---------|---------|------------|
| 一 | 〔寛永 三年〕 | 閏四月 廿二日 | 土井利勝書狀 |
| 二 | 〔寛永 三年〕 | 五月 朔日 | 島津家久書狀 |
| 三 | 〔寛永 三年〕 | 五月 三日 | 徳川秀忠御内書 |
| 四 | 〔寛永 三年〕 | 五月 四日 | 徳川家光御内書 |
| 五 | 〔寛永 三年〕 | 五月 七日 | 酒井忠世書狀 |
| 六 | 〔寛永 三年〕 | 五月 廿六日 | 島津家久書狀 |
| 七 | 〔寛永 三年〕 | 六月 三日 | 島津家久書狀 |
| 八 | 〔寛永 三年〕 | 六月 五日 | 島津家久書狀 |
| 九 | 〔寛永 三年〕 | 六月 二日 | 島津家久書狀 |
| 一〇 | 〔寛永 三年〕 | 六月 二日 | 島津家久書狀 |
| 一一 | 〔寛永 三年〕 | 六月 十四日 | 島津家久書狀 |
| 一二 | 〔寛永 三年〕 | 六月 廿二日 | 良恕親王書狀 |
| 一三 | 〔寛永 三年〕 | 六月 廿四日 | 細川忠利書狀 |
| 一四 | 〔寛永 三年〕 | 七月 四日 | 島津家久書狀 |
| 一五 | 〔寛永 三年〕 | 七月 八日 | 某覚書 |
| 一六 | 〔寛永 三年〕 | 七月 廿九日 | 島津家久袖判条書 |
| 一七 | 〔寛永 三年〕 | 八月 十九日 | 蔵人藤原時長奉口宣案 |
| 一八 | 〔寛永 三年〕 | 閏四月 四日 | 寺沢広高書狀 |
| 一九 | 〔寛永 三年〕 | 閏四月 十四日 | 徳川秀忠御内書 |
| 二〇 | 〔寛永 三年〕 | 閏四月 十四日 | 徳川秀忠御内書 |

- 四二 寛永 三年 八月十九日 藏人藤原時長奉口宣案
- 四三 「寛永 三年」 八月廿二日 島津家久書状案
- 四四 「寛永 三年」 八月廿三日 島津家久書状
- 四五 (記事) 島津家久譜
- 四六 「寛永 三年」 後水尾天皇女房奉書
- 四七 「寛永 三年」 八月廿八日 牧野正成書状
- 四八 島津家久伝
- 四九 「寛永 三年」 九月 二日 四辻季継書状
- 五〇 (記事) 島津家久譜
- 五一 「寛永 三年」 九月 八日 島津家久書状
- 五二 「寛永 三年」 九月 九日 島津家久書状
- 五三 (記事) 島津忠興譜
- 五四 詠竹契遐年和歌
- 五五 (記事) 島津家久譜
- 五六 「寛永 三年」 九月廿八日 島津家久書状
- 五七 「寛永 三年」 九月 島津家久書状
- 五八 「寛永 三年」 十月 三日 島津忠元光書状
- 五九 「寛永 三年」 十月 十日 酒井忠世・土井利勝連署書状
- 六〇 寛永 三年丙寅十月十一日 島津久元・喜入忠統連署書状
- 六一 「寛永 三年」 十月十三日 土井利勝外三名連署書状
- 六二 「寛永 三年」 十月十七日 藤崎某書状
- 六三 「寛永 三年」 十月廿四日 島津忠興書状
- 六四 (記事) 島津家久譜

- 六五 「寛永 三年」十一月 六日 島津家久書状
- 六六 「寛永 三年」十一月十八日 岩切信允書状
- 六七 「寛永 三年」十一月廿三日 新納忠清・本田親吉連署書状
- 六八 (記事) 島津家久譜
- 六九 「寛永 三年」十二月 五日 土井利勝外二名連署書状
- 七〇 寛永 三 十二月 五日 土井利勝外二名連署書状
- 七一 十二月廿二日 德川秀忠御内書
- 七二 「寛永 三年」十二月廿二日 德川秀忠御内書
- 七三 「寛永 三年」十二月廿六日 德川秀忠御内書
- 七四 十二月廿七日 德川家光御内書
- 卷七十九
- 七五 (記事) 島津家久譜
- 七六 「寛永 四年」正月 十日 德川秀忠御内書
- 七七 「寛永 四年」正月十一日 中山王尚豊書状
- 七八 (記事) 島津家久譜
- 七九 「寛永 四年」正月十一日 中山王尚豊書状
- 八〇 寛永 四年 正月十八日 押川某・坂元某連署差出
- 八一 寛永 四年 正月廿五日 三原重庸書下
- 八二 「寛永 四年」二月十二日 酒井忠勝書状
- 八三 (記事) 島津家久譜
- 八四 「寛永 四年」二月廿一日 島津家久書状
- 八五 寛永 四年 二月廿三日 沢永澄覚書
- 八六 「寛永 四年」二月廿四日 伊勢貞昌書状

- 八七 三月廿五日 德川秀忠御内書
 八八 (記事) 島津家久譜
 八九 島津家久追悼和歌
 九〇 德川家光御内書
 九一 四月 五日
 「寛永 四年」 樺山久高書状
 九二 四月十三日
 「寛永 四年」 島津久元外二名連署達書
 九三 四月 廿日
 「寛永 四年」 喜入忠統・伊勢貞昌連署書状
 九四 四月廿四日
 「寛永 五年」 新納忠清書状
 九五 四月廿四日
 「寛永 四年」 德川秀忠御内書
 九六 五月 二日
 「寛永 四年」 德川家光御内書
 九七 五月 四日
 「寛永 四年」 島津家久書状
 九八 五月
 「寛永 四年」 島津家久譜
 九九 (記事) 島津家久書状
 一〇〇 五月十八日
 「寛永 四年」 島津家久書状
 一〇一 (記事) 島津光久譜
 一〇二 (記事) 島津忠朝譜
 一〇三 (記事) 北郷翁久譜
 一〇四 (記事) 酒井忠世書状
 「寛永 四年」 六月廿四日
 一〇五 (記事) 伊勢貞昌書状
 「寛永 四年」 六月廿七日
 一〇六 (記事) 兄玉利昌譜
 「寛永 四年」 七月十二日
 一〇七 (記事) 島津忠心譜
 「寛永 四年」 七月廿一日
 一〇八 (記事) 德川秀忠御内書
 「寛永 四年」 七月廿七日
 一〇九 (記事) 土井利勝書状
 「寛永 四年」 喜入忠統・比志島国隆連署書状案
- 一一〇 「寛永 四年」 八月 六日 伊勢貞昌書状
 一一一 「寛永 四年」 八月 七日 島津家久書状
 一一二 「寛永 四年」 八月廿七日 樺山久高書状
 一一三 (記事) 島津家久譜
 一一四 「寛永 四年」 八月廿九日 酒井忠世書状
 一一五 「寛永 四年」 九月 八日 德川秀忠御内書
 一一六 「寛永 四年」 九月 八日 德川家光御内書
 一一七 「寛永 四年」 九月 十九日 島津家久書状
 一一八 「寛永 四年」 九月十九日 島津家久書状
 一一九 「寛永 四年」 十月
 「寛永 四年」 十月 島津家久書状
 一二〇 (記事) 兄玉利昌譜
 一二一 (記事) 島津家久譜
 一二二 「寛永 四年」 十月廿五日 島津家久詠草
 一二三 「寛永 四年」 十月廿五日 飯野狗留孫山権現棟札
 一二四 (記事) 島津久通譜
 一二五 「寛永 四年」 十一月廿八日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 一二六 「寛永 四年」 十二月十六日 島津家久書状
 一二七 「寛永 四年」 十二月廿四日 島津家久書状
 一二八 「寛永 四年」 十二月廿五日 德川秀忠御内書
 一二九 「寛永 四年」 十二月廿七日 某覚書
 一三〇 (記事) 島津家久譜
 一三一 「寛永 四年」 十二月廿七日 島津家久袖加判条書
 一三二 「寛永 四年」 十二月廿八日 德川秀忠御内書

- 一三三 「寛永 四年」十二月廿八日 徳川家光御内書
 一三四 (記事) 北郷久加譜
 一三五 (記事) 島津家久譜
 一三六 「寛永 五年」正月 二日 島津家久書状
 一三七 「寛永 五年」正月 八日 島津家久書状
 一三八 「寛永 五年」正月 九日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 一三九 「寛永 五年」正月廿五日 島津家久書状
 一四〇 寛永 五年 二月廿七日 某条書
 一四一 (記事) 佐多久孝譜
 一四二 正月廿八日 島津光久書状
 一四三 「寛永 五年」二月 晦日 島津家久書状
 一四四 某条書
 一四五 「寛永 五年」三月 朔日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 一四六 寛永 五年 三月 七日 喜入忠統達書
 一四七 寛永 五年 三月十二日 某覚書
 一四八 (記事) 島津家久譜
 一四九 「寛永 五年」四月 三日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 一五〇 (記事) 島津家久譜
 一五一 寛永 五年 四月 八日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 一五二 寛永 五年 四月十二日 某覚書
 一五三 (記事) 島津家久譜
 一五四 寛永 五年 四月十二日 島津家久条書
 一五五 「寛永 五年」四月十六日 某覚書
- 一五六 寛永 五年 四月十七日 島津久元・伊勢貞昌連署条書
 一五七 五月 四日 徳川秀忠御内書
 一五八 五月 四日 徳川家光御内書
 一五九 「寛永 五年」五月 六日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 一六〇 「寛永 五年」五月十五日 島津家久書状
 一六一 「寛永 五年」六月十二日 島津家久書状
 一六二 「寛永 五年」六月廿八日 島津家久書状
 一六三 (記事) 島津家久譜
 一六四 寛永 五年 六月廿三日 某条書
 一六五 六月廿九日 天野長信書状
 一六六 「寛永 五年」七月十六日 島津家久書状
 一六七 「寛永 五年」七月十九日 島津家久書状
 一六八 「寛永 五年」七月十九日 島津家久書状
 一六九 「寛永 五年」七月十九日 島津家久書状
 一七〇 「寛永 五年」七月 廿日 島津家久書状
 一七一 寛永 五年 八月 十日 島津久元外二名連署条書
 一七二 「寛永 五年」八月十七日 島津家久書状
 一七三 「寛永 五年」四月廿四日 新納澄清書状
 一七四 八月 卅日 北郷三久書状
 一七五 「寛永 五年」八月廿一日 島津家久書状
 一七六 (記事) 島津家久譜
 一七七 「寛永 五年」九月 七日 徳川家光御内書
 一七八 (記事) 島津久元譜

- 一七九 寛永 五年 九月 十日 喜入忠統条書
- 一八〇 「寛永 五年」 九月廿五日 島津家久書状
- 一八一 (記事) 島津家久譜
- 一八二 「寛永 五年」 十月 二日 良恕法親王書状
- 一八三 「寛永 五年」 十月 三日 飛鳥井雅宣書状
- 一八四 「寛永 五年」 十月 三日 島津家久書状
- 一八五 (記事) 島津家久譜
- 一八六 「寛永 五年」 十一月十一日 土井利勝外三名連署書状
- 一八七 十一月十一日 土井利勝外三名連署書状
- 一八八 寛永 五年十一月十一日 土井利勝外三名連署書状
- 一八九 「寛永 五年」 十一月 四日 田代某請取状
- 一九〇 「寛永 五年」 十一月十七日 竹之内某請取状
- 一九一 「寛永 五年」 十一月十九日 山田有榮書状
- 一九二 「寛永 五年」 十二月 朔日 樺山久高申状
- 一九三 寛永 五年十二月十五日 島津久元・喜入忠統連署書下
- 一九四 十二月十九日 島津久賀・川上久困連署書状
- 一九五 (記事) 島津家久譜
- 一九六 「寛永 五年」 十二月廿七日 徳川家光御内書
- 一九七 十二月廿七日 某覚書
- 一九八 「寛永 五年」 十二月 晦日 島津家久覚書
- 卷八〇
- 一九九 (記事) 島津家久譜
- 二〇〇 「寛永 六年」 正月 七日 徳川家光御内書
- 二〇一 鹿兒島亭歌会次第
- 二〇二 (記事) 喜入忠統譜
- 二〇三 「寛永 六年」 正月 八日 島津家久書状
- 二〇四 (記事) 喜入忠統譜
- 二〇五 (記事) 島津家久譜
- 二〇六 「寛永 六年」 二月 朔日 徳川秀忠御内書
- 二〇七 「寛永 六年」 二月 七日 徳川家光御内書
- 二〇八 寛永 六年 二月 七日 島津家久公帖
- 二〇九 「寛永 六年」 二月廿一日 島津家久書状
- 二一〇 「寛永 六年」 二月廿一日 島津家久書状
- 二一一 (記事) 島津家久譜
- 二一二 「寛永 六年」 二月廿九日 某覚書
- 二一三 「寛永 六年」 二月廿九日 某覚書
- 二一四 二月 朔日 牧野正成書状
- 二一五 「寛永 六年」 二月 二日 土井利勝書状
- 二一六 (記事) 島津家久譜
- 二一七 「寛永 六年」 閏二月 三日 酒井忠世外三名連署書状
- 二一八 「寛永 六年」 閏二月 四日 永井白元書状
- 二一九 (記事) 島津家久譜
- 二二〇 「寛永 六年」 閏二月 六日 島津忠元光書状
- 二二一 「寛永 六年」 閏二月 八日 土井利勝書状
- 二二二 閏二月十五日 島津忠興書状
- 二二三 「寛永 六年」 閏二月十八日 伊勢貞昌覚書

二二四 「寛永 六年」 二月廿八日 相良頼寛書状
 二二五 「寛永 六年」 三月十六日 徳川秀忠御内書
 二二六 「寛永 六年」 三月十八日 島津家久書状
 二二七 「寛永 六年」 三月十九日 土井利勝書状
 二二八 「寛永 六年」 三月十九日 土井利勝請取状
 二二九 寛永 六年 三月廿六日 久永某外五名連署請取状
 二三〇 (記事) 島津家久譜
 二三一 「寛永 六年」 三月廿一日 土井利勝書状
 二三二 「寛永 六年」 三月廿三日 島津家久書状
 二三三 「寛永 六年」 四月 三日 島津家久書状
 二三四 寛永 六年 四月 八日 島津家久公帖
 二三五 寛永 六年 四月廿二日 島津家久公帖
 二三六 「寛永 六年」 五月 三日 徳川秀忠御内書
 二三七 「寛永 六年」 五月 四日 徳川家光御内書
 二三八 「寛永 六年」 五月十一日 伊勢貞昌書状
 二三九 (記事) 島津光久譜
 二四〇 「寛永 六年」 五月十五日 伊勢貞昌書状
 二四一 「寛永 六年」 五月 廿五日 島津家久書状
 二四二 「寛永 六年」 六月十六日 徳川秀忠御内書
 二四三 「寛永 六年」 六月 廿日 某覚書
 二四四 島津家久書状
 二四五 懷旧連歌
 二四六 「寛永 六年」 七月十二日 徳川秀忠御内書

二四七 七月十八日 徳川家光御内書
 二四八 (記事) 三原重長譜
 二四九 寛永 六年 七月 吉日 島津久元外二名連署起請文
 二五〇 十六日 島津家久書状
 二五一 寛永 六年 八月十五日 島津久元・喜入忠政連署曳付
 二五二 (記事) 平田純正譜
 二五三 「寛永 六年」 八月廿三日 酒井忠勝書状
 二五四 寛永 六年 八月廿四日 樺山高覚書
 二五五 「寛永 六年」 八月廿七日 島津家久書状
 二五六 「寛永 六年」 九月 五日 伊勢貞昌書状
 二五七 「寛永 六年」 九月 六日 徳川秀忠御内書
 二五八 「寛永 六年」 九月 八日 徳川家光御内書
 二五九 「寛永 六年」 九月十九日 某覚書
 二六〇 寛永 六年 九月廿一日 樺山高申状
 二六一 「寛永 六年」 九月廿二日 永井白元書状
 二六二 (記事) 島津久元譜
 二六三 寛永 六年 十月 朔日 喜入忠統・伊勢貞昌連署知行目録
 二六四 十月 二日 太わら屋市左衛門調道具注文
 二六五 「寛永 六年」 十月 五日 川崎祐賢外二名連署書状
 二六六 「寛永 六年」 十月 八日 伊東祐慶書状
 二六七 「寛永 六年」 十月 八日 伊東祐慶書状
 二六八 「寛永 六年」 十月十八日 伊勢貞昌書状
 二六九 (記事) 島津久茂譜

- 二七〇 「寛永 六年」十一月十八日 (伊勢貞昌九) 某覚書
- 二七一 寛永 六年十一月廿一日 某覚書
- 二七二 寛永 六年十一月廿一日 吉祥寺松岳覚書
- 二七三 「寛永 六年」十一月廿六日 伊勢貞昌書状
- 二七四 「寛永 六年」十一月廿六日 島津氏家臣某条書
- 二七五 「寛永 六年」十一月廿六日 伊勢貞昌書状
- 二七六 「寛永 六年」十二月 二日 寺沢広高書状
- 二七七 「寛永 六年」十二月 二日 伊勢貞昌書状
- 二七八 (記事) 北郷久加譜
- 二七九 (記事) 島津光久譜
- 二八〇 「寛永 六年」十二月十九日 島津久賀・川上久国連署書状
- 二八一 十二月十八日 徳川秀忠御内書
- 二八二 「寛永 六年」十二月廿一日 伊勢貞昌書状
- 二八三 「寛永 六年」十二月廿九日 土井利勝書状
- 卷八十一
- 二八四 (記事) 島津家久譜
- 二八五 (記事) 島津久元譜
- 二八六 二月十三日 島津家久書状
- 二八七 「寛永 七年 二月」廿日 島津家久書状
- 二八八 (記事) 島津家久譜
- 二八九 「寛永 七年」二月廿一日 島津家久書状
- 二九〇 「寛永 七年」三月 三日 島津久元・喜入忠統連署書状
- 二九一 伊集院氏系図抄
- 二九二 (記事) 島津家久譜
- 二九三 「寛永 七年」三月十八日 島津家久書状
- 二九四 寛永 七年 三月 廿日 島津久元二名連署達書
- 二九五 「寛永 七年」三月廿七日 土井利勝外三名連署書状
- 二九六 「寛永 七年」四月 十日 島津忠興書状
- 二九七 (記事) 島津家久譜
- 二九八 御成之記録抜書
- 二九九 (記事) 島津光久譜
- 三〇〇 (記事) 島津久元譜
- 三〇一 (記事) 北郷忠亮譜
- 三〇二 (記事) 北郷久加譜
- 三〇三 寛永 七年 五月廿三日 伊勢貞昌覚書
- 三〇四 「寛永 七年」四月廿五日 島津家久書状
- 三〇五 「寛永 七年」五月 二日 島津家久書状
- 三〇六 「寛永 七年」五月 二日 島津家久書状
- 三〇七 「寛永 七年」五月十一日 島津家久書状
- 三〇八 「寛永 七年」五月十五日 島津家久書状
- 三〇九 島津朝久一流系図
- 三一〇 「寛永 七年」五月十七日 島津家久書状
- 三一一 「寛永 七年」五月 廿日 島津忠元光覚書
- 三一二 (記事) 島津家久譜
- 三一三 「寛永 七年」七月 二日 土井利勝書状
- 三一四 寛永 七年 八月 四日 勘定所達書

- 三二五 寛永 七年 八月 七日 某寛書
- 三二六 「寛永 七年」 八月十一日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
- 三二七 (記事) 島津家久譜
- 三一八 「寛永 七年」 八月廿七日 島津家久書状
- 三一九 「寛永 七年」 八月廿九日 伊勢貞昌書状
- 三二〇 (記事) 島津家久譜
- 三二一 「寛永 七年」 九月十三日 土井利勝外三名連署書状
- 三二二 「寛永 七年」 九月十四日 土井利勝書状
- 三二三 「寛永 七年」 九月廿四日 某寛書
- 三二四 (記事) 児玉利昌譜
- 三二五 寛永 七年 九月 吉日 山川霧島神社再興棟札
- 三二六 「寛永 七年」 十月廿七日 土井利勝書状
- 三二七 「寛永 七年」 十一月 三日 島津家久書状案
- 三二八 (記事) 島津家久譜
- 三二九 島津家久書状案抄
- 三三〇 (記事) 島津義久譜
- 三三一 十一月 十日 島津家久書状案
- 三三二 「寛永 七年」 十一月廿三日 徳川秀忠御内書
- 三三三 寛永 七年十一月 吉日 山川諏方大明神棟札写
- 三三四 「寛永 七年」 十一月 十日 島津家久書状案
- 三三五 寛永 七年十一月廿七日 和漢聯句
- 三三六 「寛永 七年」 十一月廿八日 某寛書条書
- 三三七 寛永 七年十二月 朔日 某寛書
- 三三八 寛永 七年十二月 朔日 某条書
- 三三九 (記事) 島津家久譜
- 三四〇 「寛永 七年」 十二月 六日 酒井忠世書状
- 三四一 寛永 七年十二月十三日 沢永澄書下
- 三四二 「寛永 七年」 十二月十九日 伊勢貞昌書状
- 三四三 寛永 七年十二月廿三日 藏人藤原共綱奉口宣案
- 三四四 寛永 七年十二月廿三日 明正天皇宣旨
- 三四五 寛永 七年十二月廿三日 藏人藤原共綱奉口宣案
- 三四六 寛永 七年十二月廿三日 島津光久叙従五位下位記
- 三四七 「寛永 七年」 十二月廿九日 某寛書条書
- 卷八十二
- 三四八 (記事) 島津家久譜
- 三四九 (記事) 島津光久譜
- 三五〇 「寛永 八年」 正月 八日 島津家久書状案
- 三五一 (記事) 鎌田政勝譜
- 三五二 寛永 八年 二月 十日 伊東祐昌起請文
- 三五三 (記事) 島津家久譜
- 三五四 (記事) 殉国名數
- 三五五 (記事) 島津家久譜
- 三五六 (記事) 島津家久譜
- 三五七 「寛永 八年」 二月廿六日 島津家久譜
- 三五八 「寛永 八年 二月」 如窓庵全達外三名連署書状案
- 三五九 「寛永 八年」 某寛書条書
- 島津家久書状案

- 三六〇 「寛永 八年」 三月 七日 島津家久書状案
- 三六一 「寛永 八年」 三月 十日 島津家久書状
- 三六二 「寛永 八年」 三月十七日 島津家久書状
- 三六三 「寛永 八年」 三月廿八日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
- 三六四 北郷時久一流系図
- 三六五 (記事) 島津家久譜
- 三六六 寛永 八年 三月廿八日 島津家久袖判条書写
- 三六七 「寛永 八年」 三月廿八日 島津家久書状案
- 三六八 「寛永 八年」 島津家久書状案
- 三六九 島津家久譜
- 三七〇 (記事) 拝領物目録
- 三七一 島津光久譜
- 三七二 寛永 八年 四月 一日 藏人藤原俊完奉口宣案
- 三七三 寛永 八年 四月 一日 藏人藤原俊完奉口宣案
- 三七四 寛永 八年 四月 一日 明正天皇宣旨
- 三七五 寛永 八年 四月 一日 島津光久叙從四位下日記
- 三七六 (記事) 島津忠紀譜
- 三七七 (記事) 島津久元譜
- 三七八 「寛永 八年」 四月 三日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
- 三七九 四月 三日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
- 三八〇 「寛永 八年」 四月 三日 島津家久書状案
- 三八一 「寛永 八年」 四月 四日 島津家久書状案
- 三八二 (記事) 島津家久譜
- 三八三 「寛永 八年」 四月十一日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
- 三八四 「寛永 八年」 四月十六日 以心崇伝書状
- 三八五 (記事) 島津光久譜
- 三八六 (記事) 島津家久譜
- 三八七 「寛永 八年」 四月廿八日 酒井忠行書状
- 三八八 「寛永 八年」 四月廿九日 島津家久書状
- 三八九 「寛永 八年」 四月廿九日 伊地知重政書状
- 三九〇 (記事) 島津家久譜
- 三九一 寛永 八年 四月 下旬 遊行卅五世他阿伝書
- 三九二 「寛永 八年」 五月 七日 島津家久書状
- 三九三 「寛永 八年」 五月 八日 島津家久書状
- 三九四 「寛永 八年」 五月 八日 琉球人進上物注文
- 三九五 (記事) 島津家久譜
- 三九六 「寛永 八年」 五月 九日 伊勢貞昌書状
- 三九七 「寛永 八年」 五月十一日 某覚書
- 三九八 (記事) 島津家久譜
- 三九九 「寛永 八年 五月」 十九日 島津家久書状
- 四〇〇 五月廿二日 島津家久書状
- 四〇一 五月廿二日 某重物献進目録
- 四〇二 (記事) 島津家久譜
- 四〇三 「寛永 八年」 六月 八日 島津家久書状
- 四〇四 「寛永 八年」 六月十六日 島津忠興書状
- 四〇五 「寛永 八年」 七月 十日 有馬直純書状

四〇六	「寛永 八年」	七月十一日	某覚書	四二八	「寛永 八年」	九月 二日	松平信綱書状
四〇七	「寛永 八年」	七月廿二日	寺沢広高書状	四二九		(記事)	島津家久譜
四〇八	「寛永 八年」	七月廿三日	松平定綱書状	四三〇	寛永 八年	九月 四日	島津家久知行目録
四〇九	「寛永 八年」	七月廿四日	松平定綱書状案	四三一		(記事)	島津忠朗譜
四一〇	「寛永 八年」	七月廿六日	松平定行書状	四三二	「寛永 八年」	九月 七日	徳川家光御内書
四一一	「寛永 八年」	七月 晦日	伊勢貞昌書状	四三三	「寛永 八年」	九月 九日	島津家久書状
四一二		(記事)	北郷久根譜	四三四	寛永 八年	九月 九日	島津久元外二名連署書下
四一三	「寛永 八年」	八月 三日	酒井忠世外三名連署書状	四三五		(記事)	島津家久譜
四一四	「寛永 八年」	八月 三日	土井利勝書状	四三六	「寛永 八年」	九月 十日	酒井忠勝書状
四一五	「寛永 八年」	八月 四日	松平定綱書状	四三七		九月十一日	松平信綱外二名連署書状写
四一六	寛永 八年	八月 四日	島津久元外二名連署達書	四三八	寛永 八年	九月十五日	島津久元外二名連署掟書
四一七		(記事)	島津家久譜	四三九	寛永 八年	九月廿六日	島津久元外二名連署掟書
四一八	寛永 八年	八月 七日	某覚書	四四〇		(記事)	島津家久譜
四一九		(記事)	島津家久譜	四四一	「寛永 八年」	九月廿七日	土井利勝外三名連署奉書
四二〇	「寛永 八年」	八月十一日	島津家久書状案	四四二	「寛永 八年」	九月廿八日	水野守信書状
四二一		(記事)	児玉利昌譜	四四三		(記事)	島津家久譜
四二二	「寛永 八年」	八月十二日	島津家久書状	四四四	「寛永 八年」	九月 晦日	土井利勝外三名連署書状
四二三	「寛永 八年」	八月十六日	有馬直純書状	四四五	「寛永 八年」	九月	島津家久書状
四二四	「寛永 八年」	八月廿四日	松平定綱書状案	四四六	「寛永 八年」	九月	島津家久書状
四二五	「寛永 八年」	八月廿五日	太田資宗書状	四四七	寛永 八年	十月 朔日	島津久元外二名連署掟書
	卷八十三			四四八	寛永 八年	十月 朔日	島津久元外二名連署掟書
四二六	「寛永 八年」	九月 朔日	島津久元外二名連署掟書	四四九	「寛永 八年」	十月 朔日	島津家久書状
四二七		(記事)	島津家久譜	四五〇	「寛永 八年」	十月 四日	井上政重書状

- 四五一 「寛永 八年」 十月十一日 松平定綱書状
 四五二 「寛永 八年」 十月十一日 松平定綱書状
 四五三 (記事) 島津家久譜
 四五四 「寛永 八年」 十月十二日 徳川秀忠御内書
 四五五 「寛永 八年」 十月十四日 徳川家光御内書
 四五六 「寛永 八年」 十月廿五日 徳川家光御内書
 四五七 「寛永 八年」 十月廿七日 島津家久書状案
 四五八 「寛永 八年」 十月廿七日 島津家久書状案
 四五九 (記事) 島津家久譜
 四六〇 「寛永 八年」 十月廿八日 島津家久書状
 四六一 「寛永 八年」 十月廿九日 細川忠利書状
 四六二 「寛永 八年」 十月 晦日 島津家久書状
 四六三 琉球在番役注文
 四六四 島津氏家臣某条書
 四六五 「寛永 八年」 閏十月 三日 島津光久書状
 四六六 「寛永 八年」 閏十月 三日 島津久元外二名連署条書
 四六七 寛永 八年 閏十月十三日 某寬書
 四六八 「寛永 八年」 閏十月 廿日 島津家久書状
 四六九 「寛永 八年」 閏十月廿五日 伊勢貞昌書状
 四七〇 「寛永 八年」 十一月 五日 島津氏掟書抄
 四七一 「寛永 八年」 十一月 六日 土井利勝書状
 四七二 「寛永 八年」 十一月 八日 島津久元外二名連署書状
 四七三 寛永 八年 正月廿八日 内田某・大窪某連署上申状写
- 四七四 寛永 八年 二月 三日 島津久元・伊勢貞昌連署書下
 四七五 「寛永 八年」 十一月十五日 僧観助書状
 四七六 寛永 八年十一月十七日 島津久元外二名連署条書
 四七七 「寛永 八年」 十一月廿三日 島津光久書状
 四七八 「寛永 八年」 十一月 晦日 土井利勝書状
 四七九 「寛永 八年」 十二月 七日 琉球国三司官書状
 四八〇 (記事) 島津家久譜
 四八一 「寛永 八年」 十二月十八日 徳川秀忠御内書
 四八二 「寛永 八年」 十二月廿七日 徳川家光御内書
 四八三 (記事) 島津家久譜
 四八四 「寛永 八年」 十二月十九日 島津氏家臣某覺書
 四八五 閏十月 三日 島津光久書状
 四八六 「寛永 八年」 十二月廿四日 伊勢貞昌書状
- 卷八十四
 四八七 「寛永 九年」 正月 一日 島津家久書状
 四八八 「寛永 九年」 正月 九日 森川重俊書状
 四八九 「寛永 九年」 正月 十日 島津忠興書状
 四九〇 「寛永 九年」 正月十一日 青山幸成書状
 四九一 「寛永 九年」 正月十四日 永井尚政書状
 四九二 年代記抄
 四九三 (記事) 島津久元譜
 四九四 「寛永 九年」 正月廿九日 島津家久書状
 四九五 「寛永 九年」 二月 五日 土井利勝書状

- 四九六 「寛永 九年」 二月十三日 島津光久書狀
 四九七 (記事) 島津家久譜
 四九八 「寛永 九年」 二月廿五日 某条書
 四九九 寛永 九年 三月 朔日 小森某・時任某連署請取狀
 五〇〇 (記事) 島津綱久譜
 五〇一 四月 五日 島津久元書狀
 五〇二 (記事) 島津家久譜中
 五〇三 「寛永 九年」 四月十一日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
 五〇四 (記事) 島津家久譜中
 五〇五 「寛永 九年」 四月十三日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
 五〇六 (記事) 島津家久譜
 五〇七 寛永 九年 四月廿二日 某条書
 五〇八 「寛永 九年」 四月廿五日 島津久元書狀
 五〇九 (記事) 児玉利昌譜
 五一〇 (記事) 島津久元譜
 五一一 「寛永 九年」 四月廿八日 永井白元書狀
 五一二 島津家久・光久起請文前書案
 五一三 五月 九日 島津家久書狀
 五一四 「寛永 九年」 五月 十日 島津忠興書狀
 五一五 (記事) 島津光久譜
 五一六 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
 五一七 寛永 九年 五月十七日 伊勢貞昌披露狀
 五一八 (記事) 児玉利昌譜
- 五一九 (記事) 島津家久譜
 五二〇 「寛永 九年」 六月 二日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
 五二一 寛永 九年 六月 二日 喜入忠統・川上久因連署書狀
 五二二 「寛永 九年」 六月 五日 島津光久書狀
 五二三 「寛永 九年」 六月 五日 島津家久書狀
 五二四 「寛永 九年」 六月 五日 島津家久書狀
 五二五 「寛永 九年」 六月 六日 島津家久書狀
 五二六 「寛永 九年」 六月 七日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
 五二七 「寛永 九年」 六月 十一日 島津家久書狀
 五二八 (記事) 島津家久譜
 五二九 寛永 九年 六月 十一日 島津家久袖判条書
 五三〇 (記事) 島津家久譜
 五三一 「寛永 九年」 六月 十一日 島津家久書狀
 五三二 寛永 九年 六月 十一日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
 五三三 寛永 九年 六月 吉日 島津氏出陣賦
 五三四 「寛永 九年」 六月 十三日 水野勝成外四名連署書狀
 五三五 寛永 九年 六月 十六日 細川忠利書狀
 五三六 六月 廿一日 某覚書
 五三七 寛永 九年 六月 廿二日 某条書写
 五三八 六月 廿二日 某条書写
 五三九 「寛永 九年」 六月 廿三日 細川忠利書狀
 五四〇 (記事) 島津家久譜
 五四一 「寛永 九年」 六月 廿五日 新納忠清書狀

五四二	「寛永 九年」	六月廿七日	島津家久書状	五六四	「寛永 九年」	八月 晦日	島津久元・伊勢貞昌連署書状
五四三	「寛永 九年」	七月 六日	島津久元書状	五六五	「寛永 九年」	九月 七日	島津家久書状
五四四	「寛永 九年」	七月	某覚書	五六六	「寛永 九年」	九月 八日	島津家久袖判条書
五四五	(記事)		島津家久譜	五六七	(記事)		島津家久譜
五四六	寛永 九年	七月 吉日	島津家久・光久麾下人数注文	五六八	「寛永 九年」	九月十三日	島津家久書状
五四七	「寛永 九年」	七月十二日	新納忠清書状	五六九	「寛永 九年」	九月廿七日	島津久元・伊勢貞昌連署書状
五四八	「寛永 九年」	七月十七日	大野久武書状	五七〇	(記事)		島津家久譜
五四九	(記事)		島津家久譜	五七一	「寛永 九年」	十月 十日	島津家久書状
五五〇	寛永 九年	七月十八日	島津家久詠草	五七二	「寛永 九年」	十月十一日	島津氏軍役賦
五五一	「寛永 九年」	七月 六日	天寧寺某請取状	五七三	「寛永 九年」		某覚書
五五二	(記事)		島津家久譜	五七四	「寛永 九年」		某覚書
五五三	「寛永 九年」	七月廿三日	新納忠清書状	五七五	「寛永 九年」		島津家久条書
五五四	「寛永 九年」	七月廿六日	島津久元・伊勢貞昌連署書状	五七六	(記事)		島津家久譜
五五五	「寛永 九年」	七月廿七日	島津家久書状	五七七	「寛永 九年」	十一月 二日	島津久元・伊勢貞昌連署書状
五五六	「寛永 九年」	(記事)	殉国名藪	五七八	「寛永 九年」	十一月 二日	島津久元・伊勢貞昌連署書状
五五七		七月廿八日	江田兼吉差出	五七九	「寛永 九年」	十一月十三日	島津家久書状
	卷八十五			五八〇	「寛永 九年」	十一月十五日	松倉重次書状
五五八	「寛永 九年」	八月 朔日	島津氏軍役賦	五八一		十一月十四日	山田某外二名連署覚書
五五九		八月十一日	島津久元・伊勢貞昌連署書状	五八二	寛永 九年	十一月十八日	某条書
五六〇	寛永 九年	八月十四日	喜入忠統条書	五八三	(記事)		島津家久譜
五六一	「寛永 九年」	八月十九日	島津氏軍役賦	五八四		十一月 廿日	島津家久書状
五六二	「寛永 九年」	八月廿二日	島津久元・伊勢貞昌連署書状	五八五	「寛永 九年」	十一月 廿日	島津家久書状
五六三	「寛永 九年」	八月廿七日	新納忠清・最上義時連署条書	五八六	「寛永 九年」		島津家久書状

- 五八七 寛永 九年十二月 六日 島津久元外三名連署覚書
 五八八 寛永 九年十二月 九日 島津久元外三名連署覚書
 五八九 「寛永 九年」十二月十三日 飛鳥井雅宣書状
 五九〇 「寛永 九年」十二月廿一日 細川忠利書状
 五九一 寛永 九年十二月 飛鳥井雅宣歌道伝授状
 五九二 十二月廿八日 伊勢貞知書状
 五九三 寛永九年高帳写
 卷八十六
 五九四 (記事) 島津家久譜
 五九五 「寛永 十年」正月 二日 島津家久書状
 五九六 「寛永 十年」正月 二日 島津家久書状
 五九七 「寛永 十年」正月 三日 島津家久書状
 五九八 「寛永 十年」正月廿三日 島津家久書状
 五九九 (記事) 島津家久譜
 六〇〇 寛永 十年 二月 十日 猿渡某・時任某連署請取状
 六〇一 寛永 十年 二月 十日 某覚書
 六〇二 (記事) 島津家久譜
 六〇三 「寛永 十年」二月十一日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 六〇四 「寛永 十年」二月十五日 島津家久書状
 六〇五 (記事) 島津光久譜
 六〇六 (記事) 島津久雄譜
 六〇七 (記事) 島津久雄譜
 六〇八 (記事) 島津忠興譜
 六〇九 「寛永 十年」三月 十日 島津家久書状
 六一〇 「寛永 十年」三月十六日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 六一一 寛永 十年 三月 廿日 島津久元外二名連署条書
 六一二 (記事) 島津家久譜
 六一三 「寛永 十年」三月廿一日 島津家久書状
 六一四 「寛永 十年」三月廿六日 島津光久書状
 六一五 「寛永 十年」三月廿七日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 六一六 寛永 十年 三月 吉日 飯野白鳥權現棟札
 六一七 「寛永 十年」四月 四日 島津家久書状
 六一八 「寛永 十年」四月廿一日 島津家久書状
 六一九 四月廿八日 伊勢貞知書状
 六二〇 「寛永 十年」五月廿三日 徳川家光御内書
 六二一 (記事) 島津家久譜
 六二二 「寛永 十年」六月 七日 今村正長・曾我古祐連署書状
 六二三 (記事) 島津家久譜
 六二四 「寛永 十年」六月十一日 伊勢貞昌書状
 六二五 「寛永 十年」六月十一日 島津家久書状
 六二六 寛永 十年 六月十八日 島津家久袖判掟書
 六二七 寛永 十年 六月十八日 島津家久袖判条書
 六二八 寛永 十年 六月十八日 某袖判条書
 六二九 「寛永 十年」六月十八日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 六三〇 寛永 十年 六月十九日 某覚書
 六三一 (記事) 島津家久譜

六三二	「寛永十年」	六月廿八日	島津家久書状	六五五	「寛永十年」	十月廿四日	島津家久書状
六三三		(記事)	島津家久譜	六五六	「寛永十年」	十月廿四日	伊勢貞昌書状
六三四	「寛永十年」	七月十日	榎原職直・神尾元勝連署書状	六五七	「寛永十年」	十月廿五日	伊勢貞昌書状
六三五		(記事)	島津家久譜	六五八	寛永十年	十月吉日	島津家久書状
六三六	寛永十年	七月十二日	島津家久書状	六五九	「寛永十年」	十一月五日	伊勢貞昌書状
六三七	「寛永十年」	七月廿日	伊勢貞昌書状	六六〇	「寛永十年」	十一月十二日	伊勢貞昌書状
六三八	寛永十年	八月十日	島津久元外二名連署条書	六六一	「寛永十年」	十一月十五日	酒井忠世外二名連署書状
六三九	「寛永十年」	八月廿四日	島津家久書状	六六二		十一月十五日	酒井忠世外二名連署書状
六四〇		(記事)	島津家久譜	六六三	「寛永十年」	十一月十六日	伊勢貞昌書状
六四一	「寛永十年」	八月廿六日	島津家久書状	六六四		十一月廿六日	二階堂信行書状
六四二		(記事)	島津家久譜	六六五	「寛永十年」	十二月五日	伊地知重康書状
六四三	寛永十年	九月三日	島津久元・喜入忠統連署覚書	六六六		(記事)	北郷忠亮譜
六四四	寛永十年	九月四日	喜入忠統書状	六六七		(記事)	島津家久譜
六四五		(記事)	島津家久譜	六六八	「寛永十年」	十二月六日	島津家久書状
六四六	「寛永十年」	九月十九日	伊勢貞昌書状	六六九	「寛永十年」	十二月六日	島津家久書状
六四七		(記事)	島津家久譜	六七〇		(記事)	島津家久譜
六四八	「寛永十年」	九月	きく書状	六七一	「寛永十年」	十二月七日	島津家久書状
六四九	「寛永十年」	十月五日	島津家久書状	六七二		十二月七日	島津家久袖判条書
六五〇	「寛永十年」	十月五日	島津光久書状	六七三	「寛永十年」	十二月七日	島津家久書状
六五一		(記事)	島津家久譜	六七四	「寛永十年」	十二月七日	島津家久書状
六五二	「寛永十年」	十月八日	土井利勝外四名連署書状	六七五	「寛永十年」	十二月十六日	島津家久書状
六五三	「寛永十年」	十月十四日	島津家久書状	六七六			某覚書
六五四		十月廿四日	島津家久書状	六七七		(記事)	児玉利昌譜

- 六七八 「寛永十年」 二月廿五日 児玉利昌覚書
六七九 寛永十年 正月 三日 児玉利実覚書
卷八十七
六八〇 「寛永十一年」 正月 十日 島津家久書状
六八一 「寛永十一年」 正月十三日 島津家久書状
六八二 「寛永十一年」 正月十三日 伊勢貞昌書状
六八三 「寛永十一年」 正月十五日 島津家久書状
六八四 島津氏家臣某覚書
六八五 (記事) 島津家久譜
六八六 「寛永十一年」 二月十二日 勝連良繼・豊見城盛良連署書状
六八七 某覚書
六八八 「寛永十一年」 二月十三日 入来院重高覚書
六八九 入来院重高覚書
六九〇 寛永十一年 二月十六日 横川衆中名寄帳奥書
六九一 寛永十一年 二月十九日 (の野寺) 寺社屋鋪帳奥書
六九二 寛永十一年 二月廿三日 支配所社家屋敷目録抄
六九三 寛永十一年 二月十九日 支配所社屋敷目録
六九四 「寛永十一年」 二月廿五日 伊勢貞昌書状
六九五 「寛永十一年」 二月廿八日 島津家久書状
六九六 「寛永十一年」 二月廿八日 島津家久書状
六九七 寛永十一年 三月 朔日 某覚書
六九八 寛永十一年 三月十七日 島津久元・川上久國連署条書
六九九 「寛永十一年」 三月十七日 山田有栄書状
七〇〇 「寛永十一年」 三月廿六日 島津光久書状
七〇一 「寛永十一年」 三月廿六日 島津氏掟書抄
七〇二 (記事) 島津家久譜
七〇三 「寛永十一年」 三月 晦日 伊勢貞昌書状
七〇四 「寛永十一年」 四月 三日 島津家久書状
七〇五 寛永十一年 四月 四日 島津家久袖判条書
七〇六 寛永十一年 四月 六日 伊地知重康書状
七〇七 寛永十一年 四月廿三日 新納忠清外二名連署覚書
七〇八 「寛永十一年」 四月 晦日 八文字屋閑叟書状
七〇九 (記事) 島津家久譜
七一〇 「寛永十一年」 五月 四日 伊勢貞昌書状
七一 寛永十一年 五月 八日 島津久慶・島津久元連署宛行状
七一二 (記事) 島津家久譜
七一三 「寛永十一年」 五月 五日 喜入久供・三原重饒連署書状
七一四 (記事) 島津家久譜
七一五 「寛永十一年」 五月 六日 町田久則書状
七一六 寛永十一年 五月 九日 伊勢貞昌書状
七一七 寛永十一年 五月十三日 島津家久写経
七一八 (記事) 島津家久譜
七一九 寛永十一年 五月 廿日 島津久慶外二名連署条書
七二〇 寛永十一年 五月 廿日 島津久慶外二名連署条書抄
七二一 「寛永十一年」 五月廿八日 島津家久書状
七二二 「寛永十一年」 五月廿九日 酒井忠世・酒井忠勝連署奉書

- 七二三 寛永十一年 五月 平瀬氏清起請文
- 七二四 「寛永十一年」 六月十六日 伊勢貞知書狀
- 七二五 「寛永十一年」 六月十六日 島津綱久譜 (記事)
- 七二六 「寛永十一年」 六月廿六日 伊勢貞知書狀
- 七二七 寛永十一年 六月廿九日 島津久元外二名連署違書
- 七二八 「寛永十一年」 七月 四日 相良頼兄書狀
- 七二九 七月 六日 島津家久書狀
- 七三〇 「寛永十一年」 七月 六日 島津家久書狀
- 七三一 「寛永十一年」 七月 六日 伊勢貞知書狀
- 七三二 「寛永十一年」 七月 六日 島津家久譜 (記事)
- 七三三 「寛永十一年」 七月十二日 島津家久書狀
- 七三四 「寛永十一年」 七月十二日 島津家久書狀
- 七三五 「寛永十一年」 七月十二日 島津久慶外二名連署条書抄
- 七三六 (記事) 某譜
- 七三七 「寛永十一年」 七月十一日 入来院重高書狀
- 七三八 (記事) 島津家久譜
- 七三九 島津久元譜 (記事)
- 七四〇 寛永十一年 七月十四日 土井利勝・酒井忠勝連署書狀
- 七四一 「寛永十一年」 七月十七日 幕府申渡書
- 七四二 「寛永十一年」 七月十九日 中西秀長書狀
- 七四三 寛永十一年 七月 廿日 伊勢貞昌書狀
- 七四四 「寛永十一年」 閏七月廿一日 長田某外二名連署請取狀
- 七四五 「寛永十一年」 七月廿三日 松平信綱外二名連署申渡書
- 七四六 七月廿八日 幕府触書
- 七四七 「寛永十一年」 閏七月 朔日 榑原職直・神尾元勝連署書狀
- 七四八 島津家久譜 (記事)
- 七四九 「寛永十一年」 閏七月 二日 土井利勝・酒井忠勝連署奉書
- 七五〇 「寛永十一年」 閏七月 八日 酒井忠勝・土井利勝連署奉書
- 七五一 (記事) 島津家久譜
- 七五二 「寛永十一年」 閏七月十六日 永井尚政外二名連署奉書
- 七五三 「寛永十一年」 閏七月十八日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
- 七五四 (記事) 島津家久譜
- 七五五 「寛永十一年」 閏七月廿八日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
- 七五六 寛永十一年 八月 四日 徳川家光判物
- 七五七 (記事) 島津家久譜
- 七五八 「寛永十一年」 八月十四日 榑原職直・神尾元勝連署書狀
- 七五九 八月十八日 切支丹宗徒交名
- 七六〇 寛永十一年 八月十五日 阿多掃部助知行目録写
- 七六一 (記事) 島津家久譜
- 七六二 「寛永十一年」 八月十八日 島津氏家臣某覚書
- 七六三 「寛永十一年」 八月十八日 切支丹宗徒交名
- 七六四 (記事) 島津家久譜
- 七六五 「寛永十一年」 八月廿二日 榑原職直・神尾元勝連署書狀
- 七六六 寛永十一年 八月廿四日 新納忠清外二名連署死行狀
- 七六七 八月廿六日 山田有榮外二名連署書狀
- 七六八 「寛永十一年」 八月廿七日 神尾元勝・榑原職直連署書狀

- 七六九 「寛永十一年」 九月 三日 神尾元勝・榊原職直連署書状
七七〇 「寛永十一年」 九月 七日 徳川家光御内書
七七一 (記事) 北郷久加譜
七七二 寛永十一年 九月十七日 島津久慶外二名連署証状
七七三 寛永十一年 九月廿三日 島津氏条書
七七四 寛永十一年 九月廿五日 島津久慶外二名連署達書
七七五 九月十五日 堀田正盛書状
七七六 (記事) 島津家久譜
七七七 寛永十一年 九月 晦日 土井利勝外三名連署送状
七七八 「寛永十一年」 十月 一日 榊原職直・神尾元勝連署書状
七七九 「寛永十一年」 十月 二日 良恕法親王書状
七八〇 「寛永十一年」 十月 八日 近衛信尋書状
七八一 「寛永十一年」 十月十八日 有馬直純書状
七八二 寛永十一年 十月十九日 島津久慶外二名連署条書
七八三 寛永十一年 十月十九日 島津久慶外二名連署条書
七八四 (記事) 島津家久譜
七八五 「寛永十一年」 十月廿一日 島津家久書状
七八六 「寛永十一年」 十月廿一日 島津家久書状
七八七 (記事) 島津家久譜
七八八 「寛永十一年」 十月廿六日 土井利勝書状
七八九 「寛永十一年」 十月廿七日 近衛信尋書状
七九〇 寛永十一年 十月廿八日 島津久慶外二名連署寄進状
七九一 寛永十一年 十月廿八日 島津久慶外二名連署宛行状
- 七九二 寛永十一年 十月廿八日 島津久慶外二名連署宛行状
七九三 寛永十一年十一月十四日 島津久慶外二名連署申渡書
七九四 (記事) 島津家久譜
七九五 寛永十一年十一月廿六日 島津家久条書
七九六 寛永十一年十一月廿六日 島津家久分国惣高一紙目錄写
七九七 (記事) 島津家久譜
七九八 寛永十一年十二月 朔日 新納忠清・肥後某連署覚書
七九九 「寛永十一年」十二月 三日 島津光久書状
八〇〇 寛永十一年十二月 晦日 島津家久覚書
八〇一 寛永十一年 六月 七日 税所某書状
- 卷八十八
八〇二 島津久元日々記
八〇三 (記事) 島津家久譜
八〇四 「寛永十二年」 島津家久詠草
八〇五 正月 六日 島津家久書状
八〇六 「寛永十二年」 正月 九日 島津久元書状
八〇七 寛永十二年 正月十二日 島津久慶外二名連署曳付
八〇八 「寛永十二年」 正月 廿日 島津家久書状
八〇九 「寛永十二年」 正月廿七日 島津家久書状
八一〇 (記事) 島津家久譜
八一一 「寛永十二年」 二月 朔日 内藤忠重・安藤重長連署書状
八一二 二月 朔日 島津氏掟書
八一三 寛永十二年 二月 十日 島津久慶外三名連署引付

八二四	寛永十二年	二月 十日	平田宗弘・相良権兵衛尉連署達書	八三七	(記事)	島津家久譜
八一五	「寛永十二年」	(記事)	島津家久譜	八三八	「寛永十二年」	七月 朔日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
八一六	「寛永十二年」	二月十二日	伊勢貞昌書狀	八三九	「寛永十二年」	七月 六日 伊勢貞昌書狀
八一七	(記事)	島津家久譜	島津家久譜	八四〇	寛永十二年	七月 九日 三与支配所知行目録
八一八	「寛永十二年」	三月 朔日	土井利勝・酒井忠勝連署書狀	八四一	(記事)	島津家久譜
八一九	(記事)	島津家久譜	島津家久譜	八四二	「寛永十二年」	七月十三日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
八二〇	寛永十二年	三月十七日	島津久慶外四名連署条書	八四三	「寛永十二年」	七月十九日 島津光久宛行狀
八二一	寛永十二年	三月廿三日	島津家久書狀	八四四	「寛永十二年」	七月廿七日 島津家久書狀
八二二	「寛永十二年」	四月 三日	島津家久供勢注文	八四五	「寛永十二年」	七月廿七日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
八二三	「寛永十二年」	四月 三日	島津光久供勢注文	八四六	「寛永十二年」	八月 六日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
八二四	「寛永十二年」	四月 三日	島津家久書狀	八四七	「寛永十二年」	八月 九日 島津久慶・川上久困連署回狀
八二五	「寛永十二年」	四月 八日	島津家久書狀	八四八	「寛永十二年」	八月十八日 島津家久書狀
八二六	「寛永十二年」	四月十八日	島津家久書狀	八四九	「寛永十二年」	八月十九日 島津光久書狀
八二七	「寛永十二年」	四月十八日	島津家久書狀	八五〇	「寛永十二年」	八月十九日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
八二八	「寛永十二年」	四月十八日	島津家久書狀	八五一	「寛永十二年」	八月廿六日 島津光久書狀
八二九	「寛永十二年」	五月十三日	島津家久書狀	八五二	寛永十二年	八月廿八日 川上忠通条書
八三〇	(記事)	島津家久譜	島津家久譜	八五三	「寛永十二年」	九月 二日 島津家久書狀
八三一	「寛永十二年」	五月十四日	島津家久書狀	八五四	「寛永十二年」	九月 四日 島津家久書狀
八三二	(記事)	島津家久譜	島津家久譜	八五五	「寛永十二年」	九月 七日 島津家久書狀
八三三	「寛永十二年」	五月廿三日	島津家久書狀	八五六	「寛永十二年」	九月十四日 仙石久隆・榑原職直連署書狀
八三四	「寛永十二年」	六月 廿日	島津家久書狀	八五七	「寛永十二年」	九月十四日 仙石久隆・榑原職直連署書
八三五	寛永十二年	六月廿一日	寛永武家諸法度	八五八	「寛永十二年」	九月十七日 島津家久書狀
八三六	「寛永十二年」	六月廿八日	榑原職直・仙石久隆連署書狀	八五九	「寛永十二年」	九月十七日 島津家久書狀

- 八六〇 「寛永十二年」 九月十七日 島津家久書状
 八六一 「寛永十二年」 九月廿六日 有馬豊氏書状
 八六二 「寛永十二年」 九月廿七日 島津家久書状
 八六三 (記事) 島津光久譜
 八六四 「寛永十二年」 九月廿七日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
 八六五 「寛永十二年」 九月廿八日 島津家久書状
 八六六 (記事) 北郷久直譜
 八六七 「寛永十二年」 十月 七日 榑原職直・仙台久隆連署書状
 八六八 「寛永十二年」 十月 九日 某覚書
 八六九 「寛永十二年」 十月十一日 島津家久書状
 八七〇 「寛永十二年」 十月十一日 島津久慶外四名連署回状
 八七一 十月 十日 水野某書状
 八七二 十月十二日 榑原職直・仙石久隆連署書状
 八七三 伴天連人数書状
 八七四 「寛永十二年」 十月十二日 榑原職直・仙石久隆連署書状
 八七五 「寛永十二年」 十月十七日 島津久慶外四名連署申渡書
 八七六 「寛永十二年」 十月廿一日 某覚書
 八七七 「寛永十二年」 十一月 一日 島津久慶外三名連署条書
 八七八 「寛永十二年」 十一月 二日 西純政外二名連署書状
 八七九 「寛永十二年」 十一月 七日 島津家久書状
 八八〇 「寛永十二年」 十一月十七日 壹岐幸光外二名連署書状
 八八一 「寛永十二年」 十二月 四日 新納忠清願書
 八八二 「寛永十二年」 十二月十五日 島津久慶外二名連署曳付
- 八八三 「寛永十二年」 十一月十九日 西純政外二名連署書状
 八八四 「寛永十二年」 十二月 七日 伊勢貞昌書状
 八八五 「寛永十二年」 十二月十一日 有馬康純書状
 八八六 「寛永十二年」 十二月十二日 諸士法度写
 八八七 「寛永十二年」 十二月十四日 有吉英貴・長岡是季連署書状
 八八八 「寛永十二年」 十二月十四日 有吉英貴・長岡是季連署書状
 八八九 「寛永十二年」 十二月十五日 壹岐幸光外二名連署書状
 八九〇 「寛永十二年」 十二月十七日 林田重正外二名連署書状
 八九一 「寛永十二年」 十二月十七日 林田重正外二名連署書状
 八九二 「寛永十二年」 十二月廿五日 秋月種成書状
 八九三 「寛永十二年」 三月十四日 谷山衆高究帳
 八九四 卷八十九
 八九五 「寛永十三年」 正月 五日 島津忠朗譜
 八九六 「寛永十三年」 正月 五日 島津家久書状
 八九七 「寛永十三年」 正月 五日 島津家久書状
 八九八 「寛永十三年」 正月十一日 尚豊書状
 八九九 「寛永十三年」 正月十八日 島津家久書状
 九〇〇 「寛永十三年」 正月 廿日 島津久慶外三名連署条書
 九〇一 堺目人数・武具注文
 九〇二 正月廿四日 寺田時岡書状
 九〇三 「寛永十三年」 二月 八日 島津家久書状
 九〇四 「寛永十三年」 二月 九日 島津家久書状

九〇五		二月廿一日	島津家久覚書	九二八	「寛永十三年」	六月十五日	伊勢貞昌書状
九〇六	「寛永十三年」	二月廿一日	島津家久覚書	九二九	「寛永十三年」	六月廿八日	川上久国・伊勢貞昌連署書状
九〇七	「寛永十三年」	三月 十日	島津家久書状	九三〇	「寛永十三年」	六月廿八日	島津光久書状
九〇八	「寛永十三年」	三月 十日	島津家久書状	九三一	「寛永十三年」	七月十三日	島津家久書状
九〇九			島津家久譜	九三二	「寛永十三年」	七月 廿日	島津光久書状
九一〇			島津光久譜	九三三	「寛永十三年」	七月廿二日	伊勢貞昌・川上久国連署書状
九一一	寛永十三年	三月十四日	土井利勝外三名連署奉書	九三四	「寛永十三年」	八月 六日	島津家久書状
九一二	「寛永十三年」		伊勢貞昌・島津久元連署覚書	九三五	「寛永十三年」	八月廿二日	島津家久書状
九一三	「寛永十三年」	三月廿九日	島津家久書状 (写)	九三六	「寛永十三年」	九月 八日	島津家久書状
九一四	「寛永十三年」	四月廿三日	島津家久書状 (写)	九三七	「寛永十三年」	九月十二日	島津家久書状
九一五	寛永十三年	四月廿六日	島津久慶外六名連署条書	九三八	寛永十三年	九月十八日	島津久慶外四名連署引付
九一六			島津家久譜	九三九	「寛永十三年」	十月 三日	川上久国・伊勢貞昌連署書状
九一七	「寛永十三年」	五月 三日	徳川秀忠御内書	九四〇			島津家久譜
九一八	寛永十三年	五月 六日	金武外二名連署書状	九四一	「寛永十三年」	十月 六日	土井利勝外二名連署書状
九一九	「寛永十三年」	五月十五日	島津家久条書	九四二	寛永十三年	十月 六日	土井利勝外二名連署書状
九二〇	「寛永十三年」	五月廿四日	児玉利昌書状	九四三			島津家久譜
九二一	「寛永十三年」	五月廿二日	島津久元書状	九四四	「寛永十三年」	十月 八日	徳川家光御内書
九二二	「寛永十三年」	五月廿二日	観助書状 (写)	九四五	「寛永十三年」	十月 八日	土井利勝書状
九二三	「寛永十三年」	五月廿五日	島津家久書状	九四六	「寛永十三年」	十月 九日	土井利勝外二名連署書状
九二四	「寛永十三年」	五月廿八日	良恕法親王書状	九四七	「寛永十三年」	十月十一日	松平定行書状
九二五	「寛永十三年」	五月廿九日	土井利勝外三名連署書状	九四八			島津光久譜
九二六	寛永十三年	六月 朔日	新銭古銭賣買之定写	九四九	「寛永十三年」	十月廿四日	島津家久書状
九二七	「寛永十三年」	六月十五日	伊勢貞昌・川上久国連署書状	九五〇	「寛永十三年」	十月廿九日	土井利勝外三名連署書状

- 九五一 「寛永十三年」十一月朔日 酒井忠勝書狀
- 九五二 「寛永十三年」十月廿六日 島津久保譜
- 九五三 「寛永十三年」十一月廿六日 島津家久書狀
- 九五四 「寛永十三年十一月」 島津家久書狀
- 九五五 「寛永十三年」十一月八日 有馬直純書狀
- 九五六 「寛永十三年」十一月十日 高山盛聰書狀
- 九五七 「寛永十三年」十一月十三日 島津家久書狀
- 九五八 「寛永十三年」十一月廿日 有馬直純書狀
- 九五九 「寛永十三年」十一月廿日 有馬直純書狀
- 九六〇 「寛永十三年」十一月廿二日 島津家久書狀
- 九六一 「寛永十三年」十一月廿二日 土井利勝書狀
- 九六二 「寛永十三年」十一月廿三日 伊勢貞昌・山田有榮連署書狀
- 九六三 十二月二日 島津光久書狀
- 九六四 「寛永十三年」十二月二日 島津光久書狀
- 九六五 「寛永十三年」十二月三日 細川忠利書狀
- 九六六 「寛永十三年」十二月二日 金武朝貞書狀
- 九六七 「寛永十三年」十二月七日 有川貞守請取狀
- 九六八 「寛永十三年」十二月九日 土井利勝外三名連署書狀
- 九六九 「寛永十三年」十二月九日 土井利勝書狀
- 九七〇 「寛永十三年」十二月九日 松平信綱書狀
- 九七一 「寛永十三年」十二月九日 酒井忠勝書狀
- 九七二 十二月九日 堀田正盛書狀
- 九七三 「寛永十三年」十二月十一日 島津光久書狀
- 九七四 寛永十三年十二月十一日 細谷田某覚書
- 九七五 「寛永十三年」十二月十二日 島津家久書狀
- 九七六 「寛永十三年」十二月十三日 細川忠利書狀
- 九七七 「寛永十三年」十二月十四日 相良長每書狀
- 九七八 「寛永十三年」十二月廿一日 島津家久書狀
- 九七九 寛永十三年十二月廿一日 新納忠清・山田有榮連署覚書
- 九八〇 「寛永十三年」十二月廿七日 土井利勝外三名連署奉書
- 九八一 「寛永十三年」十二月廿八日 島津家久書狀
- 九八二 「寛永十三年」十二月廿九日 久志本常尹書狀
- 卷九十
- 九八三 寛永十三年九月廿日 薩州鹿兒島衆中屋敷御檢地帳上
- 九八四 寛永十三年九月廿日 薩州鹿兒島衆中屋敷御檢地帳御城内
- 九八五 寛永十三年九月廿日 薩州鹿兒島衆中屋敷御檢地帳下
- 九八六 寛永十三年九月廿日 薩州鹿兒島衆中屋敷御檢地帳西田
- 卷九十一
- 九八七 (記事) 北郷久加譜
- 九八八 「寛永十四年」正月四日 島津家久書狀
- 九八九 「寛永十四年」正月十一日 土井利勝書狀
- 九九〇 「寛永十四年」正月十四日 戸田氏経書狀
- 九九一 (記事) 児玉利昌譜
- 九九二 「寛永十四年」正月十二日 島津光久書狀
- 九九三 「寛永十四年」正月廿一日 松平定綱書狀

- 九四四 「寛永十四年 正月」 廿七日 島津家久書状
- 九九五 「寛永十四年 正月」 廿八日 島津家久書状
- 九九六 寛永十四年 正月廿七日 庄内高城東霧島六所権現棟札
- 九九七 「寛永十四年」 正月廿八日 川上久国外二名連署書状
- 九九八 寛永十四年 二月 三日 伊地知重順書状
- 九九九 「寛永十四年」 二月 九日 島津光久書状
- 一〇〇〇 「寛永十四年」 二月 九日 伊勢貞昌書状
- 一〇〇一 「寛永十四年」 二月十一日 神尾元勝書状
- 一〇〇二 「寛永十四年」 十三日 島津家久書状
- 一〇〇三 「寛永十四年」 二月廿一日 島津家久覚書
- 一〇〇四
- 一〇〇五 (記事) 島津光久譜
- 一〇〇六 「寛永十四年」 二月廿九日 島津光久書状
- 一〇〇七 二月廿九日 島津光久書状
- 一〇〇八 (記事) 島津忠朗譜
- 一〇〇九 「寛永十四年」 三月 九日 島津光久書状
- 一〇一〇 「寛永十四年」 三月 九日 島津光久書状
- 一〇一一 「寛永十四年」 三月十二日 鮫島宗堯請取状
- 一〇一二 「寛永十四年」 三月十二日 仁禮某請取状
- 一〇一三 「寛永十四年」 三月十三日 松平定綱書状
- 一〇一四 「寛永十四年」 三月十五日 島津家久書状
- 一〇一五 「寛永十四年」 三月十六日 伊達忠宗書状
- 一〇一六 「寛永十四年」 三月十六日 茂庭良綱書状
- 一〇二七 「寛永十四年」 三月十九日 土井利勝外三名連署書状
- 一〇二八 (記事) 島津家久譜
- 一〇二九 「寛永十四年」 三月十九日 土井利勝外三名連署書状
- 一〇三〇 「寛永十四年」 三月 廿日 島津家久書状
- 一〇三一 「寛永十四年」 三月 廿日 島津家久書状
- 一〇三二 「寛永十四年」 三月廿二日 川上久国外二名連署書状
- 一〇三三 「寛永十四年」 閏三月 二日 島津光久書状
- 一〇三四 「寛永十四年」 閏三月 二日 島津光久書状
- 一〇三五 (記事) 島津家久譜
- 一〇三六 「寛永十四年」 閏三月廿九日 島津家久書状
- 一〇三七 「寛永十四年」 四月 朔日 島津光久書状
- 一〇三八 「寛永十四年」 四月十二日 島津家久書状
- 一〇三九 (記事) 北郷忠直譜

- 一〇四〇 四月十二日 島津家久書状
- 一〇四一 「寛永十四年 四月」 十六日 島津家久書状
- 一〇四二 「寛永十四年」 四月廿三日 細川忠利書状
- 一〇四三 「寛永十四年」 四月廿四日 島津光久書状
- 一〇四四 「寛永十四年」 四月廿五日 鍋島勝茂書状
- 一〇四五 「寛永十四年」 四月廿五日 鍋島勝茂書状
- 一〇四六 寛永十四年 五月 日 島津氏掟書覚
- 一〇四七 「寛永十四年」 五月 九日 高山盛明書状
- 一〇四八 島津家久譜
- 一〇四九 「寛永十四年」 五月十一日 板倉重宗書状
- 一〇五〇 「寛永十四年」 五月廿一日 島津光久書状
- 一〇五一 「寛永十四年」 五月廿九日 伊勢貞昌書状
- 一〇五二 「寛永十四年」 五月廿九日 土井利勝外三名連署書状
- 一〇五三 「寛永十四年」 六月 七日 金武朝貞書状
- 一〇五四 「寛永十四年」 六月 八日 島津家久書状
- 一〇五五 「寛永十四年」 六月十一日 土井利勝外三名連署書状
- 一〇五六 島津忠興譜
- 一〇五七 「寛永十四年」 六月十五日 近衛信尋書状
- 一〇五八 「寛永十四年」 六月廿五日 馬場利重書状
- 一〇五九 「寛永十四年」 六月廿八日 島津光久書状
- 一〇六〇 「寛永十四年」 六月廿八日 細川忠利書状
- 一〇六一 「寛永十四年」 六月廿八日 細川忠利書状
- 一〇六二 「寛永十四年」 六月廿九日 島津久通書状
- 一〇六三 「寛永十四年」 七月 二日 島津家久条書
- 一〇六四 「寛永十四年」 七月 三日 酒井忠勝書状
- 一〇六五 「寛永十四年」 七月 四日 長床坊書状
- 一〇六六 寛永十四年 七月 七日 某願文
- 一〇六七 「寛永十四年」 七月十四日 土井利勝書状
- 一〇六八 七月廿六日 馬場利重・榑原職直連署書状
- 一〇六九 七月廿六日 末次平藏直書状
- 一〇七〇 島津久通譜
- 一〇七一 寛永十四年 八月 三日 土井利勝書状
- 一〇七二 八月 四日 榑原職直・馬場利重連署書状
- 一〇七三 八月 五日 甲斐重政書状
- 一〇七四 「寛永十四年」 八月 七日 榑原職直・馬場利重連署書状
- 一〇七五 八月 八日 甲斐重政書状
- 一〇七六 「寛永十四年」 八月十四日 伊勢貞昌書状案
- 一〇七七 寛永十四年 八月十五日 島津氏掟書
- 一〇七八 「寛永十四年」 八月十六日 伊勢貞昌書状
- 一〇七九 「寛永十四年」 八月廿二日 島津家久書状
- 一〇八〇 「寛永十四年」 八月廿四日 島津久元・伊勢貞昌連署書状
- 一〇八一 「寛永十四年」 九月 四日 島津家久書状
- 一〇八二 「寛永十四年」 九月 五日 島津家久書状
- 一〇八三 島津家久譜
- 一〇八四 九月 七日 徳川家光御内書
- 一〇八五 「寛永十四年」 九月 八日 土井利勝外三名連署書状

- 一〇八六 「寛永十四年」 九月十二日 土井利勝書状
一〇八七 「寛永十四年」 九月十五日 島津家久書状
一〇八八 (記事) 北郷忠直譜
一〇八九 九月十五日 島津家久書状
一〇九〇 「寛永十四年」 九月十五日 馬場利重・榊原職直連署書状
一〇九一 「寛永十四年」 九月十九日 島津久元覚書
一〇九二 「寛永十四年」 九月廿二日 細川忠興書状
- 卷九十二
- 一〇九三 「寛永十四年」 十月 三日 寺沢広高書状
一〇九四 「寛永十四年」 十月 八日 島津家久書状
一〇九五 「寛永十四年」 十月十七日 細川光利尚書状
一〇九六 「寛永十四年」 十月十九日 島津久慶外二名連署書状
一〇九七 「寛永十四年」 十月廿一日 稻葉一通書状
一〇九八 十月廿三日 島津家久願文
一〇九九 (記事) 島津家久譜
一一〇〇 「寛永十四年」 十月廿九日 徳川家光御内書
一一〇一 「寛永十四年」 十月廿九日 土井利勝外二名連署奉書
一一〇二 「寛永十四年」 十月 晦日 土井利勝書状
一一〇三 「寛永十四年」 十月 晦日 島津光久書状
一一〇四 (記事) 北郷久加譜
一一〇五 「寛永十四年」 十一月 朔日 酒井忠勝書状
一一〇六 十一月 一日 島津家久書状
一一〇七 「寛永十四年十一月」 児玉利昌書状
- 一一〇八 寛永十四年十一月 七日 島津家久書状
一一〇九 (記事) 島津家久譜
一一一〇 「寛永十四年」 十一月 八日 板倉重宗外三名連署書状
一一一一 「寛永十四年」 十一月 八日 島津家久書状
一一一二 (記事) 讚良貞資譜
一一一三 (記事) 児玉利昌譜
一一一四 「寛永十四年」 十一月 七日 三原重庸書状
一一一五 「寛永十四年」 十一月十三日 島津久慶外二名連署書状
一一一六 「寛永十四年」 島津家久書状
一一一七 「寛永十四年」 十一月十六日 伊東祐久書状
一一一八 「寛永十四年」 十一月十七日 某書状
一一一九 「寛永十四年」 十一月十七日 島津家久書状
一一二〇 「寛永十四年」 廿日 島津家久書状
一一二一 (記事) 島津家久譜
一一二二 「寛永十四年」 十一月廿二日 土井利勝外三名連署書状
一一二三 「寛永十四年」 十一月廿三日 土井利勝外三名連署書状
一一二四 「寛永十四年」 十一月廿四日 島津久慶外二名連署書状
一一二五 「寛永十四年」 十一月廿四日 島津久慶外二名連署書状
一一二六 「寛永十四年」 十一月廿五日 島津光久書状
一一二七 寛永十四年十一月廿六日 島津氏条書
一一二八 「寛永十四年」 十二月 二日 土井利勝書状
一一二九 「寛永十四年」 十二月 三日 板倉重昌書状
一一三〇 「寛永十四年」 十二月 三日 石谷貞清書状

- 一三一 「寛永十四年」十二月三日 松平定行書状
- 一三二 「寛永十四年」十二月三日 松平定行覚書
- 一三三 (記事) 北郷久直譜
- 一三四 十二月三日 松平定行書状
- 一三五 「寛永十四年」十二月四日 細川忠興書状
- 一三六 「寛永十四年」十二月五日 島津家久書状
- 一三七 寛永十四年十二月五日 島津氏老臣覚書
- 一三八 「寛永十四年」十二月五日 島津久慶外二名連署書状
- 一三九 「寛永十四年」十二月七日 伊東祐忠外二名連署書状
- 一四〇 「寛永十四年」十二月七日 土井利勝外三名連署書状
- 一四一 「寛永十四年」十二月八日 阿部正次外三名連署書状
- 一四二 「寛永十四年」十二月十三日 土井利勝外三名連署書状
- 一四三 「寛永十四年」十二月十五日 細川光利書状
- 一四四 「寛永十四年」十二月十六日 島津久慶外二名連署書状
- 一四五 「寛永十四年」十二月十七日 島津久慶外二名連署書状
- 一四六 「寛永十四年」十二月十七日 寺沢堅高書状
- 一四七 「寛永十四年」十二月十八日 松平行隆書状
- 一四八 「寛永十四年」十二月十八日 阿部正次外三名連署書状
- 一四九 「寛永十四年」十二月十八日 牧野成純・林勝正連署書状
- 一五〇 「寛永十四年」十二月十八日 牧野成純・林勝正連署書状
- 一五一 「寛永十四年」十二月十九日 板倉重昌書状
- 一五二 「寛永十四年」十二月十九日 馬場利重書状
- 一五三 「寛永十四年」十二月十九日 榑原職直書状
- 一一五四 「寛永十四年」十二月十九日 石谷貞清書状
- 一一五五 寛永十四年十二月廿二日 島津久賀外四名連署書状
- 一一五六 「寛永十四年」十二月廿三日 秋月種春書状
- 一一五七 「寛永十四年」十二月廿三日 島津久元・川上久因連署書状
- 一一五八 「寛永十四年」十二月廿七日 新庄直綱書状
- 一一五九 「寛永十四年」十二月廿八日 有馬直純書状
- 一一六〇 「寛永十四年」十二月廿九日 相良頼寛書状
- 一一六一 「寛永十四年」十二月廿九日 台所書院覚書
- 一一六二 十二月廿九日 久志本常尹書状
- 卷九十三
- 一一六三 「寛永十五年」正月朔日 石谷貞清書状
- 一一六四 「寛永十五年」正月五日 相良頼寛書状
- 一一六五 「寛永十五年」正月五日 戸田氏鐵・松平信綱連署書状
- 一一六六 寛永十五年正月五日 鹿兒島賦所手形
- 一一六七 (記事) 殉国名數
- 一一六八 寛永十五年九月八日 智定坊供物請取状抄
- 一一六九 「寛永十五年」正月六日 平田宗乘目安
- 一一七〇 正月九日 川上久因書状
- 一一七一 正月九日 川上久因書状
- 一一七二 寛永十五年正月十一日 島津家久吉書
- 一一七三 「寛永十五年」正月十一日 総持寺・僧閑徹外四名連署書状
- 一一七四 「寛永十五年」正月十一日 琉球国司尚豊書状
- 一一七五 (記事) 島津家久公譜

一一七六		(記事)	島津光久譜	一一九九	正月廿一日	川上久國書狀
一一七七			土井利勝外二名連署奉書	一一〇〇	正月十九日	榑原職直書狀
一一七八	「寛永十五年」		島津家久袖判掟書	一一〇一	正月十九日	榑原職直書狀
一一七九	「寛永十五年」		川崎正直・佐々長次連署書狀	一一〇二	正月十九日	松平行隆書狀
一一八〇	「寛永十五年」		牧野成純書狀	一一〇三	正月廿一日	牧野成純書狀
一一八一	「寛永十五年」		馬場利重書狀	一一〇四	正月廿一日	林勝正書狀
一一八二	「寛永十五年」		土井利勝外二名連署奉書	一一〇五	正月廿二日	石谷貞清書狀
一一八三	「寛永十五年」		林勝正書狀	一一〇六	正月廿三日	戸田氏鉄書狀
一一八四	「寛永十五年」		松平行隆書狀	一一〇七	正月廿三日	細川光利書狀
一一八五	「寛永十五年」		榑原職直書狀	一一〇八	正月廿五日	松平忠重・伊東祐久連署書狀
一一八六	「寛永十五年」		松平定綱書狀	一一〇九	正月廿六日	牧野成純外二名連署書狀
一一八七	「寛永十五年」		戸田氏鉄書狀	一一一〇	正月廿七日	細川忠利書狀
一一八八	「寛永十五年」		川上久國書狀	一一一一	正月十九日	天草立軍衆賦
一一八九			新納忠清指出写	一一一二	正月十九日	島原出陣諸賦頭書
一一九〇	「寛永十五年」		松平信綱・戸田氏鉄連署掟書	一一一三	二月二日	島津久元書狀
一一九一	「寛永十五年」		島津光久書狀	一一一四	二月三日	川上久國・三原重庸連署書狀
一一九二	「寛永十五年」		川上久國書狀	一一一五	二月三日	石谷貞清書狀
一一九三	「寛永十五年」		島津光久書狀	一一一六	二月四日	松平定頼書狀
一一九四	「寛永十五年」		立花忠茂書狀	一一一七	二月五日	林勝正書狀
一一九五	「寛永十五年」		細川立孝書狀	一一一八	二月六日	戸田氏鉄書狀
一一九六			川上久國書狀	一一一九	二月八日	細川忠興書狀
一一九七	「寛永十五年」		天草立軍衆賦	一一二〇	二月九日	木下延俊書狀
一一九八			川上久國書狀	一一二一	二月十二日	島津家久書狀

一二二二	「寛永十五年」	二月十二日	島津家久書状	一二四五	三原某差出	二月廿八日
一二二三	「寛永十五年」	二月十三日	龜井茲政書状	一二四六	新納某差出	
一二二四	「寛永十五年」	二月十四日	戸田氏鉄書状	一二四七	平田某差出	二月廿八日
一二二五	寛永十五年	二月 廿日	島津家久遺言状	一二四八	木村某差出	二月廿八日
一二二六	「寛永十五年」	二月廿一日	松平信綱書状	一二四九	川田某・木佐實某連署差出	
一二二七	「寛永十五年」	二月十一日	松平信綱書状	一二五〇	福崎某・坂元某連署差出	
一二二八	「寛永十五年」	二月廿一日	細川忠利書状	一二五一	高尾野衆合戦太刀打・手負・首注文	
一二二九			清水氏年代記	一二五二	高尾野衆中失衆注文	
一二三〇	「寛永十五年」	二月廿三日	尚豊書状	一二五三	蒲生衆合戦太刀打・手負・首注文	
一二三一			島津光久譜	一二五四	是枝某等討取首注文	
一二三二	「寛永十五年」	二月廿三日	尚豊書状	一二五五	福崎某・村尾某連署実見証文	
一二三三			島津家久譜	一二五六	宮原某・村尾某連署実見証文	
一二三四		(記事)	島津家久諡号印下状	一二五七	三原某差出	
一二三五			島津光久祭文	一二五八	有村某差出	
一二三六		(記事)	北郷久直譜	一二五九	日高某外三名連署差出	
一二三七	「寛永十五年」	二月廿五日	島津久元外三名連署書状	一二六〇	大重某差出	二月廿九日
一二三八	「寛永十五年」	二月廿六日	戸田氏鉄書状	一二六一	村尾某差出	二月廿九日
一二三九	寛永十五年	二月廿八日	仁礼某差出	一二六二	寺師某差出	二月廿九日
一二四〇			市来某差出	一二六三	有馬某差出	二月廿九日
一二四一			新納忠清差出	一二六四	伊地知某差出	二月廿九日
一二四二			市来某差出	一二六五	田中某差出	二月廿九日
一二四三			大口衆合戦太刀打・手負・首注文	一二六六	宮原某外三名連署実見証文	二月廿九日
一二四四			上原某差出	一二六七	出水衆合戦太刀打・手負注文	二月廿九日

- 一二六八 二月廿九日 加久藤衆等合戦太刀打・手負
・首注文
島津光久譜 (記事)
- 一二六九 三月 朔日 村尾某実見証文
島津久元譜 (記事)
- 一二七〇 三月 朔日 市来某等合戦太刀打・手負・
首注文
島津久元譜 (記事)
- 卷九十四
- 一二七一 三月 朔日 有馬某実見証文
島津久元室寄進状
- 一二七二 三月 朔日 友野某実見証文
島津久慶・鎌田政統連署書状
- 一二七三 三月 朔日 藤井某実見証文
伊勢貞昌書状
- 一二七四 三月 二日 松平定行書状
松平信綱・戸田氏鉄連署書状
- 一二七五 三月 二日 松平定行書状
松平信綱・戸田氏鉄連署書状
- 一二七六 三月 二日 松平定行書状
川上久因外二名連署書状
- 一二七七 (記事) 島津光久譜
下曾祢信由外二名連署書状
- 一二七八 三月 六日 松平信綱書状
島津光久書状
- 一二七九 三月 七日 三原重庸・伊勢貞昌連署書状
島津久慶外三名連署書状
- 一二八〇 三月 八日 島津久元外四名連署書状
島津久慶外三名連署書状
- 一二八一 三月 八日 立花忠茂書状
島津久慶外三名連署書状
- 一二八二 三月 八日 立花某書状
酒井忠勝書状
- 一二八三 三月 八日 新納忠清書状
酒井忠勝書状
- 一二八四 三月 八日 島津久慶追悼詠草
島津久慶外三名連署書状
- 一二八五 三月 十日 土井利勝外二名連署書状
松平定綱書状
- 一二八六 三月 十日 島津久慶・鎌田政統連署書状
小笠原忠知外二名連署書状
- 一二八七 三月 十日 島津久慶・鎌田政統連署書状
金武朝貞外四名連署証状
- 一二八八 (記事) 島津光久譜
松平定行書状
- 一二八九 三月十一日 土井利勝外二名連署書状
新納忠清書状
- 一二九〇 三月十八日 山口直友書状
土井利勝書状
- 一二九一 三月 朔日 島津光久譜 (記事)
- 一二九二 三月 朔日 島津久元譜 (記事)
- 一二九三 三月 吉日 島津久元室寄進状
- 一二九四 三月 朔日 島津久慶・鎌田政統連署書状
- 一二九五 四月 二日 伊勢貞昌書状
- 一二九六 四月 十三日 松平信綱・戸田氏鉄連署書状
- 一二九七 四月 十五日 松平信綱・戸田氏鉄連署書状
- 一二九八 四月 十五日 川上久因外二名連署書状
- 一二九九 四月 廿一日 下曾祢信由外二名連署書状
- 一三〇〇 四月 廿四日 島津光久書状
- 一三〇一 四月 廿九日 島津久慶外三名連署書状
- 一三〇二 五月 十日 島津久慶外三名連署書状
- 一三〇三 五月 十三日 酒井忠勝書状
- 一三〇四 五月 十三日 酒井忠勝書状
- 一三〇五 五月 十三日 酒井忠勝書状
- 一三〇六 五月 十三日 島津久慶外三名連署書状
- 一三〇七 五月 十九日 勝連良繼外二名連署書状
- 一三〇八 五月 廿二日 松平定綱書状
- 一三〇九 五月 廿八日 小笠原忠知外二名連署書状
- 一三一〇 六月 八日 金武朝貞外四名連署証状
- 一三一〇 六月 十日 松平定行書状
- 一三一〇 六月 十日 松平定行書状
- 一三一一 六月 十三日 新納忠清書状
- 一三一二 六月 廿八日 土井利勝書状

- 一三二三 寛永十五年 七月 朔日 島津氏掟書
- 一三二四 「寛永十五年」 七月 廿日 板倉重宗書狀
- 一三一五 「寛永十五年」 七月廿四日 島津光久条書
- 一三一六 「寛永十五年」 七月廿四日 高野山連金院覚書
- 一三一七 「寛永十五年」 七月廿六日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
- 一三一八 「寛永十五年」 七月廿九日 島津光久書狀
- 一三一九 (記事) 北郷久直譜
- 一三二〇 八月 三日 島津光久書狀
- 一三二一 「寛永十五年」 八月 三日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
- 一三二二 八月 六日 高崎能乘・土持綱辰連署引付
- 一三二三 「寛永十五年」 八月 八日 島津氏老臣某覚書
- 一三二四 「寛永十五年」 八月廿二日 児玉利昌覚書
- 一三二五 (記事) 島津光久譜
- 一三二六 某覚書
- 一三二七 寛永十五年 八月廿五日 島津光久書狀
- 一三二八 八月廿五日 島津光久書狀
- 一三二九 「寛永十五年」 九月十一日 川上久国外三名連署覚書
- 一三三〇 「寛永十五年」 九月廿一日 島津光久書狀
- 一三三一 「寛永十五年」 九月廿三日 島津光久書狀
- 一三三二 寛永十五年 十月十五日 川上久国外四名連署掟書
- 一三三三 寛永十五年 十月十六日 川上久国外三名連署申渡書
- 一三三四 「寛永十五年」十一月 五日 島津久元書狀
- 一三三五 「寛永十五年」十一月廿一日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
- 一三三六 「寛永十五年」十一月廿三日 伊東祐久書狀
- 一三三七 「寛永十五年」十二月廿四日 島津久元・伊勢貞昌書狀
- 一三三八 「寛永十五年」十二月廿七日 伊勢貞昌書狀
- 一三三九 正月十二日 国分衆島原立交名
- 一三四〇 加世田衆一与軍役高帳

鹿兒島県史料編さん関係者

	調査課	副館長	館長		委員		顧問
浜新山晋坂新	田山桑四桃	島山下田本園	秀千健恵	隆本興光眞	芳村五原	野味口	即守克虎
平山下口納	島下田本園	秀千健恵	隆本興光眞	芳村五原	野味口	即守克虎	正次夫雄
公真由哲徳教	秀千健恵	隆本興光眞	芳村五原	野味口	即守克虎	正次夫雄	英理利
子代美哉幸義	隆本興光眞	芳村五原	野味口	即守克虎	正次夫雄	英理利	治三謙
田田井	芳村五原	野味口	即守克虎	正次夫雄	英理利	治三謙	
畠中上	野味口	即守克虎	正次夫雄	英理利	治三謙		
み三明	即守克虎	正次夫雄	英理利	治三謙			
ち代文	正次夫雄	英理利	治三謙				
る子文	英理利	治三謙					

鹿兒島県史料

旧記雑録後編 5

昭和59年12月1日 印刷

非売品

昭和60年1月21日 発行

編集 鹿兒島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿兒島県

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1丁目1番1号